





熊見ヶ原 佐野鹿十郎序

抑も世に四大恩あり天地國主父母衆生の恩なりとかや天地を以て最ごなし君恩親恩是に亞ぐ宜なり君父の仇は俱不天戴と、況んや武門武士の家に生れし者に於てをや

這般茲に釋出すは寛永年間に豪傑佐野鹿十郎なる者あり日夜武藝に心酔して精心錯亂なし終に家を隔れてより殆ど五里霧中を徘徊す時に義士あり是を憐んで醫療を加へしむ其恩に感激して是に酬ひんと欲す惡漢姦計を逞しうして毒刃に斃る是に依て主家の仇を報ぜんと言の豫讓に非ざれば困頓落魄遂に非人の群に入つて種々辛酸を嘗め時としては日本の道場暴し天下に敵なし鬼神と稱されたる佐藤登之助を一撃の許に打据へ又は山賊を殺して諸人の難を救ひ妖怪變化に邂逅して更に屈せず又は天上山



一
二
三

特 9
122

佐野鹿十郎

佐野鹿十郎

第一席 佐野の由緒

一立齋文車講演
官澤彦七速記

扱申し上げます茲に寛永の頃ほひ薩州の番に佐野出羽守常安と云ふ人がございました遠く其先祖を尋ねれば北條五代最明寺時頼公に仕へたる佐野修理大夫常世の家にして中興の祖と云へるは慶長五年伏見太鼓の丸にて討死を致したる佐野肥後守常昌と云ふ人の血統でございまして薩摩家に仕へ佐野出羽守常安と申し二人の子がございます總領を主水常清と申し弟を鹿十郎常秋と云ひ兄弟ともに父の氣性を受継ぎ伶俐發明に致して武藝十八般の道を心掛けて居られます此鹿十郎の母親は或夜白き鹿十郎

に勇を奮つて猪を退け時に或いは仇に計られ大井川底の藻屑と化せんとせしを天斯る忠士を救はざらんや僅かに身を以て遁れたるか如き殊に孝子父の仇を報せんとして反つて仇に討れ再たひ孝子現はれ是を扶けて遂に越前熊見ヶ原に於て忠臣孝子君父の仇を討て本懐を遂ぐるに至る忠孝兩道の美談にして此間婢媾たる美人現はれ又は奸佞邪惡の曲者出で良士冤を呑で主家を亡命するか如き殊に講談師が獨意の辨を以て縷述なしたるを速記せしものなれば其趣味満々たるは言を俟ず敢て我田引水に非ず提灯持ちに非ず一度緋かは巻を捲うを忘るゝに至るは證して疑がはざる所なり書肆が需に應じて本編の概梗を述べ序に代る

林鐘上浣

櫻哉居士

佐野鹿十郎

を養ひたる夢を見てから姪を致して産落したるのは男の子
夫れゆゑ鹿十郎と名を命けたのであります寛永の二年に至つて
兄は二十一才弟は十八才と相成り此鹿十郎は其氣質大膽卓落に
して神影流の剣術は九才の時よりして學び又學文も能く修めま
したるので家中の人々深く是を感じ佐野の奇童あり佐野は良
子を持れたりと賞めざる者はない位ぬ殊に美男に致して家中の
人々は皆是を羨し子に貰ひたきものなぞ、常に嗜さをのみ致して
居りますす丁度其年三月の事で諸所の櫻満開を致し春は諸所の山
々も堪へられぬば吹出しにけり恰かも氣候は彌生の中旬人の心
も浮立て花見ん爲めの人の山彼方此方と駆廻り殊の外雑踏なす
中に鹿十郎は一間に閉籠り學文のみに耽り花を見んかど、云ふ
情弱の心更になし然るに御城下に澤田と云ふ所あつて夫れには
入橋の社より其境内の櫻満開を致して居ります此入橋の社と申

佐野鹿十郎

するは備前國宇佐八幡を茲に移し奉まつりしものであります此
社へ老たるも若きも皆日毎に花を見に参ります兄の主水は
弟の身の上を案じ鹿十郎の居間へ参りまして主時に鹿十郎や
御身は若年に致して武藝の道を心掛け學文にのみ耽るは感心で
はあゝるが夫れが爲め身体の運動も付す自然顔色も悪い途には病
發致さんども限らん餘り一心凝固まると宜しくさい時として
風に常に花を見見るも身の保養であるに依て幸はひ今日八幡の境
内へ花見に参り保養を致してはどうか云ふものぢや鹿十郎私
しゆゑに兄上御心に配下され如何にも有難う存じます左様なれ
ば兄上御同道を下さいませうか主イヤ、拙者は上の御用も
あるに依て下部二名を召連れて参るやうに鹿十郎然らば兄上の仰
せに背き難く如何にも参るでござらう是から兩親にお話しをす
ると夫れは結構も事だ早速参るやうにと云ふので黒羽二重の衣

佐野鹿十郎

類を著し紋付きの羽織編笠を被り大小を横たへ下郎二人を連れ
て澤田八幡へ参詣に参り裏へ廻れば一面に櫻花満開を致して見
世物もあり此方へ來れば手品を使つて居る向うへ行けば繩抜け
とさまざまの物があるのて皆人々が集つて見て居る餘り雑踏を
致すので鹿十郎其所に發聲張りの茶屋があつたから夫れへ這入
り鹿許せよ ○入らつしやいまし 鹿茶を呉れ是から茶を喫
み花を詠めてはる所へ六十ばかりになる 爺垢染たる衣類を着し
太鼓鼓を脊負ひ十二三にある小僧が刀を細で結ひ是を背負て青
竹を提げて來る爺は頻りと鹿十郎の様子を見て居たが 爺是は
評判の輕業師でございます錢さへ下されば奇々妙々なる輕業を
御覽に入れますと呼はるので鹿十郎も側へ來たものであるから
百文の錢を出してやると 爺有難う存じますと其所へ竹を建て
小僧が其竹へ登る様子如何にも早業 小此跡は劍の扱かひを御

佐野鹿十郎

覽に入れますと三本ある所の劍を天に向つて投げ下りて來るの
を受取り又投げて受け又投げたのも美事受け三本あがら些ども
大地へ落さず是を請る見物一同は手を拍てヤンヤと賞める鹿十
郎は 鹿コレ 茶を飲め 小有難う 鹿菓子を食べ 爺有難
う 鹿汝が早業誠とに感心である實に目を驚ろかすばかり如何
して斯る修業をしたか 小へエ旦那様お尋ねに預かつては恐れ
入ります私くしが稽古と云ふのは四ツか五ツの時から親父が教
へて呉れ覚えが悪ければ頭を打れる夫れゆゑ殿れるのが辛さに
自然と覚ええます一番初めが逆立ち夫れから蹴ちよこ立ち或ひは
天狗立ち躰立ちとやり直きに夫れは覚ええます夫れからは劍の舞
を習つたのでございます 鹿成程汝の云ふ通り修業はしおけれ
ば往かんもの何と云ふ者だ 小兼松と云ひます…… 鹿ウム貴
様の身が透を窺がつて一本打込んで見たいと思ふが旨く身の太

佐野鹿十郎

刀を遁れれば又褒美を遺るがせうぢや身の太刀を一ツ請て見ん
か兼夫れは面白うございませうすか私くしは固より劍術を學んだ
譯でございませうからお對手は出来ませんが身を轉して逃げま
せう旦那は棒を持って打て入らつしやい私くしは脱度身を開ひて
逃げて御覽に入れませう何所までいも私くしは逃げますサア討て
入らつしやい鹿併し無暗に逃げては際限がない方角と塙所を
極めて置かう此鳥居と彼の杉の木がある所までだ夫れより外へ
其方が出れば其方の負になるのだ宜いか兼宜うございませう下
部二人は夫れへ出て下旦那様斯様を輕業師を對手に致して劍
術の極意を現はしてはお父上の御耻辱又兄上様の御身分にも
關はりませうから先づお止まりが宜しうございませう鹿イヤ
業を試すのには不思議はない固より劍術に上下の差別はあらず殊
に今日一日は御兩親又兄上のお許しを受けて遊興に參つたのだ

佐野鹿十郎

其遊興を致すに依て其方邊咎めるに及ばん……コレ兼松此鳥居
と那の杉の木までの所だ是より外へ出てはならんぞ然もないと
其方が負けにゐるぞ兼宜うございませう鹿宜いか兼サアね
出でささい鹿十郎が木の枝を持って彼を討んとすると彼中々の者
と見へヒヨイ／＼身を轉し又打込んで來るのを彼方此方と身
を轉し逃げ廻るのを逆立て逃し彼の杉の所に來るが早いかな
の木へ登つて仕舞た其早業猿の梢を傳うが如く手にも止らず
目に止らず夫れより又も彼方此方と逃げ廻るに鹿十郎は身体疲
れ大汗をかいて鹿モソ宜い兼松是へ參れ木を降りる兼
旦那様は負でございませうか鹿宜い兼松是へ參れ木を降りる兼
業を奇したり我れに取つては天晴激導職感心致した兼是は且
那樣恐れ入りませう好きこそ物の上手なれとか申して怠たつては
狂けませんが厭ず習つて居る内に又自然に覺えませう鹿宜い兼

佐野鹿十郎

其一言に感ずるは只借ひらくは斯様ある所の輕業郎として妙術ありあがら乞食非人と同じに僅かの錢を申し受け是を諸人に見せるとは情けなきし何か外の事にて是だけの働らきをせしたらんや云ふものぢや小僧は夫れへ進み出で小旦那夫れは貴所から見ればさうではございませうけれども人間には徳不徳と云ふ物があつた徳のある人は能くなくとも綾羅錦繡を身に纏ひ口には美に飽き暑さ寒さも知らず樂に此世を送りますすが我々どもは夏にあれば破れた單衣一枚冬にあれば布子一枚不味物を食つて居りますすが人間の一生は仕方がないか大名でも乞食でも矢ッ張人間味の魂と云ふものに變りはないのでございませう亦私し達も不味物を食つて居れば主もなれば家來もさい金もあければ氣味も食へる譯のものではなれ身分があつても無つても同じ事不味物を食つて居れば主もなれば家來もさい金もあければ氣味も

佐野鹿十郎

し先づ斯う云つたやうか譯でございまして天竺浪人で一世を樂に世を送るは壽命の樂りかと思ひます鹿ッム面白ひ汝が一言實に感心な奴だ是を取らせると紙に包んで小判を一枚遣つた爺是は旦那様有難う存じます小有難うござひますと二人の者は禮を述べて立歸つて仕舞う夫れより鹿十郎は我が家に立歸り一間の内閉籠り鹿僅か漸々十二三の小僧が那の通り早業劍を扱ひ身を轉しア、感心な者我れ未だ彼だけの術に至らず我れも早く劍術の妙技に涉りたひと日夜心勞致して居られました然る所同藩に奥村大炊助と云ふ者の伴に奥村泰藏と云ふ者あつて鹿十郎が御家中にて評判宜しきを妬み泰家中の者は彼奴ばかりを賞めくさるぞうか致して彼に恥辱を與へたひものだと人を嫉む宜しくなひ奴或時の事下郎に何か計畧を授け鹿十郎の所へ參つて泰鹿十郎殿御徒然か入ッ代川に大分魚が居るさうで

佐野鹿十郎

モウ四月と云ふ氣候は丁度宜し如何でござる釣に参らんか此人
身分のある人の忤ゆる鹿十郎辭む譯に往かず釣は好まんが鹿
然れば御同道を致さう手前家來を…… 泰イヤ家來には及ばん
拙者は下流の源助を連れて参る 鹿然らば拙者も一人の僕を運
れて参らうと二人揃つて二人の下流を連れ八ッ代川へ参りまし
た此釣と云ふものは氣長でなければ出来なひもの然れば或人の
詠んだのに
大川や鯉釣る氣がが見る氣なが
と云ふ句がござひます或人が両國の川へ來ると百木杭の側で釣
をして居る人がある見ると桶の中に水が溜入つて居るが魚は一
匹も居さひ其人千住へ行つて用達を濟せ歸りがけに亦来て覗い
て見ると水ばかりで魚がさかいから釣師に向つて貴所は今朝早く
から來て未だ魚が釣れませんか一日掛りで私しは行き掛けと歸

佐野鹿十郎

り掛に見ても魚がありませんが夫れで釣れるのですかと聞た所
「元氣云つちやア往けない鯉と云ふものは三日に一ツ釣れば宜ひ
のですと云はれたので其人も驚ろいたと云ふ事がありません然れ
ば釣は氣長でなければ往けません鹿十郎は活潑であるから釣れ
さいので痛に障つて堪らさ 泰殿は平氣を顔をして釣をして居
りますスルと泰殿の下流源助と云ふ者十手の上でコックリ
居眠りをして居たが順てコロコロツポチャンと川の中へ墮落
た 泰殿は大變拙者下流川へ落入つて落命したとあれば父へ對
し申し譯さしかれども某がし水練を心得ざれば救う事能はずと
うか鹿十郎殿に救ひ下さるやうに頼まれて見れば仕方がない
鹿宜しうござる衣類を取つてかき取り捨て身を躍らして鹿十郎
川の川へ飛込んで救上げんとすると源助は鹿十郎の体へ雅か
り抱り付き段々深間の方へ引入れやうとするから鹿十郎大力を

佐野鹿十郎

れは何ぞ恐れん源助を目よりも高く差上げて 鹿泰藏殿下郎を
士手へ投り上げるからお請取りなさい 突然土手の上へボカリ投
り上げたのを泰藏是を請取た是を見て居た見物はヤアソヤと云
つて賞める、泰藏腹の中ではは大變斯程力のある奴とは思はるか
つたとうも恐ろしい奴だと臆を潰して居ります 忽ちの間に鹿
十郎陸に昇り衣類を着して 鹿泰藏殿仰せに依てお助け申した
泰是は泰は泰とけあし 今日貴殿かかりせば源助は土左衛門にあるべ
きをお助け下され何ともね禮の申しやうもござらん……源助是
へ參れ扱々其方は白痴ぢやあ居眠りをして川へ落るとは何の事
だ 巳れのやうな者は愚鈍の極ありと叱り付けた鹿十郎改ため
て泰藏に向つて 鹿御貴所の下部は下拙へ何か意恨でもあるか
して其がしを深間へと引入れの力競べにては拙者も閉口致
した だが透々土手へ投げ上げて仕舞ひましたと云ふ譯で右やう

佐野鹿十郎

の事を致されしかお糺しを願ひたいに怒りを現はして白眼付
けたるに泰藏は大變だ計略が破れて仕舞たとは思つたが 泰
源助貴様のやうな白痴はあひあ危うきを助けて下さる恩人を
深間へ引入れんと致すは不屈至極の奴だと扇を持って二ツ三ツ頭
を打つた 源藏とに恐れ入りましてございますか私くしは取逆
せて前後忘却致し助けて下さる御恩人とも心得ず右やうの事を
致し恐れ入りしましたら御勘辨を願ひます 泰アイヤ鹿十郎
殿下郎の悲しさに逆上なし助け呉るゝ方とも心得ず右やうの
失禮を致したと申すが取るに足らん下郎の事どうか御勘辨を願
ひたひ鹿十郎は腹の中でア、是は主従懇議の上何か私に意恨が
あつて斯様の事を致したとは思つたが面に出さず 鹿左藏か然
らば宜しひ是にてお別れ致すと其儘立歸りましたが是が病の基
とあり其夜より發熱なし一方ちらん容体あれば其翌朝醫者を招

佐野鹿十郎

診せられた所が醫者は容易ならん熱だ薬りは早速差上げるが餘程大切にしなと往けあい何分此熱を脱らさければ命も關はる云ふので父母の心配は一通りならず是から醫者が半月ばかり薬りを服せると宜い鹽梅に熱は冷めて来たが遂々逆上して仕舞ひ人さへ見れば悪口經言を云ひ罵しり狂ひさうかと思ふと家を飛出して既から馬を曳出し夫れへ乗つて御家中を駆廻り暴を歩いて歩くので兩腕は如何したものであらうかと思ひ茲に熱田玄順と云ふ名醫がおりますから此玄順に診て貰つた所玄は是は恐ろしひ邪熱で狂氣が丸で顛倒をして居るのだ容易には納まらんが成たけ静か座敷半へ入れて外へ出ささひやうにして置が宜ひと云ふので早速座敷半を拵らへ夫れへ鹿十郎を連れ番人を付けて置ました或時兩腕は鹿十郎が座敷半の側へ来て

佐野鹿十郎

るに發狂し人事を辨せんと云ふは何分ちや父母兄弟を顧みず武士の身に耻べき事ではさひか汝は薩州にて人も知つたる佐野出羽守が悍なり汝九才よりして劍道學文を一心に凝固り夫れが爲め情心錯亂おしたるものと見へるか甚はだ見苦しい其妻能く精神を鎮め一日も早く全快致して呉れと父の常安言葉靜かに諭すのを母親も口を添へ母コレ鹿十郎能く承たまはれ我れは其方を生み設けたる母あるぞ又是に居るは兄主水なり只今父上の仰せの通り武士の家に生れし者狂人白痴とあつては一家の耻大主へは不忠御家中の罵辱人々の笑の種武士は劍を以て魂の魄となす其方心の劍を以て病ひの魔を退治致し少しも早く全快なし双親に安心をさして呉れよと母親の優しき言葉も當人には一向分らさひ大口を開いて鹿ゲタくくど笑ひ出したかと思ふと又双親を白眼つけ鹿拙者は佐野家の次男鹿十郎なるぞ汝

佐野鹿十郎

等此所に來つて無禮を申さば一掴みに掴み殺すぞ一同は只れて
仕舞ひ爲す所を知らず其儘に座敷半を立去りましたが夫れから
は番人を二人宛付け充分に守せて置きました所が鹿十郎が亂心
をしたと云ふので腹の中で泰藏は喜こんで氣味が宜ひと思ひ佐
野の家へやつて参り 泰藏お願申す……鹿十郎殿何か御病氣
の由を見舞に罷り起した是は有難う存じます彼は發狂を致しま
したのでお目に掛る事にもお成り兼ねます 泰何らか一寸お見舞
ひ申さう明友の間柄お目に掛らんと云ふのも實が面白いとツカ
座敷半の能へ來ると鹿十郎大の眼を見開きハツタと白眼つけ
鹿十郎泰藏汝八ツ代川に於て下郎の源助と討り能くも我れを深
間に引入れ殺さんとばなしたる予憎ツくき奴汝が首捻切つて呉
れるサア是へ來ひと突然座敷半から飛出さんと云ふ有様に泰藏
アツと驚るき其儘逃げ出して仕舞た鹿十郎亂心致して居るが彼

佐野鹿十郎

が好意を以て深間に沈めんとせられしを心外に思ひて夫ゆゑに
斯様病氣にあつたと云ふのを虫が知つて居ると見へて斯の如く
悪口を致したものと見へます然るに其年十一月十六日の夜霜降
りて東北風強く其寒さ一通りではとさひませせん實にや
鼻とぐが如し霜夜のからツ風
どうも恐ろしい風で寒い一同の者も今夜は何事もあるまいと思
ひ油断をしてグツスリ寝込んだ其夜半鹿十郎大力を現はして座
敷半を蹴破り還電に及ぶ次第
第 二 席 鹿十郎の破半
世の中に剣道又は學文にのみ凝固まり亂心を致した者も随分と
さいます備前伊豫守様は學文に凝固つて亂心をあされ後御全快
をなすつた事もおさひます又柳生飛騨守の總領重兵衛と云ふ人
は三代將軍家光公の御指南番をも致すべき身分であるのに剣道

佐野鹿十郎

此處に發狂をして仕舞ひ江戸の屋敷に置く事能はず大和國添上郡下榎木坂の陣屋へ預け置きましたる所父飛彈守殿此事を御心配遊ばし御殿へ出て居ても何となく氣も勝れず顔色が悪ひスルと品川東海寺の名僧澤庵大禪師柳生殿に向つて澤庵時に御遊は近頃息吐きと申し顔の色悪ひ何か心勞の様子手前にお話ささひ柳有難うござる實は手前に三人の子がおります次男は病身に於て三男は劍術嫌ひ頼みに思ふは總領の重兵衛光義劍道自慢より狂人とあり江戸屋敷に置く事能はず大和國下榎木坂の陣屋に遣はしてござるが夫れを苦勞に致すので自然に顯はれたのでござらう澤庵夫れはくお氣の毒千方夫れしきの事で發狂をさされたならナニ造作はさひ私しが一寸行つて治して進げやうから御心配御無用にござれと直ぐに寺へ歸り供をも連れず頭陀袋を首に掛け古笠一蓋杖一本細味一枚にて大和國榎木坂の陣

佐野鹿十郎

屋へ罷り越し柳生重兵衛殿へ面會を申し入れると番の者澤庵と云ふ者だ澤庵我れは澤庵だ番ナニ澤庵……澤庵何ぞは食ひたくさひ澤庵何を云ふ白痴め品川東海寺の澤庵禪師だ重兵衛殿へお目に掛りたひ取次ぎを致せ番どうも澤庵だけあつて推石が強ひ乞食坊主の癖に……澤庵何を云ふ是から番人仕方がないから上役の者に云ふと夫れは容易ならん御名僧である一人の武士夫れへ現はれ武大禪師には能うこそね出で下された主人重兵衛殿は當時發狂を致して居るのでれ目通り相成り兼ねず澤庵イヤ夫れは存じて居る江戸表殿中に飛驒殿とお目に掛り重兵衛殿亂心を餘程御心配さすつて居られるに依て夫れゆゑに重お治し申さうと思つて參つた武併しながら亂心を致して居るので貴僧へ對し反つて亂暴にも及びあは恐れ入りませす澤庵イヤ我も百二十里からの道を參つた者ぞうか取次で貰ひたい武左

佐野鹿十郎

様でございますか然らばお待ち下さい……エ、申し上げます
重何ちや武品川東海寺の澤庵禪師お目通りを願ひます重
ム澤庵坊主か彼奴に逢ひたくはあひが来たものだから是へ通せ
武どうは是へお通り下さい澤左様か來て見ると疑はれど生
へ瘦せ衰るへ色蒼冷て居る澤ヤア重兵衛亂心あすとは情けな
し餘り剣道に凝固まればとて武士たる者が發狂あすは淺間しい
ではなひ心注けさつしやひ重黙れ坊主我れ亂心は致さん劍
道試合とあらば如何ある英雄豪傑とても後れは取らんサア坊主
一勝負しろ澤是は怪しからん我れは出家の身の上第一に保つ
は殺生戒立合ひに参りしに非ず我れ茲に一首の歌あり此歌の心
得説が參つたらば勝負もせん又問答も致さん此歌を讀んで心を
釋け短冊を出して夫れへサラ〜と書き重兵衛に渡した重兵衛
夫れを見るとき

佐野鹿十郎

侍ザむお行くお戻るな居座るお
寐るな起るお知るも知らぬも
サア重兵衛殿分らない家來を呼んで重此坊主を取逃さんやう
殿しく手常てをして置けと申し付け是から一間へ這入つて毎日
此歌を出して考かへて居りましたスルと段々劍術の事を忘
れ氣が落付たので御本腹あすつた重誰ぞ參れハ、家來が夫れ
へ出ると重此歌を身に興へたは何者だ品川東海寺の澤庵様が
お出でになり君へ夫れを差上げたのでござひます重左様か
澤庵禪師は如何致した殿重に留め置けどの仰せ依て留置さま
してござひます重ア、夫れは面目次第もあひ武士に生れし者
が亂心を致すとは如何にも耻入る澤庵大禪師を是へお通し申せ
と夫れから澤庵禪師にお目に掛り貴僧お止まり下され某がしの
心を落付け下し置れ忝じけなひと厚く願を述べ重兵衛殿全快を

佐野鹿十郎

致したので澤庵禪師も尋こんで立歸られたと云ふ事がござひま
す。我も哀れなるは鹿十郎座敷半の内閉籠つて居りました。其
夜番人の透を窺かひ座敷半を蹴破つて何れども早く逃去つて仕
舞ひました。夜明けから番人が見ると鹿十郎の姿が見へさひッ
ア大變だと云ふので此事を兩親に告げるから兩親を始め兄の驚
ろき一方から早速八方に人を走らし手分けをして尋ねたが何
所へ行つたやら一向に分らな大方は鹿十郎淵川へ身を投げて
相果てたであらうア、モウ是非に及ばんと殿へは目なひが此
事をお届けに及び又親類縁者と相談の上鹿十郎が出た日を忌日
は座敷半を蹴破つてより日となく夜となく足に任せ肥後國他多
郡熊本の城下へ來り彼方此方と往來を厭ひ小供達は石を投げ
付け百姓は鋤鉞を持ち追駆け田地畑畑を暴す此奴は野暴しだッ

佐野鹿十郎

レ叩殺ろせとワイ、立騒ぐのを鹿十郎は物ともせず彼方此方
と投げ付け退けド、駈出して仕舞に野原へ來て草臥たど見
へ其儘野原へ寐、仕舞う目が覺めるとヌツクリ起上り大音揚
鹿我れを斯様な所へ能くも寐かし居つた無禮者めと獨り言を云
つて歩き又田圃の中へ駈込むから百姓が「ソレ又來た野暴しだ
叩殺せとワイ、」騒ぐ鹿十郎は町道をド、駈出して來ると
百姓達は大勢で「ソツと」追て參ります所へ年
齡五十恰好に相成る武士人品骨柄賤しからず下部を一人連れ此
体を見て足を止め武「コレ」俱の者彼亂心を致して居ると見
へる未だ年も若ひに氣の毒千万定めし親もあらうに一命に取止
らん事を云つて居る武士は相見互ひ武士に相違さひ手當てをし
て遣はせ此人こそは細川越中守が指南田傳五右衛門政春と
申し、して至つて情けある武士隣れあ者は目を掛けてやると

佐野鹿十郎

云々... 者武士の俸に相違... 十郎を確かと押へた宜ひ... 百姓がワイく... 居るのだ手前達... 顔は知つて居る... ので傳イヤ是は氣が狂つて居る... て醫者に掛け手當てをしてやる... より尋ね参りし者あらば細川越中守指南... りまして幸はひ城下に佐藤立良と云ふ名醫があるに依て早速是

佐野鹿十郎

を呼寄せ手當てを頼んだ所立良鹿十郎の様子を見て浮田に向ひ... 初此人は中々勇氣があり武藝に凝つて斯亂心を討したが悉とく... 氣を落付けて成たけ人を側に寄付けず静かにしてお置きさる... が宜ひ又食物も氣の付いた時に食べさせるやうか出入りの... 人がしあひ閑室へ入れ置て下さるやうにと藥りを呉れたので夫... れから醫者の云ふ通り充分に手當てを致しました又其後醫者が... 参りまして鹿十郎の様子を見たが醫者切浮田殿最早相成たる... 上は某がし家に秘傳の藥りがある是を二三服差上げるから夫れ... を飲んで二日も経つ内には治るでござらうと妙藥を與へて呉れ... たので是を服せると不思議にも黒じり騒ぐやうさともなく或日... 氣の落付て居る時に傳五右衛門來つて様子を見ると大分落付て... 居るのでア、宜ひ蓋然だと思つて居ります丁度日數八十日ばかり

佐野鹿十郎

りにして薬も能く看病も届ひたものと見へ心落付き元の通り
に本思致しました付の者傳五右衛門の所へ参り大分口の利
やうも穏やかにあり今までのやうにキヨロくも致しません
かに赤もましてござひますと云ふのを聞て傳五右衛門大いに喜
こび夫れより鹿十郎の御へ参り傳五右衛門の心は落付たか
雨手を仕て平伏なせば傳五右衛門の心は落付たか
れ鹿十郎は宛然夢に見れば泥に塗れ破れし衣類を着し居り暫らくは
又己れの姿を見れば泥に塗れ破れし衣類を着し居り暫らくは
涙に暮れ居たりしが鹿十郎は
知らず抑も茲は何と云ふ所にて何れのお居敷にて候や傳五右衛門
當城を何れと心得んのも無理はない又拙者も身知り居らん我は
肥後國熊本細川越中守が指前田傳五右衛門と申する者今を
去る事三月跡野原を断廻り農六郎に追廻され居りしを不便に思

佐野鹿十郎

以下を共に城内へ連れ来りせうか若ひ身家の事少しも早く
腹させたひと名醫を頼み療治を加へしが其功あつて心落付き元
の如くに快致したか是を聞たる鹿十郎涙に掻き
り前後も辨まへず已れが事さへ一切分らず某がし武士の家
れて者にて微心なすとは面目次第もござらん又見す知らずの某
がしを斯まで厚きお手當てを下し置れし段何とも以て忝じけ
く此御高恩は生々世々忘却は仕まつらん傳五右衛門左様
に立歸りおは何よりの事シテ御身は何れの何と云ふ者の伴ある
や名を名乗り呉れよ鹿十郎は思ふやう今茲にて實名を明さば主
君の御職兄弟の耻辱にもある事あれば是は云はれん又當家の
主人は世にも有難き人故に此身は一命もあらざりしに狂人と
知つて斯までに手當てをさして木腹致させ呉れしは此身に取つ
ては命ちの親此大恩如何で忘れべきや今父母の名を云はれ

佐野鹿十郎

の上途是は反つて名を隠し斯ばかり大恩受けたる此人に何か
を致さんければあらん又我れども家中の者の手前何目あつ
て立歸れやう是に依つて父母兄弟はなき獨り者と云つて浮田の家
來どあり身名を抛うち此恩を返さねばならんと義に強き人ゆゑ
腹に斯思ひ定め鹿藏とにはや驚ろき入つたる是までの我が行
跡夫れをお救ひ下し置れて御高恩は海より深く山より高し此御
恩は死すとも忘却は致さん拙者何をか隠さん日向佐渡原の郷士
にござる家は甚はた貧苦にして十才の時両親に訣れ去る屋敷に
奉公をさして居りました名は鹿藏と申し當年十八才にござひま
す三月餘りも厚き御介抱に預かり一命を助け下されて御恩人
此儘に歸ればとて親兄弟もなき身の上況て屋敷を脱出てより
一日數も経れば立歸りても詮方なし又命ちの親の御恩人へ万分の
一の御禮も仕まつりたく候へば此儘下郎にお仕ひ下し置れます

佐野鹿十郎

れば此上の仕合せにござると手仕て逃べるを聞て傳五右衛門
大ひに喜びこひ傳ア、夫れは感すべき心掛け人は斯ありたきも
の如何にも汝が望みの通り召仕へるであらうと鹿十郎は鹿藏と
偽名をさし傳五右衛門の方にて下郎とさつて奉公住を致しました
世が世であらば薩州家にて八千五百石取り佐野出羽守が次男な
りしも今は果敢なき下郎の身の上と相成り茲に三年の星霜を経
て寛永五年と相成りました然るに茲に同藩中塚原卜傳流の仕手
大達七郎右衛門と云ふ者あり此奴餘り實しくさい者で己れ一人
武藝者の積りで我れより上に達人なしと思ひ傲慢無禮強慾非道
の奴にて劍術を賣物にして居て教へ付届くの悪い者は碌に教へ
けの宜い者には念を入れて教へ付届くの悪い者は碌に教へ
いから浮田傳五右衛門の方へ弟子が多く付くので大達家の門弟
は常に浮田の事を悪く云つて居る 先生 七何だ ○傳五右

佐野鹿十郎

衛門は古参ゆゑ先生よりも高を餘に取御家中で評判も宜い
先生は新参ゆゑ高も少なく傳五右衛門程に用ゐられずお氣の毒
です今度先生某の御前で傳五右衛門を一ツ打込んで先生立身
を
あすつたらどうです七然ればあり何か折あらば彼を打込んで
殿より思費に預からんと云ふ心底で居るのだ
○早く打込んで
やつたら宜うございませうと云ふのを浮田の門弟が聞いて傳五右
衛門に向つて
○時に先生大達と云ふ奴は憎い奴で先生の事は
かり悪く云つて居ります彼を御前に於て打込んで赤ッ耻を一ツ
搔しておやり遊ばせ傳イヤお前がさう云ふのは尤もではあ
るが人と云ふものは百人の内五十人好く云ふ者があれば宜い
だ夫れを三十八悪く云つて七十人が賞めて呉れば結構である
大達先生のお弟子が此方をどのやうに悪く云つても立腹しては
あらんぞ向うのお弟子を悪く申してはならんぞと申し付けに

佐野鹿十郎

なる位然るに片大達の門弟に立花金彌と云ふ者がある是は宜
しくかい奴ではあるが殿のお氣に入りでございませう所が又同
中に二百石取りの武士多田與太夫と云ふ者あつて其娘におみつ
と云ふのがあるが是は至つて美女で立花金彌人を以て此娘を嫁
に貰ひたいと申し入れたがお志ざしは忝じけあいが娘は浮田傳
五右衛門の侍民十郎殿と許嫁になつて居るに依つて此儀は断り
申しますとピツタリ断はられたので金彌落膽をして民十郎の爲
めに貰う事が出来ないかと是に依つて民十郎を憎み何卒致して彼
れを亡き者にしておみつを我が妻にせばやと茲に立花金彌悪計
を廻らすの一條

第三席 金彌の悪計

世の事に迷うと云ふは恐ろしいものにて多田與太夫の娘みつを
浮田の總領民十郎に取られるのは如何にも残念なりと金彌茲に

佐野鹿十郎

悪計を巧み大達の方へ参りまして 金先生 七是は金彌能う参
つた今日は一口呆り上げてやうと心得る 金夫れは忝じけないと夫
れから酒肴の仕度をして酒を飲み初めた 金時に大達先生武士
として得たき物は剣でござるか夫れがゆゑに武士の理は剣と
云つてあるが御同様大小だけは天晴なる業物を所持致したいも
のでござるか 七然れば源家にては髭切丸或ひは藤丸又平家に
ては小鳥丸と皆名剣がござる何卒某がしも正宗の刀を得たくは
思ふが正は千両と云ふ大金茲にお家の重寶旭丸と云ふのがあ
るが是は寶龍齋五郎入道正宗の作にして中々金目な物ア、心に
任せんのは世の中の習ひさうか斯う云ふ剣を求めたいと存じて
居る此言葉に金彌占めたりと思ひ 金御尤ももの次第武士は刀
剣を好むは當り前の事某がしの意見を引ひ玉はらば手前に能
き剣が得られるが如何でござる 七お手前の意見と云ふのは

佐野鹿十郎

う云ふ所だ 金然ればと上つて耳前に口を當て 金旭丸の一
刀を盗み出して先生差料になすつたら宜しいであらう何も二百
石位の高は何所へ参つても先生は取れる其劍を盗み出すに拙
者計略あり 七かれども要心重なる寶珠の内にある物何とし
て手に入れる 金是は先生常の御氣性にも似合ん何も遠慮を
さる事はない拙者が刀を盗み出すに依て彼の劍手に通入らば茲
を浪人して何れへでも参り来だ我地反亂の節何れへでも奉公住
の出来ん事はさい其手段と云ふのは斯様 云々と計略を申し
入れたのは民十郎は御寶珠此寶劍を奪ひ取れば民十郎の落度
とさう腹は遅れん然れば懸の意恨が叫れると云ふ金彌が悪計
でございます七郎右衛門手を拍て喜こび 七扱も御身の計略奇
妙く何の相談を致しましたか此兩人打合せをさし 七然ら
ば金彌殿も秘密に頼み申す 金委細承知仕まつる必らず

佐野鹿十郎

や御心配御無慮と其日は立歸りました切實永五年二月の末に相
成ると言て計略を定めたる七郎右衛門民十郎が詰所へ來り参
暑冷の挨拶終つて後歸りにいる。さしを任掛るので民十郎
も是れには思へども大違は父と同格は又身分のある人のゆゑ
を言して飲む口ゆゑ大違へ俯めました七郎右衛門は悠然と酒を
飲み給しをし加けるので民十郎も其手をして居りました其内
に日も暮れ雨も激しく降り出して参りましたが民十郎は御寶珠
の夜廻りをしなればならんから民大達氏御氣遣に召上つて下
さい失禮ながら暫時御免と立上るのを七アイヤ暫らく下拙を
置去りにして参るとは無禮ならん酒を飲して馳走をしおが早
く歸れと云はんばかりの處置失禮でござらう民左様お次第で
はない甚はた失禮ながら貴公悠くり召上つて下さい拙者は役目
で夜廻りをしおければならん直ぐに戻つて参るから七役目で

佐野鹿十郎

夜廻りをなさる成程役を大切に思召すのは尤もだが併しだ
か年がお若い此やうに雨が降つて風はなし何で火の廻りが廻るも
のか今夜に限る盗賊が忍び入る筈もないマア宜いではござらん
かモウ一ツお乾し下さいと無理に引止るのを計略とは知らず民
十郎是非かく大違の差した盃を受けると七いざモウ一ツお受
け下さい民イヤ某がしは係り頂戴致さんのであるからどうか
貴公召上つて七ナニ拙者は人の馳走に違慮はない充分に頂戴
致したマア貴公モウ一ばい飲み玉へと無理に強られ民十郎元來
飲めかい人であるから仕舞ひには目が曇んで來る民七郎右衛
門殿拙者は御免を蒙る夜廻りに参るから七此強敵であるの
にろんお事を云ひ給ふおモウ一ばい召上がれ酒飲みは對手がな
くては往かんサア召上れと二三ばい無理に飲したので民十郎益
々臨詰をしてピン。頭痛がする大違はモウ宜い占めたと思ひ

佐野鹿十郎

七抽者は是にてお暇申すいろく御馳走にあつて忝じけあいと
其儘立歸つて仕舞ひ交した跡に民十郎は醜醜の餘り其處へ寐て
仕舞ひ交する扱望取に相成て此方は立花金彌七郎右衛門の小屋
へ参つて金切大達先生昨夜遠く寶藏を切り取り御家の重寶旭丸
の名劍盗み出ししてござるいざ改たり下さい七是は御働らき
の段忝じけなく存する拙者も昨夜民十郎を悉皆醜醜致させて仕
舞たと旭丸の名劍抜放つて見ると流石は奇代の名劍七ウーム
天晴なる業物金儲かにお返し申した七如何にも何れか禮は
……其儘知らん顔をして別れました此方は下部が土蔵の掃除に
行つて見ると後ろが切り破つてあるのでビツクリ驚ろいて駆來
り下民十郎様々、大變です民何ぢや下御寶藏の裏手が切
破つてありませす民エツと云つて驚ろいた民十郎來つて見ると
成程切破つてある庫中へ這入つて檢たりるとお家の重寶旭丸の

佐野鹿十郎

劍が紛失して居る不思議に思つて藏の戸前口へ來ると何日ぞや
己れが失つた小柄が落ちてありませす民扱は拙者に急恨ある
奴が寶藏を切り破り名劍を奪ひ罪を我れに塗付んとなしたるか切
も惜つくさ奴もあるものかなと暫らくは途法に惹かれて居りまし
た所へ立花金彌七郎へ出る序でに他と廻り道をして通り掛り
金浮田氏血相變てせうさすつた民ハ、金民十郎殿民然れ
ば昨夜拙者の忘りからして夜中御寶藏を切り破り旭丸の劍を奪ひ
取られてござる金エツ……夫れは怪しからん事だッ……
大方家中の奴に相違あるまい夫れども他家から忍び込んだか何
しろ貴殿はお氣の毒の事だ跡とに容易からん疑ぎでござるを
民ハイせう致したものであらうか拙者死んど途法に暮れました
金彌殿御身は殿様お氣に入りの事ゆゑ御前体罷さなにお執成を
願ひますると民十郎金彌の社に廻り涙を流して観みました金

佐野鹿十郎

「イヤ浮田氏左様御心配には及ばん我れ又御前体なきに取計ら
はん併しなから益賊の詮議お怠りあるか第一お家の重寶旭九又
ど得難い品である其がしは上のお執成しを致すであらうと金
は其儘御前へ出で此事を逃一言上及びました然る所細川越中
守忠俊公殊の外お驚ろさ遊ばし老臣長岡監佐を仕出して殿
夜民十郎の怠りより旭九の一刀を奪ひ取られたるの山右は先
祖細川應孝太閤下秀吉公より戦場の功に依り是はり家の重寶
と名す名愈夫れを盗賊の爲めに奪れるとは情けなき事早々民十
郎を呼び出せ身が盗取るべらう……金銀金ハ、殿
民十郎を是へ送れ參れ民十郎は恐るゝ御前遣かに來り兩手を
任せて平伏するは怒りの聲も無く殿汝は不忠不義の者なり
我が家の重寶旭九は先祖の武功に依り拜領したる劍なり汝若
年たりと雖も記應致して居らん其方寶藏番を勤める後ではない

佐野鹿十郎

か其役目を怠たり曲者の爲めに彼の劍を奪ひ取られるとは何事
ぞや殊に父上江戸表御滞在留守の間に斯る事を惹起し身が父
上へ何と申し譯を致す民甚はだ恐れ入り奉まつりませす全た
此身の不注意より起りし事一言の申し譯も是なく只不思議に候
は拙者何日や失ひたる小柄一抱藏の戸前口に落し是あり何
奴なるか某がしに意恨ある者が某がしに罪を被せんが爲め斯は
取計つたものと見へます是は申し譯には相成りませんが念の爲
め言上仕まつりませす此上は如何やうなるお處刑に相成りませ
ども少しもれ上を恨み奉まつらす若殿益々お怒り遊ばし殿大
二己れが品を以て證據呼はり請怪至極なりいざ手前ち致す是
へ出い……誰ぞある佩刀を持って立上り給ふを監物 監暫らく御
待ち下さるやう殿何ゆゑあつて止める何で止める 監暫らく御
御加へえはせ御立腹の御尤どもには聞へ候へども只今民十郎

を怒りの餘りお手討ちに遊ばしたからとて失せたる刀の出る
評でも是なく此事世間へ廣まりなば家の耻辱未だ家中の者一
人として是を知る者なし假令罪咎ありとは申しあがら民十郎已
れが役日の落度よりして紛失したる旭丸詮議の役は即ち民十
郎が承すべき筈に依て彼が一命はお助け遊ばされ暫らく某が
しへか預けの義を願ひたう存し奉まつる 殿コレ監物汝が願ひ
尤どもおれもお父上忠勝公へ對し何と申し請を致さうや 監
然れど此刀紛失したる爲めお家に取付くと云ふ儀にも
さいません何卒一両口拙者へお預けの義を願ひたう存す又
斯様ある答ある者を五十四万石の諸侯がお手づから彼が首を切
られると云ふ儀もござるまい其役は家老の某がしかり何卒お任
せあるやうに願ひまする 殿然らば民十郎を其方へ預ける其方
首討て差出せ確く申し付けたぞ其儘を立つて奥へお這入り

(一十四)

第四席 長岡の智謀

遊ばしました金銀は先刻より此有様を見て占めたり 是で
の敵民十郎を喪なつたと密かに喜こび殿様に從がつて奥へ這入
りまする跡に残つた監物民十郎を同道致して御前を退り己れが
屋敷へ立歸りました殿より預かりの罪人一室の中に入れ密
かに藩中一般の者へ觸れを廻し此度旭丸名劍紛失の義に就て一
言半句も他言はやらんや此劍の紛失した噂を致した者は殿重
に御沙汰あるに依て左様心得ると申し渡されました茲に監物民
十郎が一身の事に就て肺肝を擻くと云ふお物語り
扱も細川家の家老長岡監物は其後若殿の御前へ罷り出でまして
種々理を盡して只管に民十郎助命の義を願ひ上げましたが更に
殿お聞入れございませぬ斯様ある所の無慈悲の殿には非ざりし
もお側に候好邪智の曲者あつて殊に立花金彌頼りに説言をなし
たるゆゑ殿は如何にもお聞入れがございませぬ是非とも民十郎

を首に致し差出すやうにどの仰せ様こそなく御前を退り浮田傳
五右衛門の方に参りまして段々と相談に及びましたが傳五右衛
門は涙を流し傳斯ばかりに御配慮下し置れ候段有難き仕合せ
最早民十郎の命は亡きものと手前家内までも諦らめ居り候へ
ば何卒民十郎をば諫め覺悟をさせて切腹の義を御申し付け下し
置れますするやうに言葉に是非なくも監物は 監ア、左様か斯
までのお話め最早詮術もござらんと茲を立出で我が家へ立戻り
ましたがどうも民十郎は忠臣の武士後來見込みある人物ゆゑ是
を殺す事を歎かはしく思ひいろくと腕拱ぬいて暫らくは思案
に暮れて居りましたが茲に幸はひな事があるのは此監物の家に
下郎の作助と云ふ者がござります不思議や他人の空似ども云
ふべきか民十郎が而体に生き寫し年輪は二ツ三ツ民十郎より上
あれは是幸はひと一策を案じ出し俗にさへ小の虫を殺して大の
虫を助けると云ふ譬へもあり此下郎平生は正直あれども酒亂に

して酒を飲むと主人へ對してまで無禮を仕出來す事も度々われ
ば此者を無禮討ちにさし彼れ下郎作助の首を民十郎の代玉に致
さんと心に定め夫れとは誰にも云はず或夜民十郎に向ひ 監切
貴所は今宵目付けへお出でになれば門番の者刻限遅くあつて閉
めるやう申し付け置きたればいざ是より落延び玉へ跡は某がし
能きに取り計らうべし 民道は有難き言葉あれども我れ此所を
立退さば父母の身の上一家一門の耻且つは貴君に御難儀を掛
ねば相成ますまひ 監イヤ其心配に及ばん我れ夫れには計畧あ
り一先づ此所を遁れ給へ決して双親親族に難儀も掛けず又我れ
も迷惑致す事もあひ夫れには計畧あり是に依つて一刻も早く此所
を落延び刀の證儀をさされ刀さへ出でさば速やかに立戻られよ
我れ其時には殿へ執成をなさんと路銀をも恵み呉れました民十
郎暫らくはあやも涙に掻き居たりしが 民ア、忝じけなき思
召し然あらば跡々の事何分ともにお取計らひ下さるやう 監知

佐野鹿十郎 (四十四)

何にも承致した心置きなく退散致せと家老の情けに民十郎厚く謝を述べて其儘茲を退散に及ばれました是より監物は不便ながら下郎作助の首を討て民十郎の身代りに立てましたは天晴義勇花も貧もある取計らひ感すべきは監物であります監物は再び浮田の家に乗る傳五右衛門に對面を致して 監物は斯様云々に不便ながら下郎作助の首討て民十郎殿の身代りに立て民十郎殿は刀證議の爲め當所を昨夜立退せて候と監物が語るを聞て傳五右衛門は涙を流し 傳五は有難きお計らひ此御高恩は何日の世にか忘却は仕まつらす千万以て忝じけあしと厚く禮を述べたる此時に監物は 監シテ此事は貴所も某がしも口外致す事は相成りませんから左様御承知あるべしと堅く約して其儘小屋に立戻りました切作助の死骸に於ては浮田方にて是を引取り民十郎の体にして善所清光寺と云ふ寺へ厚く葬ひりました此度の事も長岡監物の計らひにて總て事済みと相成りました切此

佐野鹿十郎

(五十四)

方は大違七郎右衛門立花金彌の二人民十郎を喪ちうの計略充分に行き首尾能く刀は手に入つて大ひに喜こんでは居りましたがどうも家来の様子を観がうに長岡は深く此事を包み紛失おしたる事を一言でも云ふ者あらば曲事たるべきと云ふ觸出し又民十郎切腹おしたる後刀の詮議をする様子も更にあいので反つて二人は腫に疵持つ身の上にて監物の心底計り兼ね密かに悪人胸を痛めて居りましたが去るもの日々に疎しとやら何日しか其心配も薄くなりました所他まで憎きは七郎右衛門已れが爲めに民十郎を喪ちいしも又其上から父傳五右衛門御家中の評判宜しきを羨み何卒致して彼れさへ打込みおは我れは當家にて一人の指南番とかり自由自在の身の上にかれると立花金彌と計り家中へ評判を立てさせましたのは當時九州にて大達位ゐの劍術の名人はあるまひ浮田は古参あるがゆゑに家中にて大達位ゐの劍術の名人麒麟も老ぬれば驚馬に劣るモウ老体で腕筋利す何の役にも立ん

佐野鹿十郎

(六十四)

と家中の者へ折々話したのが自然家中に廣がり途には殿のお耳にも這入るやうな事にありました或時殿はお氣に適りの金彌を召され殿でうぢや立近頭大達の劍道入分家中では評判が宜しいではなひか金參候先づ七郎右衛門の太刀捌き前代未聞の殿前九州一なりと褒めるのは強がちな無理ではございませぬ浮田は老休最早老込みでございませぬ當家に兩人の劍客ありと雖も未だ二人の腕前を試して御覽遊ばしませぬが此度大達と浮田と試合を命せられては如何でございませぬか殿成程汝の云ふ通り夫れは至極宜ひ思ひ付き然らば左様致せと仰せ付けに御近侍の方々は金彌は程當く奇ひ事を云ふ勝負は時の運とは云ひあがり勝負の出来るもの益なき事を云ふと思つたが殿の仰せゆゑ口出しもあらず只若々しき事に心得て居ります又中には若侍でも是は面白ひ立花は宜ひ所へ氣が注た此試合をさせたらどのやうに樂しきものであらうと喜ぶ者もございませぬ立花金彌は殿の

佐野鹿十郎

(七十四)

御沙汰ありとあつて大達七郎右衛門に此事を申し入れると七郎右衛門大ひに喜こび占めたり悉よ老選を打込み赤耻を搔し呉れんと思つて居ります浮田傳五右衛門は此事を承たまはり大ひに驚ろき何者が斯様な事を披露せしや負けさば取あり勝てば彼に恨まれる困つた事が出来たとは思ひました折其試合の日も相定まり傳五を得ず承諾の趣むきを答へました折から鹿藏夫れに手を仕へ右衛門例刻に出仕を致さんと仕度の折から鹿藏に手を入るは鹿且那樣今日には時れの試合私くしも武士のお家に奉公を致す冥加に何卒無理にはございませうが大主上殿の席へ立入るは誠に恐れ入りませう事おれど庭の隅にても垣根の透からにてもどのやうある所にても宜しく拜見の儀をお許し下し置れませう如何にございませう傳五折角の願ひ陪臣は御前体へは出で難き筈なれど併し長岡盛物殿へ願つて見やうお許し下さらん事もあるまひ願つて見て遣はす鹿藏大ひに喜こんで若菜生

佐野鹿十郎

(八十四)

立てに任度をかし介添と相成り尾て参ります今日しも霜月十六日細川家御指南番浮田傳五右衛門大達七郎右衛門と晴の試合と云ふので念よ當日には一家中の人々お庭へ出で縁取りを敷て身分ある者は此上に座し身分輕き者は竹矢來を建つて是より拜見を許さる正面設けの席には大主お扣へに相成り少しく下つて長岡監物佐島右近金川安太夫徳田與十郎此人達は皆劍術の名人に至つて好きであるから今日の勝負如何あらんかと手に汗を握り扣へて居ります彼方の方には慢慕を張進らし足輕大勢非常を固めたり扱刻限と相成れば大達七郎右衛門は行儀殿の麻上下に禮服を着し殿へ馴禮をかし此方の縁取り、着座致します浮田傳五右衛門老人は諸麻の上下に禮服を着し大主の御前に両手を仕て禮を遂げ左りの方ある縁取りへ扣へます其前傳五右衛門は執事長岡監物に願うやう縁取り若黨一人お庭内へ召連れ候は恐れ入り候へども某がし老休にして介添に候へばお許しを願

佐野鹿十郎

(六十四)

ひ奉まつる監物は是を聞いて 監其儀は苦しからず其許は老休ゆゑに介添とあらば差支へもござらん大主へも此事を言上致すでござらうとれ許しがありませんたるから鹿藏は建仁寺垣の傍らに扣へ居ります然る所近侍頭の立花金彌疎忽のなひやうにと八方に目を配ると下郎が一人彼の建仁寺垣の前に扣へて居るのを見て金彌レ、御前体へ陪臣は出る事ならんのに何で是へ其方は出しゃばつた……アイヤ浮田氏下郎を連れて是へ出るは何事か上へ相濟んではないか監物は是を聞いて 監コレ、金彌殿其方が何も聞く所はさかひ拙者今日傳五右衛門殿より老休の事ゆゑ一人の介添を願ひたひどの事身に於ては御前へ申し上げたにもお許しに相成たり何も御身が答めるに及ばん御身は御身の御用をささひ一言の下に叱り付けられ立花金彌赤面を致して 金彌今日た金彌は勃として夫れへ来り鹿藏をハツタと白眼つけ 金彌無

佐野鹿十郎 (十五)

者其所あ下郎奴汝何を以て嘲けり笑つた傳五右衛門是れを聞
き傳賊とはや若年若にござひますれば何卒御用捨を願ひた
ひ……鹿藏退れ殿は是をお聞遊ばし殿コレ誰ぞ参れ近侍頭森
本三平夫れに罷り出で三何御用にございまするか殿只今金
彌が答めた男は何と云ふ者だ三浮田の若黨鹿藏と申します今
日浮田は老体ゆる介添に出でました者にございます殿ウム左
様か介添とあらば金彌が何も答めるには及ばん併し彼れは立派
の下郎ぢやあ下郎にしては一様式ある奴ぢやあ下郎にして此試
合を見んとは剣道を好む者と見へる定めし浮田の弟子ければ其
心得もあらん金彌と彼と勝負をさして見よ何と一興ではないか
とらぢや此事を傳五右衛門に申し付けい是を承たまはつたる傳
五右衛門アツと驚ろき傳何卒此儀は平に御用捨を願ひ奉まつ
る宜しく上へお執成下し置れたく殿様御座を掛られ殿アイヤ
苦しうまい金彌と立合ひを致させい身が許すと殿様頻りに斯様

佐野鹿十郎

(一十五)

仰せられるのも何かの不思議鹿藏は是を聞て喜こんで居る長風
盛物は監コレ鹿藏お上の仰せぢやに依て是ある金彌と勝負致
せ馬ハ、有難き仰せ是へ推参致し候さへ恐れ入り候に未熟の
私くしへ試合の義まで仰せ聞され甚はだ恐れ入つたる事あがら
是も武門に生れし身の真加何よりの事仰せに委して試合の義仕
まつります金彌は是を聞て金此奴猪小才な下郎の刃際として
拙者と手合せを致さんとは大膽不敵此立花は其方如き者の對手
に有るべき者ではなひが殿の仰せなれば對手にあつて遣はすが
我れは卜傳流の剣道印可皆傳を前されたる立花金彌對手に取ら
ば汝が生涯の譽れいざ仕度をして後我する覚悟ではへ出るラ
ラと様より飛下り鉢巻袴の用意をなし高股立ちを取上げる鹿藏
は遙か退つて前前に一禮をさし只今立花の一言小面相彼目に後
見せて呉れんと思ひ兎に角重役の事ゆゑ禮は遂げぬばならんか
ら頭を下げて手を仕へ鹿藏とに以て失禮御免と鉢巻袴をさし

木更取つて夫れへ立向う家中の人々は面白しく那の下郎と金彌殿の勝負平生金彌は我々どもを未だの下手だのと口汚なく云つてるがどうか願はくは下郎に負れば宜い那の下郎に勝したると云ふのは人情我が神國の風儀として強きを挫き弱きを助け習ひ平生金彌が殿に譲らうので若侍の内には憎んで居る者もあるから鹿藏に力を入れる鹿藏は又金彌が民十郎を喪おはんとした事は知らんけれども虫が知らずと見へ何ども此奴小面憎く思ひ木更取つて立上り青眼に構へる金彌は大上段に身構へ茲に勝負の一條

第五席 浮田大達の試合

世の中に極意の極らん程面白事は無い極つたのは可笑ないもので何方が上手か下手か分らん所に味があるものでございます芝の切通しに銅島浪人熊川典勝と云ふ東軍流の先生が道場を開ひて居り大層繁昌をして居りますと茲に俳諧師の活々坊久

迎と云ふ人があつて此者至つて落着道中にて金に困り着て居た若物は賣つて仕舞ひ眞夏の事で汗襦袢に越中褌をしめて色が眞黒で鬘が違々と生へて居る今芝の切通し熊川典勝が道場の前へ來ると夏の事であるから俄かに一天掻曇り恰かも墨を摺流した如くに赤つたかと思ふとザア／＼雨が降つて來る雷はゴ／＼鳴り出す稲妻は目に焼金を差すかと思ふばかりスルと此人身の丈け勝れ氣丈の男ではあるが虫が嫌うものと見へて雷が大嫌ひ餘り雷の音が激しひので膝を震して熊川の道場へ夢中になつて飛込んだ誰か來たと思ふから内門弟が「ドレ……」御身は何方から私くしは活々坊久逸と云ふ俳諧師で途中雨に出逢ひ雷が嫌ひであるから少く雨宿りをさして下さひと云へば宜ひに俳諧師と劍術仕ひでは餘り飛送つて居るから是は同商業の振をして雨宿りをしたら飯の一ぱひ位のは食はして呉れるだらうと考がへたので拙者は諸殿を修業致す劍客者にして管御道場に益し御

佐野鹿十郎

(四十五)

下さひハ、御尊名は何と仰しやひます。活々坊久逸と云へば、非、師、劍術仕ひのやうでないから何と云つたものであらうと考へて居ると、丁度門の所に魚屋が能木鮪を持って居るのを見たから、拙者はカヨキマグロウと申す者。『へエ、妙なお名前で……』
は何お流義で、是には困つた者がへて居るとピカ、と稻妻が光つたから、拙者稻妻流ハ、ア、左様で暫らくお扣へ下さい奥へ驅て来て、先生大變な奴が來ました。先、何だ色の眞黒あ目のキヨコッとした髪だらけで、継栗頭汗襦袢一ツに越中褌をしめて當道場を拜見したひと申し参りました名前がカヨキマグロウと申します。夢奇名前でお流義はと云つて尋ねた所、稻妻流と申します何でございませう。先ハ、ア、扱は此道場が此頭繁昌致すので不吉を付けに参つたのだなさう云ふ者は、後來もあるに依て目に物見せて呉れる道場へ通して置けハ、フ……カヨキ先生道場へお通り下さ

佐野鹿十郎

(五十五)

「然らば御流と云つて道場へ通ります所へ年齢四十恰好デッ、ア、肥つた撫下げ頭。先、是は能うこそれた出でなすつた拙者は當道場を預かる東軍流の指南者熊川典膳政隆と申す者以來お見知り置れまするやう、拙者はカヨキマグロウと申す者。先、お望に任してお立合ひを致さう如何にも心得てござる。先、お仕度をあさひ、仕度に及ばん是で宜しい先生は驚るひた未だ人の腕前も分らんのに仕度も致さんと云ふのは、餘程名人に違ひあひと思ひ先、何れでも竹刀をお取りあさひ、竹刀の持ちやうも何も知らなひから久逸は短かひの一本取て、是で宜しひ。先、左様か、シテ見るど、是は小太刀の名人に違ひなひと先生尙更恐れをなして二尺八寸の竹刀を執つて大上段に振舞つた久逸は、どう竹刀を持つのか夫れも知らあひから短かひ竹刀を片手に持て、ブラリ下げて顔を向うへブンと突出した先生は、キヨコッとして此奴丸で足も身体も透だらけ斯う云ふ油断を見せ、置て打込んで行くのを引拂つて打

込らとふのたさうすると思者か後れを取る是は中々油断が出
来ないと打下ろせない段々先生跡へ退る弟子達は是を見て驚る
いたどうしたのだらうと思つて居ると此方は頭を前へくと出
すから先生は段々退つて羽目へベツタリくツ付て仕舞た内門弟
は愈よ驚ろいて ×是は餘程の名人だ氣合ひ負けがして先生が
打下ろせぬ先生をお出し申さうか羽目へくツ付て仕舞た ○
左様さ四五人で羽目を打毀して後ろからお後ひ申さう 口元
云つちやア往けぬ久逸は氣の毒に思つて段々退つて来た
から先生は道場の中央へ出て来たモウ是は仕方がない身を捨て
こそ浮む瀬もありと先生度胸を据へてお顔と云つて打下ろすと
ビシリ頭を打つた 参つた先生は竹刀を夫れへ投り出して 先何
と云ふ亂暴者剣術だ腦上で受るのは見た事があひ何と云ふ剣術
だ……今たたくは知らんので 先ナニ私しは知らんので實は誹諧
師の活々坊久逸と云ふ者 先夫れがせうして道場に参つた然れ

は金に困つて衣類は賣つて仕舞ひ金はなし腹は空る雨には降られ
雷が大嫌ひで思はず此道場へ飛込んだ所ドレと云ふ取次ぎ御
同商業と云つたら飯の一ぱひ位は食して下さるだらうと思つ
て實は劍術仕ひと申したので名前をカヨキマゴウと云つたの
は魚屋の盤臺の中に掘木舖があつたからさう申したのだ 稻妻が
ピカピカ光つたから稻妻流…… 先大概になさいどの位心配
をしたか知れぬ余程壽命が縮まつた俳諧師なら初めから云ふ
が宜ひのに飯を食ひあさひ誠とに有難う存じますと云ふ
致します 先俳諧師おれば其道が出来るでせうやつて御覽さ
ひ紙硯を出したから筆を取つて
夕立に打れて實る田面かな
先生是を見て面白い人物であるとき家へ同居をさして呉れた然
る所出入りをする者は旗本の二男三男などが来るから其か父さ
んや御隠居さん達 俳諧をかざるので夫れへ熊川先生のお陰で

出入りをして仕舞ひに先生が芝へ一戸を持して呉れ大層名を
振けたのは熊川先生のお蔭でございませす夫れゆゑ剣術を知らさ
ひ人と上手あ人と向うと勘違ひがあつて面白ひ事が往々ござひ
ます切も立花金彌は大音揚げ 金如何に下り鹿藏今日は晴れの
前試合我れは少しも用捨はないぞ遠慮なく打込むに依て怪我
致して後悔するお存薬代は出さんから左様心得ると耻しめる鹿
藏は勤として 鹿假令下郎とても 事打込みますからお覺悟なさ
さらん當家に御身分の方とても美事打込みますからお覺悟なさ
い 金ナニしかれ者の小歌とは汝が一音覺悟致せと金彌少しく
怒つて木劍取上げ上段に振渡る方青眼に付け暫らくは白眼
合て居たが鹿藏の指へは自然入然と本統に固めて居る金彌の方
は少しく劣る位の御家中の人々は何れを何れと分ち兼ね片唾を
呑んで扣へたり金彌は大上段に掛へしが透を窺がひ打下ろすを
鹿心得たりと身を刺したる其早業蝶鳥獅子の如し流石の金彌ア

ッど驚ろき又打込んで來るのを引拂ひ鹿藏が倒らきに奈何とも
すべきやうなく其内に鹿藏透を狙つて足をと云つて足を踏つた
に依て立花金彌仰向けさまにドクッ頭倒返つた鹿藏は側へ寄つて
鹿何所もお怪我はございませんか機會と云ふは怖ひもの何卒御
勘辨を願う金彌は足を拂はれて痛ひけれども衆人の見て居る所
ゆゑ苦ひ顔をして 金中々汝は仕へる奴だと竹刀を投り出して
逃げて行く御中の人々はア、良い氣味だ何所へ行き居つた……
フヤ 幕の外へ這ひ出したか那れで明日より我々の前で天狗
も申すまい何と結構な事ではござらんか鹿藏は剛ひ奴だと鹿藏
ばかりを賞て居りませす大違ひは是を見て鹿藏を深く怒れ中々那の
腹前は恐るべき奴此上は是非あし老老を打込み金彌の耻辱を雪
がんと仕度及んで鹿藏に進み出でる傳五右衛門も同じく夫れ
に立出でましたが 傳是は大違ひ老老人あればお手柔らかに七
「夫れ取巻と事我れも何卒お手柔らかに何れも膝餅の間に手を

し殿に於ては御側まで進み出で給ひ勝負何あらんと見てか
在でござる兩人互ひに禮終つて立上がる近侍の方には 甲「エ
、どうでせう何方が勝ちますか 乙「左様さ浮田の方が私に勝
うと思ふ年は老つても腕前は勝れて居る 甲「併し大達も中々や
りますせ茲に拙者一兩賭けませう 乙「賭け……何方へ 甲「大達
の方へ一兩賭ませう其代り浮田の方へ安をお賣んなさい 乙「馬
鹿な事を仰しやい平でござる 殿「コレ……何で紙入れを出して
居る 乙「へエー恐れ入りませした愈よ二人は左右に別れ大達七郎
右衛門は八双に振上げる浮田傳五右衛門は中段に擡へ何方も動
かず氣合ひを計つて打込まない 殿「大達も中々仕るや何方なら
う 乙「左様さ中々旨い…… 乙「コレ……拙者の菓子を目指いと云
つて食べては往かん 乙「イヤ御免下さい 乙「上から頂戴のお菓
子無暗に食べられては困る 乙「御想辨を願ふ途旨かつたので思
はす食べれた 乙「冗談を仰しやい暫らくは何れも見て居る内に大

達は何所か透があつたと見へ傳五右衛門が飛向う微塵と打下ろ
すと浮田は青眼に擡へ心得たりとハツシと受けたる其早業蝶鳥
稻子の如く七郎右衛門は三十五才の血氣溢り浮田は六十二才の
老体おれと中々老人の腕前とは思へん上段下段七裂一切互ひに
秘術を盡して挑み取かつたるが浮田が面と云つて打込んだる
一本は大達が眞額を打つたからアツと云つて頭を押へ 七「参つ
た其所へ七郎右衛門平伏をした 傳「是は大人氣ない打込み方機
會でござる御勘辨を願ふ殿「是を御覽になつて 殿「腕には年の
取らんもの天晴あり大主を始め一同はヤンヤ……と腰を揚げて
賞める大達は面目なげに此方の縁取りへ來つて若座なし休息を
致しまする傳五右衛門は襷鉢巻を取りハツトばかり平伏を致し
ました大主は 殿「兩人とも是へ……是へ参れ 兩人「ハツ兩人御前
へ扣へると 殿「コレ七郎右衛門勝負は時の運あるぞ老人に負た
りとして耻辱に非ず浮田は老人だけに餘計修業が積んで居るのだ

決して是を意図と思ふ其方は未だ若年浮田位の年配になれ
ば浮田より餘程勝れた腕前になれる 七ハ、有難き仰せ恐れ入
りまする七郎右衛門は御前を退りました殿は浮田傳五右衛門に
れ盃を下し置れ尙御褒美をも頂戴致し主従は勝利を得て面目を
施こし御前を退りましたが是が恨みを受けける基と相成りました
は又是非もあき事ございます此方は七郎右衛門自らから事を惹
起し反つて斯る恥辱を受け御家中の人々に對しても目もかく其
後には御前へも出でず只閉籠つて隨々として居りました浮田は小
屋に立歸つてより鹿藏を招ぎ傳コレ鹿藏其方には少し位も劍
術も教へてやつたが未だ夫れだけの極意は教へない故は元郷士
の悴もにして早く兩親に就れ下郎奉公をして居たと云ふが下郷と
して能くも斯まに劍道を學んだ何れで修行をしたか仔細を話
せ鹿へエー今日は飛んだ出過ぎた事を仕まつりましてござい
ます何れで劍術を學んだと云ふお尋ねでは面目次第もございま

せん響きの物に動する如く旦那様が毎日御道場でお稽古をして
お出でなさるの。暇もいて見て覺へましたのでございます少しも
秘の仕込みだと云ふ事は一言も云はない傳五右衛門は深く感じ
傳ウ、實に汝は珍らしき所に才の廻つた者ぢやと賞められまし
た扱は是が御家中一般の評判とあり九州一の名人は浮田傳五右衛
門なり夫れに従がう若黨の鹿藏三百石以上の武士でも那の通り
負した那れは只者ではかい浮田の麒麟だと云つて皆噂さをする
ので自然七郎右衛門の弟子も皆浮田の家へ弟子入りに来るから
浮田は以前に倍して然昌を致します七郎右衛門は夫れを益々嫉
ましく思ひ彼れを打込んどあしたるに返つて耻辱を受け今は奈
何とも詮方なく引籠つて居りますと同じ思ひの立花金彌下郎鹿
藏の爲めに後れを取り赤耻を搔たので意間は外もあり兼ます
から夜に至つて人目を忍び同じ御家中であるから大達方へ參つ
てゐるく相談を始めました 金如何にも残念ではござらんか

大達先生此耻辱の返報を致したいと心得る
口惜いと思ふが何とも仕方ない我れは傳五右衛門に恨みがある
るのだ金夫れからば先生彼を殺して立退うちやアござひませ
んか先生は何所へ行つたつて二百石や三百石位は取れませ
れには旭丸の名剣を家中に持て居れば自然に分りませぬ事
行き掛けの駄賃に彼れを殺して立退うちやアござひませぬ事
生は傳五右衛門に恨みがあるし拙者は那の鹿藏奴を殺したひと
思ひます 七然らばと云ふので悪人二人ソコデ仕度を致し時
も十二月二日の夜でござひます大雪にて寒風肌を裂くばかり夜
更るに及んで雪は益々激しく降ります大達立花の二人は浮田
が家に忍び寄り懐中に用意したる鍵を取出して堀に引掛け
是に傳はり内に入り松の木に手を掛け足を掛け難なく中へ忍び
入りました四邊を見廻すと風呂屋がござひます其風呂口は締り
が赤ひに依り是より中へ忍び込み金剛は椽の下に這入り彼老人

ゆゑ此冷なれば必らず小便に来るに相違なひ小便に来れば此所
で手を洗うであらうソコデ彼れを殺して退けやう然さくば椽の
より刀を突上げ老人をえぐり殺して呉れんかと考へ待掛へて
居る七郎右衛門も諸共に隠れて居るとは解ならぬ身の知る由も
なき浮田傳五右衛門は此冷にて自然小便も出たくあり自から雪
洞を持て椽側に来り小便をたして夫れから椽側へ参りました
嘴をみの小剣だけには帯びて居りませぬ戸を開け手水鉢にて手を清
めて庭を暫らく眺め傳ア、大層堆つた雪は豊年の貢ぎと申す
が能くも降つたと頼り言途端に現はれ出でたる七郎右衛門卑佈
にも七エイ老老恨みの刃思ひ知れと大刀閃めかして切り付る
暗夜の隙は防ぎ難きの習ひ傳五右衛門は大ひに恐怖をちして身
を離し帯たる小刀引抜いて傳五右衛門は下より飛出し傳五右
衛門が去りの太股へ方に任せて切付けたり傳五右衛門は片足を

縫れパツタリ倒れる透さず立花二の太刀を切付る傳五右衛門は
傳曲入つたり誰か参れど最期の太音揚る折しも七郎右衛門再
たび飛込み来つた一刀は傳五右衛門が鳩尾の透りを貫ぬきたれ
ば何かは以て堪るべき其儘息は絶へました父が最期の一聲に民
之助は只事ならしと追取り刀で驅來れば父は縁の上に血塗れと
あつて打倒れ居るを見て 民己れ曲者覺悟致せど一刀引抜き切
つて掛るを立花金彌庭にあつたる石を取り民之助目掛けて打付
けたり体を轉した民之助石は彼方の柱へ當れり七郎右衛門は必
得たりと民之助に討つて掛る何しろ十九才の若年者ゆゑ何とて
長く敵すべきや已に危うく見へたる所へ若黨の鹿藏手燭を持って
驅來り 鹿人旦那は如何なさいました若旦那と來つて見れば此
有様立花金彌 金己れツと云つて切付けるを体を轉した鹿藏が
手許に云つて 鹿己れ奸賊目に物見せんと立花金彌を引捕へ
力を現はして目よりも高く差上げ 鹿エイツと云つて傍への御

影の敷石へ力に任せて打付けられたる金彌脇は微塵に碎けて相
果たるに精惡の酬ひ天の赦さる所盤に賊を働らき罪を民十郎に
逢付け其上傳五右衛門を殺したる大罪は今日のあたり最も哀れ
の最期を遂げました此方は大達鹿藏を尋ると 七是は大變下郎
でも一番強ひ奴逃げるに若かずと其儘にして跡をも見ずに逃げ
出す 民己れ曲者父の敵と民之助一目散に追行く鹿藏は此有
様に大ひに驚ろき 鹿旦那様飛だ事にあましました何者とも知れ
ず憎つてくひ奴無御無念でござひませうと暫らく涙に暮れて居り
まする所へ御新造も出で來り此有様を見て其の歎きは一通り
ございません其内民之助は彼方此方と探したが七郎右衛門何所
へ行つたか分らず浮田の家は上を下への大騒動鹿藏は立花金彌
を殺したを歎き是さへ殺さずば今一人の者も何奴なるか分るで
あらうが惜き事をなしたりと歎くばかり外に詮術もござひませ
ん是に依て急よ民之助仇討出立に及ぶのお物語り相成りませ

第六席 民之助出立

斯て民之助鹿藏は裏の方表の方と駈寄り見廻したれども已に悪
者は何れへ行きしか姿も見へず鹿情けあひ事になりました此
金彌を殺さずば今一人の曲者が名も分るであらうにと愚痴を云
つても詮方あし民之助は父の死骸に取付て民平生からの嗜
みもあるに此やうお御最期とは情けあし聲を放つて歎けば妻も
諸どもに只浅間しき事ありと涙に暮るのみ鹿藏は鹿御新造様
飛でもなひ事になりました敵一人は取通ししましたが惜かに七郎
右衛門に相違ござひませぬ此立花金彌をば手前が逸まつて打殺
しましたはお説を仕まつりますす妻お前が逸まつて殺したから
とて是は夫れだけ罪のある者殺したからとて別段た上よりお
谷めもあるまひ就ては是から親類へ知らして來て呉れると云ふ
ので鹿藏は類縁者に此事を知らせませぬ茲に於て浮田九兵衛
同じく六兵衛松本儀十郎谷口五兵衛と夫れく知らせましたる

から々々此所に集まり始終のしを聞て大退七郎右衛門の様子
を兎に角見せにやらうと家中の事ゆゑ一人見せにやると頼て
立歸つて参り。〇分りました大退の屋敷は明けツ放しで一人も
居りませぬ然らば全たく彼の仕業に相違なし去るにても取遣し
たるは残念ありとあつて夫れより一同は右の次第始末書を認た
めお上へお届けに及びました長岡監物は此事を承たまはつて早
速是へ参り傳五右衛門の死骸を見て大ひに歎き盛ア、惜しき
勇士を失なつたり殿に以て意外の事氣の毒千萬ありと殿へも
此次第を申し上げました御家中の人々是を聞て一人集まり二人
集まり大勢集て悔みを述べ氣の毒の事を言したと云つ
て歎くばかり扱お上へは届けを致しましたるから上より御檢死
役二人來つて死骸を檢ため夫れより浮田の歎族一同死骸を茶毗
一片の煙りとなし私提所清光寺と云ふのへ厚く埋葬を致しまし
たお上は寛仁大度の君であるに依て厚き言葉を下し慰れまし

申し上げて我が家へ立戻り愈よ出立致すと云ふ事にあると下郎
の鹿蔵は民之助に向ひ 鹿若旦那様私く生涯のれ願ひがござ
います外の事ではございませぬがどうぞお供にお連れ下さるや
う 民イヤ其方の願ひ尤どもお供は断はる我れ仇討
ちに出でさば其跡にて母上の介添を鹿蔵其方致し呉れよ此時母
親は母コレ民之助其遠慮には及ばん親族の者は同輩中の事さ
れば毎日見舞うても呉れる又六兵衛殿後見を致し呉れるゆゑ差
支へもさし鹿蔵は又無二の忠臣其方は若年にして一人で出すは
心許なし只武藝の程も敵に比べては相違もあらうと思ふどうか
鹿蔵を連れて参るやうに母の言葉に民之助 民如何にも承知致
しましたと愈よ出立の前日に長岡監物方へ参つて民之助 鹿
蔵も供致し参ります事ゆゑ此段念の爲めお届けに及ぶと申し
ますると監物益々感心致し鹿蔵を招きて 監鹿蔵貴様は天晴さ
る了何分民之助は若年ゆゑ其方万事心掛け首尾能く本望を遂

手を以て謀敵致し退ばせと仰せ申す是より御用家の勢ほひを以
て御國御國と尋ねたが七郎右衛門の行方更に知れず歎きの中に
其年も暮れ翌くれば寛永六年新玉の春を迎へまゝたる浮田民之
助何卒致して父の仇討ちをなし亡き父の血魂を慰さめんと母親
に相談を致しましたるからソコヲ親類一同を集めて其相談に及
び大主へ願ひを上げたる所大主は 殿民之助未だ幼年にありあ
がら仇討ちに出立致さんとは感心さかり流石は浮田の胤天吼なる
願ひであると早速お許しに相成りましたるから母親は親族に預
け浮田六兵衛後見として一時家を預ける事に相成り仇討ちの免状
も出でましたるゆゑ民之助は殿様お目通りへ参り出でお暇乞ひ
を申し上げたる所殿よりは 殿悪者七郎右衛門も容易さ奴に非
ず必らず油断致すかとお手づから志津三郎象氏の一腰を下し置
れ 殿尙仇討ち木俵を遣せし上は早々歸國致せ元の如く其方へ
高を遣はすぞと厚き歸がお言葉に民之助は有難涙に暮れ御禮を

げるやうな顔むぞ鹿殿は涙に暮れ 鹿有難きお言葉何卒跡々の所
御主人様宜しく願ひまするソレデか盃を下されぬめて二人の者
へ先年民十郎義殿より首討て差出せとの殿命なれと惜き者はを
害すは不便とて我が下郎の首を討て代りに立てたが民十郎は
刀詮議のため茲を立退いて居るが若し途中にて彼に逢ば何より
兎に角彼れは壯健であるから左様心得ると云ふのを聞て二人は
驚ろき民之助は有難涙に暮れ 民今日まで兄は世に亡き者と思
ひ居りましたに初は兄上御家老のお情けにて未だ存生致し居り
ますか夫れを伺がひ尙々強身にありましてございますと云ふ
しと禮を述べ是より諸國修業致して仇討ち本懐を遂げんと愈よ
翌日出立と極り監物よりは書面を呉れ 監是は攝州西成郡大坂
玉造りの旅籠屋木屋宇兵衛と云ふ者當屋敷へも出入を致し又大
坂藏屋敷へも出入り致すが是へ参つて又宿る事もあらうに依て
書面を遣はすと云ふ事ゆゑ其書面を貰ひ是より親族別れの酒宴

を開き母親は足路の事あれば随分身体を大切にせよと云ふ聲さ
へも涙に盛り是より一同に別れを告げ互ひに無事と云ふも口
の中愈よ寛永六年正月二十八日浮田民之助並に供の鹿藏後見
と相成り吉日良辰なればとて肥後國熊本を發足に及ぶと云ふお
物語り
第七席 兩人大坂へ乗込む
扱も民の助鹿藏主従は是より中國四國と遍歴致し東西南北を尋
ね敵の在所を探らんと先づ京地に乘込み都を見物致しましたが
是は又肥後の熊本などには違ひ主上御在所おられ中々の賑はひ
住めば都と申する位お名所舊蹟は言語に述べ難く布圍着て寐た
る姿や東山花の都の名所は歌の中山清閑寺祇園清水今熊の山に
は嵐山或は東山寺では金閣寺銀閣寺川には桂川或は加茂川と名
所を見物おして斯う云ふ街に住む人は壽命の樂りにもあるやら
んと語り合ひ最早も京地には居らざれば是より大坂へ参らん

佐野鹿十郎 (五十七)

蔵の爲めに打殺されて仕舞ひましたので何とも其有様に恐れ其
儘にして熊本を逃げ出し辛くも一命を逃れて漸々に時はへの金
子もあれば是を所持致して讃敷の多度津に参り縁族の者を尋ね
ましたが其者は何れへ行つたか分らず據るなく大坂は繁華の土
地ゆゑ是へ出やうと云ふので夫れより大坂へ乗込みまして長町
の播磨屋敷七と云ふ旅館へ宿りまして其所で其年を送り東西
南北を見物致して居る内に計らずも巳が従弟の榎木三左衛門と
云ふ者に途中でお目に掛つた某が仔細あつて主家を浪人
大達氏七宜へ所でお目に掛つた某が仔細あつて主家を浪人
致し此大坂へ参つた三夫れは、何は兎もあれ往來では話し
も出来んに依ていざ此方へ来玉へと或る料理屋の二階に招き人
の居るひの幸はひに酒を飲み初めされたが此三左衛門と云ふ
奴も佞奸邪名の曲者にて同氣相求むる所中々の悪ひ奴是に依て
尋ねの法る主人を誑かすれ長く浪人をして居りましだが今其

佐野鹿十郎 (四十七)

と兩人は兼て長岡盛物より書面を買ひ置き大坂へ出でなば當家
出入りの旅籠屋木屋宇兵衛方へ泊れと云ふ事依て右書面を持て
大坂玉造り口木屋宇兵衛方へ参りました主人宇兵衛も長岡より
の世話をかしたる客なれば何分にも心を注げ誠とに町噂に致し
て呉れます扱て是より民之助鹿藏の兩人は大坂を見物あし傍ら
敵を尋ね歩き大坂は掘割りが多ひので橋と船が名物でございま
す又京都とは違つて人氣も些と暴ひが何しる繁華の土地であり
ますから万々が一兄の民十郎も存命して居るとの事あれば廻り
逢うも知れずと兄の行方を尋ねても更に手掛りもかく殊には敵
大達七郎右衛門も此地に居らざるものと見へ日々尋ね歩け
見當らず巳に此所に五月ばかりの日数を費やしましたが一向に
其手掛りもござひません然る所大達七郎右衛門はまぬる十二月
二日の夜熊本に於て浮田傳五右衛門を殺害あしたるも金頭は鹿
計つて忍び込み首尾能く傳五右衛門は殺害あしたるも金頭は鹿

人の世路にて大坂御城代稲葉丹後守殿の家臣とあつて居ます
七郎右衛門は七時に三左衛門殿私には仕細あつて肥後の熊本に
て人を害め身の置き所もあきゆゑに是へ参つたが當分の間世話
致して呉れんかと眞直言打交せて申し入れたる此時に三左衛門
三夫れは固より従弟同士の事ゆゑ半年や一年は宜しひ米は買
辭でもかしまつてを拂う心配もあし遠慮なく來ると夫れより城
内に連れ参り目付けへ親類の者帯來り候ゆへ一月ばかり養ひ
置うと届け置て其儘宅に止め置きました此方は浮田主従は木屋
方に長逗留を致し心を盡して敵を討つても更に手掛りだに
早くも其年七月の末とあり鹿殿は大ひに倦み果て鹿我々を
出づる時には縁は直ぐにも見付るやう思ひ出立をして見たが最
早半年の月日を無駄に送り大坂を限なく尋ねても七郎左衛門が
所在分らず彼れも深き計略を廻らし隠れ居る事と相見へる一先
づ此地を發足して他の地を尋ねんものをも民之助に相談に及び

ました所民之助も實に尤もとあつて茲を出立と極り民之助は
宿屋の主に向ひ民探宇兵衛殿長らくの間れ世話にあつたが
明後日は立を致さうと心得るから左様承知をして呉れるやう
に宇長らくの間お泊り下し置れ有難う存じます夫れあらば御
機宜しうと云ふので愈よ此所を出立致し是より河内大和の方
を尋ねんと云ふので宿の者には暇を告げ宿の者が送つて來るの
を民さう長らく送るには及ばん又此方へ來たら泊るぞと云つ
て送り参りまして夫れより四天王寺へ参詣を致し街道筋
へ差掛つて参ります民之助は草鞋の紐が解たに依て傍への木
の根方に腰を掛けて草鞋の紐を直すのを鹿藏は鹿お待ちなさ
ひ貴所も無お草履でせうからるな所で草鞋を直すことも彼所
に接張りの茶屋があるから那れへお出でなさひと云つて民之
助を夫れへ連れて参つて茶を居りました所へ向うから
武士二人立派やかさに扮装して四人の供を連れ主従六人急ぎ足に

て参りまするのを鹿藏遙かに是を見ると編笠を被つて居るが其
中の一人身の丈け勝れたるは正しく敵と尋ねる大達七郎右衛門
扱はと喜こび民之助に向ひ鹿那れを御覧なさい我々一心徹り
耐に負り進ひました彼れこそ誰かに大達でござる民之助は雀躍
なして喜こび一刀の柄に手を掛けて駈出さんとあすを鹿藏并止
め鹿必らず進まつてはありせんぞ其處に至つて後のは是非を
心得ねばありません兎に角彼が跡を尾け行き人なき所に
なし彼が首を取りますから急ぎなざるか」と急ぎ立つ民之助を
制し二人は密かに尾け行くとは大達少しも心注がす川堀口まで
参りました浮田民之助佐野鹿藏兩人は早くも用意あしたる早禰
一刀の柄に手を掛けバラツと駈つたる兩人大音揚げ
「珍らしや大達七郎右衛門汝昨年熊本に於て卑怯にも我が父浮田
傳五右衛門を殺害し其儘身を隠せしが今や天を恐れず斯く兩
刀を帯し天下を横行なすとは大膽不敵の輩者覺悟及べ我れこ

そは浮田傳五右衛門の次苗民之助あり鹿我れは佐野鹿藏
なり助太刀致すいさ尋常に勝負を致せ大達七郎右衛門アツト驚
き七何を白痴め跡へ飛下る所を鹿藏ヅカと來り鹿大達
汝迷やうとて逃さんや其方を尋ぬる事稍久しいさ覺悟に及べど
左右より取詰めたる流し大膽不敵の大達も通る事も叶はず呆
れ小呆れて只四邊りを見廻すのみ此時榎木三左衛門大聲揚げ
三先づお待ち下され御兩人必らずやお急きなざるか某がしは
坂御城代稻葉丹後守が家臣榎木三左衛門と申する者時大坂城
内にあり是は某が親族の者かれば世話致し居るが我々今日主
用にて導明寺へ参詣に参つて途中あり若し誤まらば大主へ
對して相濟ん是ある大達を敵と呼はるは定めし仔細ある事なら
ん義に依ては某がしもお助太刀を致さん尋常に仇討ちもおさ
せ申すが包まざ其仔細を此所に於ては語りなさい民然らば一
通りね証し申さん此者昨年十二月二日父傳五右衛門と御道にて

後れを取つたは心外に思ひ殺害致して逐電あしたる曲者ゆゑ殿
に願つて仇討免状も所持して居る願はくは武士の情を以て父
の無念を晴させ玉へ三御尤どもの事あり初めて聞たる此者の
悪業なれども今日は主用とあつて参りし途、中血を見るや、事あ
つては大主へ申し譯けあし何卒各々方一先づ今日の所は某がし
に御預けあされてお引取り下し置れるや、明日は必らずともに
仇討ちをおさせ申すまでござらうから万事も某がしへお任せ下され
是を聞たる鹿蔵、鹿アイヤ右やうなる偽はり事を申し此場を通
れんとあすか左様な手段に掛るべきや敵を討つに如何なる障り
があらうとも通す氣支ひはなひ、民主用ありとて事を左右に寄
せ通れんとは何事なり用始相成んど民之助一刀を引抜んとあし
たる時三左衛門三アイヤ漸らく仔細は儘かに承たまはつたる
が驚ろき入つたる此七郎右衛門が所業あれども窮鳥屋中に入る
時は職師是を取らずと申すではあひか全たく此者は御邊等に討

れるに相違なしなれども此所に討れれば主用も果ざるに此方主
人へ相濟んではなひか其道を考へなされ又武士の情けを知
らば此者に一夜の休息もさせたく候間明日は辰の刻に相違なく
此所へ召連れ参らば其節本懐を遂げ給へ何卒今日一日の所某がし
と此者を預け下し置れたく武士に二はござらん斯の如く金打
仕まつると、劍五六寸を引抜き小柄を取てカナリと打合せ
三武士の金打豊やお疑がひもあるまは是を以て推諱下されど
只管に設け付けたしした民之助鹿蔵の兩人も元來已れが正直なれば
其心に負けて仕舞ひ他人も斯う云ふものだと思ひ枉木の悪人を
知らずして民某がし敵を一日も猶豫は致し難けれと斯までの
仰せ殊に金打でなされしからは豊お間違ひもござるまひ然ら
ば仰せに從がひ申さん併し住居だけは見届け置くゆゑ同道致さ
ん三其儀は若しからずあれども屋敷内へは無暗に人は入れん
に依て城内に入る所をお見届けあらば間違ひも是あらず、民某

何にもとせよ、兩人は三左衛門七郎右衛門と同道、さし大坂御城の入り口まで参り、三然らば明日辰の刻に御苦勞ながら御出張下され、民如何にも心得てござると城内に這入るのを見て、浮田主従は再び木屋方へ立歸つて参り、ました主人宇兵衛は、宇「さうございませした今日御出立になつて直ぐにお歸りにあるとは……民イヤ仔細あつて歸らなければならん事が出来て立戻つたが、モウ一夜御厄介を願う、宇夫れは宜しうございませすと、其夜は泊つて翌朝巳の刻に仕度となし、民之助鹿藏の兩人は木屋宇兵衛方を立出で、大坂玉造り口御門外へ参り待て、暮せと出て來なひ、是は昨夜の内に三左衛門の計らひに依つて、大達七郎右衛門は疾うに逃げ去つて仕舞たのでございませ、辰の刻は巳に過ぎたが、出て参りませんから、二人は顔を見合せ、鹿若旦那ヒョツとして逃げるやうな事はございませんか、一ツ番人に聞て見ませう、鹿藏は先きに立つて見張り番所へ参り、鹿「イヤ御番衆へ伺がひませ

す當御城内に大達七郎右衛門と申する者、ござらうや、見張りの役人は是を見て、最横柄に「役左様な者は居らん、鹿ハ、然らば御城内に、榎木三左衛門と云ふ方がござらうや、役「我れは知らん、左衛門な者は、ない筈ぢや、鹿併しあがら、昨日御城内へ大達榎木の二人、體か、に這入つたのを見届けたのでござる、役「イヤ夫れは、人遣ひで、あう、鹿「決して間違ひはござらん、儲かに見届けたら、御存じなくば、重役の方か、但しはお目付へ恐れ、お尋ね下し、置れ、い、某がし、二人は九州の者に、て、ござる、役「此奴無禮な事を云ふ者か、な、茲を、何れと心得、抑も大坂城は、忝じけなくも、將軍家の、侍、せ、を、蒙、ひ、り、日本第一難攻不落の名城と稱する、あり、斯、小商人、百、姓、も、山、入、り、に、致、せ、を、皆、御、門、鑑、札、と、云、ふ、物、を、持、ち、居、れ、ば、咎、め、も、致、さん、汝、何、と、斯、様、な、無、禮、を、申、す、如、何、に、田、舎、武、士、に、て、物、を、知、ら、ざ、ると、雖、も、目、付、へ、願、へ、重、役、に、願、へ、と、は、言、語、同、斷、の、奴、身、の、程、を、知、れ、決、し、て、相、成、ん、早、く、通、れ、門、に、立、つ、と、突、出、す、ぞ、鹿藏は勃としたが、

鹿一通り御尤どもには聞へ候へども只今の一言論外あり總て城
内へ怪しき者入りし時は假令内外の差別なく目付へ願つて
是を誅べるなり未だお身達は武家の法を御存じなひか身の程を
知らんとは足下の事だ武士たるべき者が手を付けて頼むのを取次
ぎの出來と云ふ法はあゝまいお手前のやうな分らん者へ口を
聞くは無益の事夫れゆる方は直きに参つて重役へ申し入れて
相頼むは張りの役人愈よ憤はり役己れ無禮を申すかと突然六
尺棒を持って鹿を突飛さすとさす其棒を引捕へて鹿己れ無禮
なり棒を持って我れを討んとは何事ありと一人を其所に打倒した
り又一人棒を打て掛るを身を轉したる鹿藏大ひに怒り鹿
己れ覺悟と手許に入つて利腕を取よと見へしか肩に掛り五六間
向うへ投げ付けたりソレ狼藉者と左右から打込んで参り召捕ん
となすを彼方此方と投げ付け蹴付け暴れ廻る民之助は民各々
鎮まり給へと云つたが中々聞入れなひ是非なく致して鹿藏を助

けて彼方此方と身を轉し或ひは取つては投げ干しては投げま
か干切ては投げられさひが……其内に城内より武士大勢出
りましたるから寡は衆に敵し難く途に民之助鹿藏は大勢の爲め
に高手小手に戒めの細に掛り是より兩人は狼藉の隙を以て奉行
結城小左衛門と云ふ者に引渡され是より小左衛門右兩人を調べ
に及ぶと云ふ一條

第八席 浮田主從取調べを受く

奉行結城小左衛門と云ふは至つて正直にて其取調べ方に曲つた
事はござひません流石は上で撰んだけあつて天晴き人物でござ
ひます本多作右衛門と云ふ人が奉行を勤めた時詠んだ歌がござ
ひます

唐崎の松は奉行に能く似たり

曲らぬやうで曲らぬはあし

奉行の役は中々難かしひものでござひます扱も結城小左衛門

佐野鹿十郎 (七十八)

方へ一泊し今朝辰の上刻に門前へ来り待て暮せと来らず夫
れが爲め御番衆へ尋ねたる所左様者はおひとの事然らば恐れ
ながら重役かお目付へ伺がひ呉れるやうにと申した所重役に左
様な事は尋ねられん身の程を知らん不埒の奴ありと悪口をなさ
れ取次て呉れさせん依て直きに重役へ願うと申した所不法にも
獲物を持て討て掛り餘義なく東西に取て投げました然る所遂に
寡は衆に敵し難きの習ひ斯は召捕にあつ始末でござる右に依
て榎木三左衛門大達七郎右衛門の兩人を我々へお引渡しの義を
御取計らひ下し置れまするやうにと委細を申く入れました小
つゝ榎木三左衛門と云ふ者は城内にあるが大達七郎右衛門と云
ふ者は知らん能く吟味を致す間退つて扣へ居れど二人は敵を討
ちに来たものであると云ふから半へは入れかひ只細を解て一室
へ入れ置きました夫れより段々城中を尋ねると近頃正木三左衛
門方に一人の武士食客を致して居つたに相違かひとの事が分り

佐野鹿十郎 (六十八)

浮田民之助佐野鹿藏の兩人を白洲に召出し 小南人の者を上
げひ……此度玉造り口大手先きに於て見張り番人大勢と怪我致
させたるは容易からん罪あり抑も汝等は如何なる者であるか申
し立てる民手前ども兩人は肥後國熊本細川越中守が臣浮田傳
五右衛門の伴民之助と申する者又是るは下郎鹿藏と申する者
り昨年十二月某日父浮田傳五右衛門を大達七郎右衛門と云ふ者
殺害をなし逐電致したるゆゑ上へ願つて仇討免狀を貰ひ受け諸
國を修業なし敵を尋ねんと此大坂に参り五月餘り逗留致せし所
昨日川堀口に於て大達七郎右衛門を見付け仇討ちあさんとす
時曾家の御來榎木三左衛門と云ふ御人我れは稻葉の家來に
して今日は主用を兼ね道明寺へ参詣に参りし途中血を見せは
主人へ相濟んに依て今宵一夜はお助け下さるやうに明日辰の上
刻に七郎右衛門を召連れ此所へ参るからと金打にまで及ばれた
夫れゆゑ取ど心得當城内に入るを見届けて玉造り口木屋宇兵衛

早速榎木三左衛門を呼出し 小其方は大違七郎右衛門と云ふ者
を泊め置たかぢや 三儘かに泊め置たに相違ござひません
小然らば七郎右衛門を浮田民之助と云ふ者に引渡して何故仇討
ちをさせさい 三手前宅に居りません 小ナニ居らん如何致し
た 三御意にございます 昨日主用にて恐れながら七郎右衛門を
召連れ参りし所途中に於て仇討んと申する者はあり依て今日は
主用おれば明日必ず討せ遣はすと申し立歸りし所昨夜彼は逐
電仕まつりましてございます 小ナニ逐電致した... 其方とは
何の縁故がある 三從弟同志にございます 小然らば取返し
のであらう 三決して左様お事は仕まつらす逐電致したに相違
ござひません是に依て右の次第結城小左衛門より逐一御主人丹
後守殿は言上に及びましたる所丹後守殿大にお怒りあつて
丹憎ッくき正木三左衛門の致し方彼れ取返したるは武士の情け
を知らざるあり不埒千萬早々彼れが食祿を召上げ退放致せ又民

之助鹿藏と申する者父の仇討ちをなさんとは天晴なる事あり番
士の者へ手向を致し怪我をおさしめたるは憎ッくき罪おれど
も一人は親の敵を討んと云ふ一人は主家の仇を討んと云ふ忠孝
兩道を全たう致す者なれば其罪を差許すに依て左様取討らへど
の事は依て小左衛門上の仰せに基つき民之助鹿藏の二人を呼
出し此段を申し渡ししました 兩人は敵は逃され一旦身は緋目の耻
を受け如何にも残念ありと口惜し涙に暮れたが詮方もござひま
せん此上は何れへ取返したるか 榎木三左衛門に尋ねんものを
来て見れば已に榎木は今朝前拂ひにあつたと云ふので愈よ七
郎右衛門何れへ逃げたか更に分らず據ころなく又々木屋宇兵衛
方へ立戻り主人に此災難の事を逐一語りますと主人も氣の毒
に思ひアレンと心慰さめて呉れました夫れより八月の中旬
まで茲に逗留を致して居りましたが何日まで斯しても居られま
せんに依て是より阿波の徳島へ乗込み四國を尋ねやうと云ふ事

になりました然る所木屋宇兵衛が遠縁の者で阿波の徳島に淡路屋佐兵衛と云ふ者がござひます夫れゆゑ宇兵衛が阿州へお出でにありましたらどうぞ此旅籠家へお泊り下さひと云つて書面を呉れました依つて右の書面を懐中に入れ再び木屋方を出立に及び船の便りを求め阿波の徳島へ参りまして淡路屋佐兵衛方へ泊りしました其晩から民之助は俄かに發熱致し容易からざる有様と相成り鹿蔵大ひに驚ろき持合せの薬を出して是を服せよと致し鹿蔵かりあさひといろく介抱したが中々持合せの薬り位るでは利き潮々にして夜明けを待て主人を頼み近所の醫者を呼んで費ひ茲で醫者が参り民之助の病氣を診て貰つた所醫者は容易からん發熱でゐるに依つて能く手當てもしなればならん又恐老も充分に療治を致さう是は旅の疲れと雨露霜雪に打れ夫れより病ひを惹起したのであると云ふので是より充分の手當てをしたが看病は男より女の方が宜ひから淡路屋の娘又は妻

家の女子あどが代るく手當看病をして半月ばかりと云ふものは茲に逗留をして居りましたが能く手當てもして呉るので大きに病人も喜こんで居りました然るに鹿蔵は其近邊の社へ参り水垢離を取つて民之助が病氣一日も早く全快なさしめ給へと祈りあど致しました甲斐が現はれ大きに快ひ方へは向つたが醫者の云ふには外へ出てはならんとの事夫れゆゑ外へ出る事は出来ません鹿蔵は熱々と思ふやう初め六坂にて五月の徒日を送り今又是へ来て長の煩らひに路銀は盡して仕舞ひ今は前後の策略もなく如何致したものであらうと夫れのみを心配致し間があれば外へ出て若しや敵は居りは致さんかと尋ねて歩きまされたが更に手掛りもござひません此淡路屋佐兵衛の娘におなると云ふ今年十八才になる至つて美人がござひます鹿蔵が留守になると民之助の居間へ来ては薬りを煎じたりいろくの世話をして居ります新が民之助は至つて美男であるに依つて如何ある様によ此おな

民之助は思ひも依らざる一言にハッと思ろき此娘斯ばかり想ひ

長くも居られませんから出立を致しますお禮は世の中に出れば

表を、は、忝じけなく思へども、今は敵を討つ大事の身の上、已に國
表を出る時に母の言葉に餘の事は兎に角、汝も若い身空あれば
若しも婦女子に心を寄せるやうでは、逆も本望は達せられん殊に
は、武士の耻辱を惹出す事にもなるから、身を慎みて参れよとの仰
せ、今ぞ敵を尋ねる身あれば、中々以て左様な事思ひも寄らずと、心
を定め、民扱は其所許斯まで、に某がしを思ひ呉るゝは、忝じけ
くは、候へども、然すれば、常家に迷惑を掛け、又思ひなつたる親御へ
相濟んに依て、此儀ばかりは、斷はる早く、其方へ、た出であさひなる
「アイ」と云つた娘は、兼て隠し持たる短剣を引抜き、アツヤ咽へ突
立んとするの、有様、民之助、大いに驚ろき、其手を押へ、民是は短慮
千萬今の若さに、自害するとは、何事あり、先づ鎮まりあさいなる「イ
エ」女口のより、此やうな事を申し上げ、貴所には、嫌はれ
耻かしめられ、何面目あつて、顔を合する事が出来ませう、寧ろその事
に、私にくしは、此世を翻らめ去りませう、どうぞ、其手をお放し下さる

表を、は、忝じけなく思へども、今は敵を討つ大事の身の上、已に國
表を出る時に母の言葉に餘の事は兎に角、汝も若い身空あれば
若しも婦女子に心を寄せるやうでは、逆も本望は達せられん殊に
は、武士の耻辱を惹出す事にもなるから、身を慎みて参れよとの仰
せ、今ぞ敵を尋ねる身あれば、中々以て左様な事思ひも寄らずと、心
を定め、民扱は其所許斯まで、に某がしを思ひ呉るゝは、忝じけ
くは、候へども、然すれば、常家に迷惑を掛け、又思ひなつたる親御へ
相濟んに依て、此儀ばかりは、斷はる早く、其方へ、た出であさひなる
「アイ」と云つた娘は、兼て隠し持たる短剣を引抜き、アツヤ咽へ突
立んとするの、有様、民之助、大いに驚ろき、其手を押へ、民是は短慮
千萬今の若さに、自害するとは、何事あり、先づ鎮まりあさいなる「イ
エ」女口のより、此やうな事を申し上げ、貴所には、嫌はれ
耻かしめられ、何面目あつて、顔を合する事が出来ませう、寧ろその事
に、私にくしは、此世を翻らめ去りませう、どうぞ、其手をお放し下さる

も余快致して見れば茲に何日まで居つても途には路用も手薄く
かりましたれば明後日茲を出立致しては如何で民之助は心の中
におあると斯様に夫婦の語らひをあし今邪慳にも振捨て行くは
不便には思へども固より大望ある身今一婦人に迷ひて徒に月日
を送つては相成らじ大事の前の小事ありと心を決して民如何
にも尤どもの事然らば早々出立を致さんと宿屋の主人を呼んで
民扱長らく御厄介にありましたが最早出立を致さなければなら
んから残らずの勘定をして呉れるやうに主左様でございませし
たかお立ちとあればお心置きなく御出立をささいまするやうに
と茲で今日出での勘定を仕拂ひました鹿藏は風呂へ参つて民之
助一人座敷に扣へて居る所へ娘のおあるが這入つて参りまして
ある私くしは只今唐紙の蔭で聞て居りましたか明後日御出立と
は餘り火急ではございませんか若しや路用の金に差支へな
れば私くしが調達を致しませう又常宿錢は私くしの方で能きや

に誤して置きますがせうぞ今暫らく是にお在で下さいましと
涙を流して申されましたるから民之助は何と返事も有り兼ねて
思案に暮れて居りますと主人佐兵衛の聲としておなるや
ど呼はれて是非かく跡に心を残して出て参りました民之助は只
茫然としてア、此儘振捨て行くは不便には思へどもさうもなら
ず彼の言葉に従つて何日までも居たいが泊つて居れば宿錢に
も差支へる娘が調達すると云つても金の盗むやう奇事にも
あらば尙更罪に罪を重ねる道理迷惑を掛けねばならんから是は
立退くより外に思案はないと覺悟を極めて居る所へ鹿藏も立戻
つて参り鹿若旦那何をろんかに考へて在らつしやいます
民時に鹿藏今までお前には隠して居たが私は生涯の誤まりを仕
出かした仔細は斯様く娘の不義を致した事を語り尙娘が金
と調達致すと申ししたと云ふのを聴て鹿藏は眉を蹙め鹿私くし
も此間から貴所の御様子賃は幾だとは存じて居りましたが飛だ

事が出来ました一婦人に迷へば一失を生ずると昔しから申すで
はございませぬか今日親の仇を討とうと云ふ者が女子に心引かれ
未練を残すやうでは進も敵の首は討れませぬに迷うては劍
を渡る事も恐れず火の中へでも飛込む騒ぎが出来るとはござい
ませんか少しも早く茲を引拂より外はございませぬ又娘が金
を騙して呉れると申しても女は銀金の時はへはあるものでは
ございませぬ大方家の金を盗み出す位の事ではございませぬ然
あらば尙更此家に迷惑を掛け恨みを受ける事必定あれば明後日
と申しましたのが今宵密かに出立をなさい民夫れならばと跡に
は心を引かれるが大望を懐く民之助便りに思ふは鹿藏一人であ
るに依つて急用あつて出立致す旨の置手紙にして是より此宿屋
を夕暮にあつてから近所に用達しがある云つて荷物はと云ふ
はホンの儀か是を抱へて其儘に茲を立出で是より山越しをして
道を替へて通れました跡にて娘おなるは此手紙を見て大いに歎

第九席 浮田主従非人の群に入る

き情けなき事に思ひ密かに家の金子三十兩を盗み兩親に奪ひ
をして是は民之助の跡を追て駆落ちを致しました跡にて家は
騒動とあり東西南北を尋ねましたが更な其行方も分りませぬ
初も浮田民之助佐野鹿藏は此所を無沙汰にて立出で是より大和
へと参りましたが最早身に付たる金にては更にかく宿る事も相
成り兼ねれば據ころなく二人は相談をして武者修業とあり諸方の
余術道法に來り同商賣の由を頼んで一泊をなし是より二人は彼
所此方と歩き一椀の食に預かり大達の在所を探せども更に手
掛りもございませぬ大和より京地に入り夫より仙道を志し
何所と的もかく参りましたが美濃國加納天王の森と云ふ所へ参
つた時には時々はは盡き衣類はボロ／＼になつたを身に纏ひ居
りましても敵を討つ身の上なれば青竹の中に刀だけは仕込んで
居りまます此所へ來つて見れば此邊は道場と云ふ物かく宿る

べき家もございませんモウ乞食の群に入つて一時を凌ぐより外
あしア、然るにても情けなき事ありと思へども金がなければ乞
食に赤るより證方あしと鹿藏は乞食が人の袖に縫つて居るのを
見て居るとどうぞや、旦那様一文遣つてお呉んあさい……西
や東の旦那様と申す中々シャア、して居るが旨いものだ此乞
食の聲と云ふものは容易に出る譯でない幕府が瓦解をした時
に根津邊りの御家人の娘が下谷の山下雁鍋邊りの前に立て鏡を
貰うの扇を持て顔に當て、向うの人の胸へ突付け御合力を願
ひます、と云つても皆あつて仕舞う扇を取つて見ると鏡を
くれる人は何日か行つて居るやうでは貰へない何でもシャア、
かしのなと云つて居るやうでは貰へない何でもシャア、
として向うの胸へ扇を突付け自分は顔を上げて旦那様頂だかし
て下さいと云へば貰へる夫れゆゑ馴れた乞食は扇を出して、手
許は御面倒さまでどうぞ頂だかして下さいと云つて貰つた鏡をば

手に持て居て溜ると袂へ入れて居りますさうシャア、つくに赤
れば自然貰へます能く歩きながらどうぞや、頂だかして下さ
いと大きき赤聲を出して云ふのは餘程馴れてシャア、つくなもの
顔を見せてやつて居るが那の聲は中々出るものでない茲に徳川
黒桑に鶴賀新内と云ふ武蔵のあつて屋敷は本所北割下水にあり毎
日御殿へ出て日の暮れに兩國橋の袂へ來ると覺の乞食が居て西
や東の旦那様へ足の川ひませんものぞや、一文頂だかして
下さいと時はつて居るが其の良い聲と云つたら實に言語に述べ難
い此鶴賀新内と云ふ人は淨瑠璃が好きであつてどうぞや、口兩國橋へ
節付けをして何か弘めたいと思つて居りました所毎口兩國橋へ
來ると覺の乞食が大きき聲で鏡を貰つて居るのを聞て其聲に惚
れ、として此奴の節を取つてやらうと氣が注て或日の事、新
コレ、乞へ、新、俺は天下の黒桑鶴賀新内と云ふ者だが如何
にも手前の聲が良いぞうか手前が節の聲を取りたいと思ふが毎

晩飯を食して錢を百文宛遣るが每晚俺の所の庭へ来て其聲を出しては呉れないか乞食も一飯食してくれた上に錢を百文くれると云へば何より其時分の百文は大したもののでございませうから乞宜しうございませう毎晩参りませうと云ふので夫れから右の乞食が割下水鶴賀新内の庭先きへ来ては一時位宛聲を出さして夫れを聞きチャン木に留めて置いて遠く新内節と云ふ物が出て來ました是は鶴賀新内が工夫をしたので新内には下卑た所があるのは元々宿無しの乞食が錢を取つたものであるから自然下卑た所がございませう扱も説鹿藏は民之助に向ひ扱若旦那世にあらば細川家の指南番の次男如何に答落なせばとて非人の仲間に入ると云つて外に仕方もあし殊に貴所は身体も悪くせめて乞食の群に入り小屋の内に圍まれてお在でございませう御辛抱下さいませうか民如何にも宜しいさ

う云ふ事に致さうと乞食の様子をみて居ると茲に乞食の取で此木枯堤に居るのが小車の源次と云ふ者では元去る武家の次男であつたが伏買打の三道樂で親の許は勘當され身の置き所もあつたに乞食の群に入り今では其中でも頭になつて居りますすが元が武家だけあつて弱きを助け強きを挫く仲間の者を憐み義侠の志ざしがあるもので人にも可愛がられ大層評判も宜いから一ツ是へ頼んだら乞食でも物の分つた奴ゆゑ宜からうと思ひ鹿藏は彼の源次の前に來て鹿扱我々は中國の者かれども主家を浪人してより路用も盛き珠に一人は此通り身体も悪い何卒此群へ入れては下さらんか是を聞た小車源次は源見りやア中々立派な男乞食になるは惜い者だが金がなければ仕方かぬへ仲間へ遣入るには仲間金と云ふ物が要るのだがそんな物は一文も要らぬへ俺が承知だ若へ方は身体が悪いのか鹿何日ぞや長頼ひを致しましたが又長の道中水變りでもあつたと見へ斯様に身体が悪くさ

りました 源夫はマア可哀さうに今小屋を推らへさせてやる
から……ヤイ尾張江州美濃 美へイ 尾へイ 江へイと皆な返
事をする 源手前達皆なで小屋を推らへてやれ宜うございます
と一同の者源次の紐下に非道な奴は一人もおい皆さで小屋を推
らへ其内へ民之助を入れてやりました鹿殿は桶を借り狐を身
に掛ひ一文二文の袖乞ひを致して歩きます源次は又時々病人を
見舞て呉れ 源可哀さうに腰を引かひやうにしろ有ったけの
狐を掛てやれ……サア妻からうからはを掛て居るといふ
切にして呉れさすので民之助は 民いろく 親切さまに有難う
ございますと涙に吞れて居ります鹿殿は此先きに帝釋天の社が
あるから是へ詣つて一心不乱に主人が病氣を快を祈り問があれ
ば民之助の眷さどを撫で療り種々看病を致しますので外の者は
ア、鹿公は頼母しい女だつて鹿公程には世話が出来ぬへ感心さ
若だも寝めて居ります其内に早や寛永三年八月申渡とあり天王

の森の傍へにある櫻満開を致し居りました小車源次は 源民公
どうだへ工合は 民有難う存じますいゝ御親切にして下さ
いまして實に神佛けとも…… 源ろんな事を云ふには及ばぬへ
櫻が大分満開したがどうだへ癒てばかり居ては反つて毒だが一
ツ花でも見ないか少しは氣も晴れやうから…… ナニ腰が立ない
可哀さうにサア皆な手傳て民公に櫻でも見せてやれ宜うござん
すと大勢が民之助の腰を押へ手足を伸へ土手の上にて遊を敷き民
之助を上を下ろしてサア民公茲で礼見をするが宜い大分賑やか
だ 源者さ茲で礼見をしやうと桶の中から食糧を出し酒みの
酒を飲んで 源どうだ民公一ぱい飲ひか 民イエの体が悪うと
さいますから飲めませぬ 源さうか…… どうだへ首さ青天井を
見て花の下に寐て居るのは幾らお大名でも此眞假は出来りエ一
句一ツ吐かうかな ○何か一ツ吐きぬへな 民貴所はおやりに
ありましたか 源佐は元氣傳語が好きで随分やつたものだ

大名にあれば寝られし花のもと
と云ふのはどうだか 民成程某がしは花の下に斯うして寝て居
るがまさかにか大名は茲へ来て寝られませうまい夫れで一句や
ませう 源何と云ふのだ 民左様さ
源ッム 感心だ中々旨へ「乞食の中に思ひ」 歌を謡うもあり
鳴もある其中に民之助は只茫然と過去未来を思ひやり花七日と
云つて七日盛れば花は散る人の身の上は榮枯盛衰はあつたものと
は云ひながら我が身不運な者があつたかと思ひ惱んで居る内
に口の暮れ方にあれば 源ッム 皆か歸らう……ソレ民公を
連れて行けと大勢に扶けられて居れば小屋に歸り 民どうも皆
さん御親身さ文に……「そんな事は云はずと宜いな前の世話をす
るのも何かの因念だッア」 宜いやと云つて居ります扱も茲に
敵大違七郎右衛門は先送而大坂城内にて榎木三左衛門の情けに

依て路用を貰つて逃げ出し東西南北を彷徨ひ此の美濃國加納近
在長池村と云ふのへ参つて百姓の家に宿り固より巧言令色の曲
者此所に道場を開き土地の博奕打ち浪人などに剣術を教へ剣術
を資本にして利得ある事ゆゑ此地に住み今日しも天王の森へ櫻
を見物に行かんと深編笠に面を隠し來つて見れば非人どもが集
まり歌を詠むやら又川柳なをやつて居るから何の氣さしに其
中を覗いて見ると浮田民之助乞食の淵に這入つて然も壁となつ
て居るのを見てアツと驚るき扱は此奴流れて此國へ來つた
か路用に盡して今は乞食の群に這入つたと見へるタイ見付けられ
ては一大事其儘道を替へて長池村へ歸りモッ彼れを助け置時に
は杖を高く振る事出來ず今茲で廻り逢つたを幸ひひ彼れを殺し
て呉れんと是より悪計を廻らす一條

第十席 民之助返り討となる

大違七郎右衛門は或夜劍道の門人達の内平常心宜からん者を捉

み三四人招いで是に馳走をなし何れも此者は盜賊或いは博奕か
を致し無頼の悪漢あれば是に附して置て身の上を語り 七我
れは肥後の熊本にて浮田傳五右衛門と云ふ悪漢の爲めに耻しめ
を受け如何にも心外ゆゑ是を殺害して身を退ぞきたり然るに其
悴殺の悪さを思はず我れを討んと云ふので付け狙ひ今は食非
人となつて此才枯塚にあり彼一人あれば討つ事は易けれども下
郎の佐野鹿十郎と云ふ者は容易ならん奴計略を以て御身等の力を
借り受けんと心得るが如何でござるか何れも非を理に飾つての
物語り固より悪者ども二ツ返事で承知して甲如何にも先幾
を見てせざるは勇あきなり及ばすながらお助太刀致すでござら
う 七ウム夫れは何とも以て忝じけな手計略は斯様云々
と何か申し合めましたるから悪者どもは手を打つて如何にも
計なりと茲に民之助を殺さんど云ふ巧みを致しました時しも寛
永八年三月十七日今日は朝より夜陰なりしも何日しか春雨降出

し木枯の土手に居る非人は終日の雨に何所へ行つても貰ひはな
し皆小屋の内にゴロ 寐て居ります浮田主従も共に狐を閉し
て雨を凌ぎしが扱夕暮れ近くある頃ほひに雨は止み空一面に晴
渡り併し幾分か薄寒く鹿殿は民之助にあり居たが焚火して
せ自分には小屋の外に出て外の乞食と雑語をして居たが焚火して
民之助を温ためやらんと彼方此方の木の皮や木の屑を拾ひ集め
て居る所へ武士一人駈来り 武此中に小屋頭小車源次と云ふの
は居るか 源私くしが源次でございます 武某がしは加納問註
所の役人森太兵衛と云ふ者ぢや一昨夜御金藏を打破りし盜賊あ
つて吟味致せし所未だ何分其手掛りがない殆ど其望みを失なひ
居るが就ては其方ども非人の事ゆゑ上に御不審なきにしもあら
ず依て一々乞食を取調べるどの仰せ其方達の内には悪者もある
まいが上の權で取調べあければあらんから左様心得ろ尤ども我
ろく事は無い又老人小僧病人は無れて參るに及ばん達者の者ぞ

加納の役所へ直ぐと参るやうにと云ひ捨て居て行く是予七郎
右衛門が策略でございます是を聞たる小車源次 源「キイ楠公、美
濃、尾張、江州皆あ茲へ頭を集める今御金藏破りの盗賊が出ねへの
で此方を疑がうのぢやアねへが一通り調べるから加納の役所へ
出ると云ふのだ一同の乞食は籠棒めろんあ事があるものか調べ
あんぞ受る因念はねへ 源「何でも宜いから民公に女乞食は行
には及ばねへ外の者は皆な行け鹿藏は何となく虫が知らすか行
きたくなければ」より呼出し出さければならんと思ひ 鹿「旦那
様」私くしは加納の役所まで来いどの達し何か盗賊の吟味だ
と云ふ事其やうあ悪い事をしないでも調べと云やア出なけりや
アなりません直ぐに行つて参ります暫時の間苦しはございませ
うが御勘辨なすつてお待ち下さるやう「民之助は何となく心細く
後ろの小屋には女乞食一人居るのみあれば 民「鹿藏一緒に参ら
うか 鹿「イエ」貴所は身体が悪いのに外の者に手敷を掛るも

氣の毒直ぐに行つて参りますから 民「早う歸つて来て呉れい
鹿「直ぐに歸つて参ります外の者より用の濟次第に先きへ歸つて
参りますお風邪を召してはならんと思はれお着て居た蓋を掛け餘
り掛つても重くなるばかり鹿藏は何となく心残り 鹿「待て在ら
つしやいまし 民「急いで氣を注げて行きささい線しも深き主従
は心ならずも其儘に鹿藏は一足行つては二足戻り後ろ髪を引る
心「地海々に加納の役所へと運むきました跡に残りし民之助蓋
垂「小屋の内へ過去未だを思ひ世の中に我れ位に不運命の者は
あるまい歎いて返らぬ事おがら敵は大坂にて通し身は斯様不
具の病ひに罹り日夜鹿藏が艱難苦勞見る目鬱悒有様と只歎息を
ぞなして居るのみ折しも何れよりか忍び寄つたる武士三人非人
小屋を彼方此方と見廻して時分は宜しそと三人は打黙さ彼の
土手に上り「ヤア」民之助「と呼ぶ聲に何者なるか民之助と
呼ぶやらんと不意に息へば又民之助蓋へ出る浮田傳五右衛門の

伴民之助早く出ると呼はる聲に何事あるかと青竹に任込みし刀を杖に菰垂を捲る途端に突立上つた七郎右衛門七汝の戀人敵の大達七郎右衛門此所に尋ね参つたサア茲へ出る民之助は正しく敵の大達七郎右衛門に相違あし敵より名乗り来るは是程幸はひはなけれど何分ともに病ひの爲め足腰利す其悲しさ無念口惜しさは言語に述べ難く現在敵に逢ひあがら討つ事叶はず又高ぶは三人の武家返り討ちにあるは知れた事早く鹿藏立歸れど無念を忍び只歎くのみ一言の口も開かず七アハハ、扱は汝腰が抜けたか腰抜け武士め汝如何に成り下ればとて非人にあるとは何たる事犬に均しき大白痴……各々御み出して耻面掻しておやんなさし心得たりと二人の者情け用捨も荒氣の男小屋の内より民之助が聲を引摺み土手の上で引摺り出し銀扇にて二ツ三ツ丁々ど七珍らしや浮田民之助汝親を討れて無念であらう残念だらう偶

に出でて大達を討つ事も出来ず非業の様だ我が抜けたとは不便千万武士らしく尋常に勝負をしると云ひたいが夫れぢやア汝と勝負が出来来まへ何たる姿にあり居つたと足を揚げて病人をドウト蹴倒す民之助起上らんとあす所を大達は扱手も見せず民之助が肩先さ深く切込込れアツと云つて民之助其場へドゥーと倒れしが今は一生懸命に民憎ッくい雑言汝如き人非人世の中にあるべきかど青竹の中に仕込みし一刀を引抜んとなす所を左右より二人の悪武士右と左りの手を確かり押へて動かさず民之助は無念やる方なけれども長手の煩ひに力は抜け身自由からず大達は民之助が苦しむ様を打眺め七アハハ、大層血が出るあ苦しいかサア敵が討ちたいか民己れ極悪人武士の情けを知らん奴覺悟をしると苦痛を忍び立たんとすれど立つ事能はず民己れ卑怯を千万にも足腰利ぬ病人を討んど二人の味方を連れ来り左右の腕を押へさせ自由を止めて害さんとは未練ならずや武士の法を我

れは知らんか今にもあれ鹿蔵立歸りあは何とて汝等一人として
生し置くべきや假令身体不随ありともヤワカ阿容く殺さるべ
き早く鹿蔵立歸つて參れ鹿蔵くど聲を限り呼立てるを大達
は尻目に掛け七コレ民之助世迷ひ事を云はず能く聞け汝が兄
の民十郎を自滅させんと立花金彌と計略を申し合せ御我蔵を切
破り奪ひ取つたる正銘の正宗其名も付けた旭丸の切味見よ汝の親
々切腹をした今又此刀で汝を切て呉れる旭丸の切味見よ汝の親
も是にてしつた親子諸とも此刀で果ると云ふは能く因果の
突張た奴冥土の土産に大達が切て呉れる又汝が味方の一文奴鹿
藏も今片付けて冥府へ遣る念佛なりとも題目なりとも勝手あ物
を念じて死んで仕舞へど飽まで憎き嘲けり調弄堪へ兼たる民之
助忿怒の色を前に現はし目を露出し民扱は旭丸の刀も汝が盜
み取つたるか先年大坂にて汝偽りを搦へ夜逃げをちしたる卑怯
者又毒計を以て我れを此所に放て一人ならず加勢を連れ來つて

殺さんとは汝こそ臆病武士腰拔け武士汝犬畜生假令此身は殺さ
るゝとも恨みは此世に執着残りなどか其儘に助け置んや恨みの
一刀真この通りと二人の者を左右に刎退け仕込みし一刀の鞘を
拂うと見へしが忽ち來つた二人の悪者又々民之助を夫れに力
一ばいに捻付け動く事能はず大達は苦笑ひをして民之助が髻を
確かと掴みたれへ捻伏せ七サア畜生畜生の手練の程を見せ
てやる今翻り殺しにするから覺悟をしろと一刀の下に竹杖持つ
たる左りの手を切落すアツと民之助が苦しむ体を見て大達はカ
ラく笑ひ七どうだ苦しむかサア右の腕も此通りとバツサ
リ右の腕を切落す二人の武士手を打てイヤ先生の御早息の音を
七恐れ入りす斯様な者を切つたどてお賞めに預かつては面目
次第もござらん初先生非人ども歸り來らば事面倒最早息の音を
止めてお仕舞ひあさい七尤も千万あり七郎右衛門片足揚げ
て夫れ脚力に任せて鶴尾の邊りを差貫けば哀れむべし民之

助二十才を一期とし鹿蔵を奪んで尾州木枯堤にて無残にも相
果てましたは何かの因念悪者どもは其儘に 七いさ歸りを待て
鹿蔵を殺て退けんと三人とも土手を下つて向うの方へ急ぎ登り
ます此方此方の小屋の後ろには只一人の女乞食のおみつ婆最前よ
り此有様に仰天さし女の身にて出る事出来ず只恐ろしさに南無
阿彌陀佛と唱名を口に唱へて佛を念するのみ扱も乞食の一行は
役所へ行かんやドヤ／＼やつて参りますから大達の廻し
者一人の武士野來り 武コレ 非人ども先刻汝等を招いたが
己に御金蔵を切破りし大盗賊只今捕縛に相成たれば其方ども参
るに及ばん早や立歸れと云ひ捨て引返しをする一同は顔を見合
せ何だ馬鹿／＼しい山熊ノラ入せうしたんだな人を茲まで呼出
して宜いから歸れもねへものだと面々ブツ／＼云つて居る中に
鹿蔵何とも民之助が身の上心許なく源次に此由を告げ已れ一人
逸散走り小屋の所へ來つて 鹿若旦那様鹿蔵只立歸りました若

旦那どうなさいましたと土手に昇れば退は如何に民之助は雨
切落され難り殺し虚空を掴み相果て居る有様に 鹿アツと云つ
て鹿蔵は腰を抜さんばかりドウと倒れ 鹿旦那様此有様は何
事ぞ斯る非業の御最期とは淺間しやと且旦那様と呼べと叫べど
亡き腕の今宵は何地に宿るらん最早紙一枚の人とあつたるか情
けあや如何ある者が旦那様を難り殺しにさしたるかど狂氣の如
く死骸に派付き歎きに沈む折しも後ろの小屋の菰垂れを上げ道
出したる女乞食のおみつ鹿蔵が側に寄りみつ鹿蔵さんく 鹿
ヲ、誰かと思つたらお前は何の事か 鹿シテどう云ふ譯みつ三人の武士が來て
をた遂げあすつたかお前は知つて居るか 鹿シテどう云ふ譯みつ三人の武士が來て
狂人同様にあるのも無理はさかぬがマア心を落付けあさい私しは
委細の事を聞て居た 鹿シテどう云ふ譯みつ三人の武士が來て
民さん小屋から引出し大連七郎右衛門だど云つて口絶言夫
たに又旭丸と云ふ刀は俺が盗んで民十郎に罪を設せた此刀では

手前も兄も死ぬば親父も是で殺した手前も是で死ぬると云ふ
は能く因念づく殿たり叩いたり結句の果てには
腕を切落し足蹴になしたる有様を見て居た私しの心持の悪さ出
やうとは思つたが女の身として出れば踏殺されると思ひ民さん
の翫り殺しに逢うのを見て念佛を唱へて居りましたと前後も不
揃ひに語るを聞て居りました鹿藏怒れる面色赤を注ぎ拳を握つ
て齒噛をさし鹿ッーン曰れ大達七郎右衛門卑世にも我が御主
君の病氣を幸はひ一人ならず加擔人を連れ來り翫り殺しにあす
とは何事なりいで彼れを討て無念を晴させ申さん……コレかみ
つどの何の邊へ逃げ居つたかみつ私しも餘り恐ろしさに菰を
つて居りましたして分りませんが何でも土手の下へ降り笠松の方へ
行きましましたと云ふのを聞て鹿藏は竹に仕込みし一刀を引提げ一
目散に駈出さんとさしたる所小屋の陰より現はれ出でたる小車
源次 源鹿公侍て 鹿ア、お敷少し侍て居て下さいと駈出さう

とすの源次が引止め 源ア、
心持ちが悪く民公の病氣が氣に掛り先へ歸つて見れば今たみつ
婆アの話に民公が非業の最期其身の素性も悉皆聞いて俺も思
はず涙を流しア、情けかい可哀想事だと思つて居た今お前が
跡を追つて行つた所で若しも計略にでも落るやうな事があつて
は尙なるまい向うは盜賊の吟味と偽はり外の者を呼出し民公一
人にして置て駈へ廻つて殺さうとは能く計つた奴等の巧み
此上どん計略があるか知れぬへ又民公の死骸も此儘には拾置
けかい願つて出りやア其身の素性も云い立てなけりやアあらね
へさうなれば敵を討つには些と面倒俺達も迷惑をするから此源
次が計らひで民公の死骸は葬ひつてやる必らずどもに逸まらな
何れ時節を待て木望を遂げるが上策だらうと平生から義侠に富
んだる源次が情けの言葉に 鹿ア、有難う存じます如何にも仰
せ御尤ともございますと云つて居る所へアヤ、歸つて來た

一同民之功の死骸を見てアツと驚ろき何と云ふ殺しやうをしや
がつた民公は夫れぢやア敵を討つ身の上か夫れが返り討ちに
つたとは可哀さうだと一人として歎かん者はございませぬ鹿藏
は覺悟を極め鹿斯まで武運に盡たる我々主従斯非人にまで成
下り又若主人を先立て我れ一人跡に残つて何かせん所詮敵は討
つ事出来ず冥土の御供致すより詮方なしと鹿藏は一刀の鞘を拂
つて諸肌究るぎ胸腹へ突立んとあしたる其手を押へた源次源
「コレ」告あして止めねへか……今俺の云つた事が分らあいの
か今お前が茲で死ねば犬死だらう先立つた主人の無念は誰が暗
す能く考へて見ろ昔し唐土越の勾踐軍に負けて敵の掬にさ
り無理難題を何でも聞て居たが日夜心を痛めて耻辱雪がんと思
つて居た所が范蠡と云ふ家來があつて遂に會稽山にて耻辱を雪
ぎ遂々呉王扶差を討つたと云ふのを俺が何かの本で見た事があ
る今茲で手前が死んでどうする時節を待て民公の敵を討てやる

積りはないか「外の乞食も親分の云ふ通り鹿公が死んでどうする
と刀をもぎ取りましたので鹿藏も鹿成程云はれて見れば尤と
も返すくも私しの誤まり如何にも仰せの通り時節を待ちます
る源ラ、さう分れば何より是から大勢して穴を掘り民之功が
髪の手を切つて鹿藏に渡し死骸は埋めて一ツの石を建て香花を手
向け面々回向をして呉れる源次を始め一同が鹿藏をいろくど
慰さめ七日の間魂は家の棟にあると云ふから能く回向をする
が宜ひと云はれ鹿藏も夫れより毎口水或ひは花線香をす回向回
向をして思ひましたが茲に居る事三七日何日まで斯致しても居
られませぬ最早病人もあいな事なれば是より鹿藏は一同に別れを
告げて此所を立退くの一條

第十一席 鹿藏名古屋入り

扱も鹿藏は一同の乞食に別れを告げ籠を運べて是より乞食の姿
にて尾張名古屋の城下に入りましたか扱も茲は六十三萬石の城

下實に金の銀雨晒しと云ふ位に繁華の土地でありますか
ら彼方此方の軒下へ立ち一文二文の袖乞ひを致し歩きました成
日尾州の御指南番小藤田彌兵衛と云ふ人の道場へ来て見ると眞
影流と云ふ札が出て居ります中では大勢の門弟達が「お面お小手
と類りに劍術を仕つて居る鹿藏は劍術ゆゑに氣の狂つた位の人
人ゆゑ是を見て居ると何うも負けたり勝つたり中々面白い何れ
も下手な者はばかり鹿藏は見えて居たが江水を流して習ふ劍術の役
にも立ぬ世の目出度さ」際りお可笑ひのでクス／＼笑つたスル
と勝た人は氣が注かぬいが負腹の立つて居る者が是を見付けて
甲「何だ乞食が笑つて居るヲイ同役大方武士の癖に意氣地がない
とでも云ふのだらう憎ツくい奴だ辛き目に逢してやらう 乙「マ
ア乞食あそに搦つても仕方がない 甲「イヤさうでない」突然表へ
ヅカ／＼出て来て 甲「貴様は一文貰ひではいか何故此道場を
覗いて笑つた 鹿「夫れは人間です喜怒哀樂と云つてお可笑い事

があれは笑ひます 甲「貴様も笑うからには少しは心得はあ
だらうサア立合をしる 鹿「少しは心得もありませうから仕りませ
う 甲「道具へ乞食は入れられんから今茲へ道具を持って来る……
サア道具を付ける 鹿「道具には及びませぬ此竹刀を拜借します
甲「さうかサア宜いか」中川伴藏と云ふ人立合つたが忽ちにして
甲「参つた」其次ぎに山田佐兵衛 佐「同役の敵と打込んで来るのを
鹿「お面と云つて一ツ打れたから 佐「参つた」夫れから代る／＼十
三人と云ふ者皆な鹿藏の爲めに打負された女關へ出張て小藤田
先生此有様を見て居たが如何にも腕前が勝れて居る 小「コレ／＼
乞食あそ、立合をするとは何事だ」さうも先生へ御覽に入れ面目
次第もございませぬ 先「逆も其方達叶うものでない彼の乞食は
尋常の者に非ず服の配り足の踏方天晴の腕前……コレ／＼其方は
何れの者ぢや 鹿「私くしは中國の郷士の倅でございまして飲買
打の三道具で親には勘當をされ流れ流れて此やうな姿にありま

した先ウム其方見所があるに依て身が手許に於て飯焚きでも致してはせうだ鹿有難うございませうか何分願ひますと云ふので小藤田先生に乞食の足を洗つて貰ひ茲に飯焚奉公を致して居りました然る所茲に日本の道場衆しと韓名をさされた佐藤登之助と云ふ者あつて身の丈六尺八寸鬼髭左右に生じ眼は人を射り筋骨逞しく年齢三十五六東海道仲仙道と何所の道場でも誰あつて是に勝た者はない人々鬼と云ふ佐藤登之助尾州の御指南重の衣類打裂羽織武者草鞋を履しめ登お頼申す「下」取次ぎが夫れへ出ると登小藤田先生御在宅であるか拙者は九州の浪人佐藤登之助當御道場拜見がてら小藤田先生のお腕前を拜見願ひたいお取次ぎ下さる「ソ」ラ評判の悪い奴が来た仕方がないと思つて「先生は當時御病氣にございます登病氣とあらば是非に及ばん斯程御繁昌の道場ゆゑお弟子の内に免許以上のお方

もあらう眞影流の極意を拜見致さう「夫れは亂暴ではござらんか登亂暴奇事はかい道場へ立合ひに参て先生御病氣とあれはお弟子の内免許以上の方もあらうからお立合ひを致さうと云ふのだ「暫らくね待下さい……どうしたものだ「先生は風邪を引いて寐て居るが先生が出たつて叶はないのは知れて居る我々が出たつて尙更の事然らば拙者が行つて断はらう……拙者中川又左衛門と申する者師匠は病氣にて立合も有り兼ね又門弟の内にも免許以上の者はなく只今一献差上げる事ゆゑれ歸りを願う登イヤ拙者は馳走を受けに來たのでまいお腕前の御馳走を受たく存じ参つた然らば御病氣全快までお待ち申さう立關のお隅寄りとも拜借致さう中へエ……仕方がまいから御城内へ人を遣つて武士七八人呼びにやつたが拙者は腰が痛い腹が痛いのと云つて誰も來ない萬一負ければ六十三万石天下御門葉の一人其お家の家來が佐藤に打勝つ者があいと云はれれば耻にあらから

鹿をして居ると登所の隙に居た鹿蔵 鹿中村さん一すお蔵を
拜借 中何だ 鹿何誰もお出にならなければ私しが出ませう
中馬鹿を云ふ手前は何日ぞや我々をもに勝つたから慢じて居る
だらうが對手は天下に敵おしと云ふ位のもの者 鹿私が負た所で
耻にはありませんまい怪我位にしても宜うございませう 中夫れな
ちば出る 鹿併し此扮装では對手にしますまいから衣類を拜借
致したい 中宜しいと云ふので鹿蔵袴羽織を付る中川伴蔵夫れ
へ参つて御常家お抱への武士鹿蔵と申する者お對手致すござ
らう 登左様であるか如何にも手合せ致さんと兩人道場へ出で
禪鉢巻きの用意をなし 鹿怪我あつてはなりませんから袋轆竹
に願ひます 登宜しい併し力餘つて頭位お振るかも知れんから
覺悟をしまさい 鹿手前も力があつて腕位お折らぬとも限
りませんから憎く事云ふ奴だと思つて居るエイワヤツと
云つて鹿蔵は青眼に掃へた佐藤登之助は大上段に振殺りッ

ッと詰寄せたが見ると未だ年が若い奴小詰い目に逢してやらう
と心得て居ると尾張家の御家立合ひがあるを聞て我々も
と押掛て来る中に小藤田先生は大した病人でもあいに依て襖の
透より様子を見て居ると登之助如何ある透やあつたりけん真向
微塵と打下ろしたるを鹿蔵体を轉したる其早業電光石火目にも
止らず手にも取られず前におあるかと思へば後ろに現はれ後ろに
在るかと思へば前に在り千變万化秘術を盡して暫らくは戦かつ
たり流石の佐藤登之助鹿蔵の爲めに追捲られ 鹿エイッお面眞
向より打下ろしたに依て 登参つた鹿蔵は禪鉢巻を取て夫れへ
平伏して 鹿恐れ入りました誠ににはや先生お氣の毒様ね怪我
はあさらんか最前念の爲めお断りを申し上げたは茲で 登別段
怪我もござらん天晴のお腹前流石尾張家の御家臣某がしお立合
をしたは面目次第もござらん小藤田先生御病氣御大切にござれ
るやうにとッ

鹿野、天晴る腕前御身あかりせば尾張家の耻辱にもある所
とに忝じけないと鹿蔵に一重の衣類に大小を下され鹿蔵面目を
施こしました是が何日しか評判とあつて尾張義直公のお耳に入
り鹿蔵を召され義此度天下に敵あしと云はれたる佐藤登之助
に打勝たるは天晴あり身の家來と立合ひに及べとの御仰せ早速
御家中にて武藝熟達のを召され試合に及んだが佐藤に勝つ位
の腕前美事打勝ちましたので身の家來に致したいとの仰せ小
藤田先生より鹿蔵に申し入れると大きに驚ろき鹿有難き事に
は候へども望みあつて主取り仕官の義は出来ません此儀は御辭
退申し上る依て彌兵衛より殿へ申し上げる殿に於ては如何なる
仔細なるか申せとの御意仕方があいかから小藤田先生へ主人の敵
を尋ね又民之助の返り討ち一伍十什を申し上げ夫れより殿へ申
し上げるの向々尾張の大主御感心遊ばしア、惜き者なり如何に
も主の仇討つ者とあらば止める由もあく流石は細川家の家來天

晴なりとあつて多くの金子を下し置れました是も小藤田先生の
お蔭なりと鹿蔵涙を流して喜こび是より一旦立歸りましたが厚
く禮を述べて此所を出立に及ぶ小藤田先生敵を討つ者とあれば
止める譯にもありません一同の者も感心をして面々餞別を呉れ
ましたので鹿蔵喜こんで禮を述べ此所を出立で是より東海道を
下るのお物語り

第十二席 不思議の邂逅

扱も鹿蔵は銀路も充分に出来東海道を下らんと信州路へ來り蓬
萊山には十二神の木像あり是は十二支に譬へ其中に白き虎の像
あり是が徳川家康公御降誕にあらんと其虎の木像が何れへ参つた
か行方分らず家康公駿河にて御他界になると此虎の像が何日か
金網の内へ歸つて居りました是に依て家康公は虎の化身ありと
申し傳へます斯程尊とさ御山あれば一見あさんと東海道赤坂の
宿へ参りましたは誰そや彼か人幻ろしの夕間暮れ鳥も鳩に歸る

頭長澤屋と云ふ家へ泊りました早速奥敷へ案内をされ茶菓子
などを夫れへ持て参りましたのを見ると阿波の徳島の旅籠屋
路屋佐平の娘おあるのであるからアツと驚ろいたおなるも鹿藏を
見て驚ろいたが其儘行つて仕舞ひ程経つてから夫れへ参りまし
てある貴所はとらして是へ鹿是はおなるどの如何して是へ参
り下婢とあつて居られるかおなるは只涙に暮れある誠とに面目
次第もございませんが貴所の御主人人民之助様と疾くより夫婦の
約束を致しましたに貴所方は書置をなすつてお立ちになり夫れ
ゆる私しは濟ん事とは思へども父の金三十兩を盗出し二世と契
りし民之助の跡を慕ひ此宿まで参ると金は使ひ果して仕舞ひ
民之助様の行方は分らず是も親の天罰不孝の罪で國へは歸られ
ず身の置所もないに依て身を投げて死うと致したと當家の主人
に引留められ段々意見をされて今は招仕へにあつて居りますすが
民之助様はとらあさいました貴所と御一緒ではないのですか聞

れる程に鹿藏は涙に暮れ親を捨て民之助を連座け今は當家の下
婢になつて居るか不便な事と思ひ隠すに由なく今日までの趣義
路用に盡て乞食の群に入り病氣の爲めに足腰利さるのを三月十
七日尾濃の間木枯堤に於て敵の爲め驕り殺しになつたと委細の
話しを聞てれなるは狂氣の如く聲を放つて泣出しある親までを
捨て良人と思ふ方は返り討ちア、情けあいと涙に暮れるを
鹿歎くは尤も去りあがら今更云ふて返らぬ事私しが親許へ詫
をするから一先づ國へ歸つたら宜からうなるハイ夫れも此家の
御主人が國表へ迎ひに来るやうにと手紙を出して呉れましたら
先方から名主の佐平殿の返事に一人娘が家出をしたので世を味
氣なく思ひ定めし娘は狼か悪者の爲めにでも殺されたらウモウ
此世に亡き者と世帯を仕舞て娘が菩提の爲めと夫婦は廻國に出
て何所へ行つたか行方が分んどの事とございませぬ鹿夫れは何
より重の毒の事と二人の話しをして居るのを何日か女中が置

け、旦那様お可怪ではありませぬか。今夜泊つた若いお武士の所へ
 おあるさんが行って泣いたり笑つたり話しをして居ると云ふのを
 て若しや以前の色の男ではないかと思ひ、最前より此方の蔭に在つ
 て委細の物語りを聞いて其座敷に這入り、主私くしは當家の主人
 でございませぬ。只今おあるから申し上げて居りました。此者の
 雨親は廻國に出て行方知れずとの事併し決して賤しい節もどは
 致させませぬから御安心をあすつて、鹿實は某がしの爲めには
 其民之助と云ふ者は主人である。今までの事委細を物語りをし
 たので主人も大きに驚ろき鹿藏は此者の一命をお助け下され。忝
 とけい此上ともに分頼む主人も、主此親御の居所が分れば
 何日でもお戻し申します。道と云ふので其夜は是に一泊を致して
 翌日茲を出立して是より道を急ぎ蓬萊山の麓へ参ると宿屋と云
 ふ物がございませぬ。段々尋ねると一軒や二軒の宿屋は有るが此
 節盜賊が大分徘徊をするので一人旅は泊めませぬと云はれ、日は

暮れて参るし殆ど當惑をして進見村と云ふ所へ参ります。と大
 きな家が一軒ある。是は戸長を勤める上田茂右衛門と云つて大百
 姓大金持の家。是へ這入つて参り、鹿お頼申す。お出でござい、鹿
 「拙者は武藝修業の者であるが宿屋でも一人旅は泊んと云はれ、誠
 とに當惑を致すが一泊をさして貰ひたい。取次ぎが主人へ告げる
 と主人は唐紙の透から覗いて見ると人品骨柄賤しからず誠とに
 愛嬌あつて美男怪しい者とも思はれんから夫れへ参り、主此節
 は盜賊が激しいので一人旅は泊めませぬので定めし御困りでござ
 さいませう。お見受け申した所立派のお武家サア。せうぞお泊り下
 さい。鹿是は忝じけなうござる。主新家の方へ御案内を申せと
 是から食事を備へ最と町噺に扱かひ呉れ、其夜は臥床に入り盡の
 疲れにグッスリと高屏で眠りに付く。夜半の頃はひガタ／＼何だ
 か騒々しい泥棒が這入りました。と云ふ聲扱は盜賊が悪い所
 へ泊り合した一人旅は泊んと云ふのに頼んで泊めて貰つた然る

に其の夜賊が這入つては我れが手引をしたやうに思はれる一夜厄
介にさつた賊に賊を取押へ呉れんと刀を掲げ來つて見れば夫婦
を始め娘俤扱は下女下男まで残らず縛され割替をはめられて居
る今藏の中から賊が金や荷物物を擔ぎ出すを鹿「エイツと云つて
當身を當てたからウームと云つて倒れる又出て來るのを當てた
から倒れる五人と云ふ者を遂々夫れへ倒して仕舞た賊どうし
た僅かの物を持って轉ぶ奴もさいものだと云つて中から出て來る
一人を「エイツと云つて又身を食したヤア己れと云つて左右か
ら二人が切込んで來るのを心得たりと一刀を引抜き峯打ちにし
て夫れへ二人を叩き倒して終つた鹿藏は主人を始め一同の細を
解いてやると主「どうもお武家様有難うございませぬ鹿藏は
怪我はございませぬか鹿「拙者は怪我はしないが御身達はどうか
だ主「貴所のお蔭で誰一人怪我はせず大金も取られず着物一枚
取られずに済まして有難存じます皆な死んで終ひましたか鹿

「今に生返るが一同を縛つて終ひさい主「畏こまりましたと下
男さども手倦つて殿たり叩たり死人になつて居るから勝手な眞
似をして縛り上げた茂左衛門が今一人の顔を見てヒツクリ驚る
ま主「是は知つて居る人で鹿「ナニ知つて居る主「是は茲
の吉田の城主松平伊豆守が勤番武士平生能くない奴當時主人が
御老中を勤めて居るので巾を利せ女郎屋又は藝妓屋料理屋を
へ行つても勘定と云ふ物は一文も拂はず手前ども毎度無心に
來て初めは遣りましたか私くしも此吉田侯の御用達をして居る
者ですから貴所方がそんな事を云へばお目付けへ届けると云つ
たので夫ツきり來あかつたのですが夫れを意恨にでも思つて金
がありながら貸して呉れさいと云ふので大勢で泥棒に遣入つた
ものに見へます主「併しあがら此儘逃してやつて下さい鹿「イヤ盗賊は
逃せない主「併しあがら御亭主心配はないと面々へ活を入れたから
ございませぬ鹿「イヤ御亭主心配はないと面々へ活を入れたから

息を吹返して見ると八人ながら縛られて居る。鹿其方は武士でありながら盗賊をなすとは何事だ。イヤ、一命を助け玉へ我れ生涯の誤まりである。鹿何と申すも勘弁ならん憎ッくい奴だ。汝等八人の者一命は助け遣すが此儘には許さん。不屈至極の奴だと八人の者を柱へ縛り付け翌日にあつて作男に案内をさせ奉行所へやつて参り奉行三浦五太夫と云ふ者へ鹿藏申し入れるやう昨夜遠見村百姓茂左衛門方へ八人の盗賊忍び入り候ゆる取押へたる所當吉田侯御家來の由切て捨んとは存せしも主人がいろく口を利き助け呉れいどの事只後日の憂ひを恐れ居り候得共御家法に基づき御處分下さるやう五斯る盗賊を召捕り突出し呉れて忝トけさい一人にて八人の者を取押へたるは天晴のお腕前盗賊どもに於ては此方にて處分を致す何ぞ茂左衛門に後藤を懼んや御安心あるべしとあつて八人の者は重叩きの上國拂ひと相成る茂左衛門が心配をするに依つて鹿藏半月ばかり茲に止まつて居

たが何事もあい依つて禮を述べて立出でやうと云ふ時に茂左衛門二百兩の金を出したので鹿藏は是を受けまいと茂貴所が居なけれバ二千兩からの金も持つて行れる所着物一枚取られず殊に怪我をした者もさく其一割にしたで二百兩どうぞお持ち下さい鹿折角の思召し然らば百兩だけ頂しやうと百兩の金に尾州家より貰つた五十兩とを持て是より秋葉へ参詣をして七里の山越しをさし光明山の麓へ来て怪物に出逢うの一條

第十三席 妖怪の本性を見届る

扱も鹿藏は光明山の麓へ來り田代村と云ふのへ参りました宿屋が更にさいゆる一軒の農家へ來り鹿お頼申す……拙者は武者修業の武士であるが宿屋を尋ねた所一軒も見當らん哀れ一夜の宿を頼みたく存する此家の主人庄平は名主を勤める者であつて取次の言葉に様子を見ると別に怪しき者とも思はれんから夫れへ出て参り庄お見受け申す所由緒あるれ方如何にもお宿を致

て 眞の暗何所へ逃げたか妖怪の行方分らず夫れより暫らくの間
 の正しく妖何と察し蚊帳を抜いで然抜討ち切ると形は消へ
 窟と現はれ何云はす其経堂の墨を差して苦顔をして居
 へて横に明る高軒で寐り舞う不思議や夜の丑満頃にあると
 不敵にも彼方此方と糸を張り蚊帳を釣つて居ります大刀を
 垣は破れ八門遁甲の陣を張り酷く荒廢致して居ります
 は腐り壁は落つて小前を現はし屋根は破れて日月星の三光を
 の方へ来て見れば成程八九年は手を入れざるものか疊は朽ち
 で御免を蒙ります鹿ア、宜しいと下部を踏し鹿殿一人本堂
 は禪室に相違なし門の内へ這入ると供の長助が長私くしは是
 點け案内をして古寺へ参りますと不韋酒山門入許としてあるの
 ら下部の長助夏の事であるに依て蚊帳布圍などを存負ひ提灯を
 ……イヤ大事か案内を頼む古寺へ参つて休むであらう夫れか

しませう 鹿忝じけなうござる是より一間へ通し風呂へ入り夕
 飯を侷め主人夫へ出て参り 庄貴所は武者修業をなさいますか
 鹿如何にも武術修業の者 庄夫れからば貴所に一ッお願ひがあ
 ります 鹿何事であるか身に叶つた事なればお聞申さう 庄早
 速の御承知有難う存じます實は此村の後ろに藪と云ふ所がござ
 います尤ども藪が深山あるからで其藪に古寺が一軒あつて五
 山仙手寺と申し元は中々由緒ある寺でございます 八九年以前
 より怪しき事のみあつて幾ら住持が代つても居付かず今一寺
 無住にちつて終つて腐れて居ります 殿さうと云ふにも何か崇り
 でもあらうと云ふので其儘になつて居りますか化務が出るとか
 で誰も見届ける者か貴所を蒙傑と見てお願ひ申します如何
 でございますせう 鹿怪力亂神を語らず正法に不思議あし怪し
 事を見て怪しませう 鹿怪しむ者なし夫れは妖怪の祟りであらう
 から今夜参つて見届けるであらう 庄今晚はお疲れでせうから

鹿野十郎 (十四百)

四邊を見て居たが何一ツ外に怪しい物はあつた。坊主の姿が見へた。ざり是も名劍の徳にて消て仕舞う翌朝になつて鹿只今戻つた。庄どうあさいました。鹿出ました。庄何が出ました。鹿一人の坊主経壇の上に現はれ頼りに盃を指差して居た。鹿どう云ふ譯でございます。鹿化物だに依て物を云はんから分らん一刀を抜て切付ると其儘姿は消て終つたが何か那の寺に凶事でもありはしないか。庄私くしは此家の養子で古い事は存じませんが一ッお爺さんに尋ねませうと隠居をして居る養父を呼出してコレくお始末寺の坊主が崇るやうな事はあいかと云ふと。爺手前は目が悪うございますから碌に御挨拶も致しませんで……鹿そんな事は構はん。爺私くしが悴に代つて話を致します。是は他家から養子に參つたは五六年以前の事ゆゑ一昔しの事は存じません。私くしが未だ名主を勤めて居りました時分に那の寺の住持が照現と云つて禪宗は殊に女を戒めてあるのに門前の百姓小右

鹿野十郎 (一十四百)

衛門と云ふ者の娘は花と不義をしたのを親が聞て出家として人の娘へ手を付る事はあつた。又出家をすれば九族天に生ずると云ふ位で追拂ひ娘は一間へ入れて外出をさせあかつた。を照現和尚から時々娘へ手紙が来る。夫れを慕つて娘が家出をしたのを又探し出して連れ歸つたのを再び和尚が呼出してモウ此世では夫婦にあれん冥府へ行つて夫婦にあらうと淺果敢にも思つて是より半里ばかり登ると霧ヶ淵と云つて底も知れざる深間へ兩人手を取つて入水致し相果ましてから其後寺に怪異がありすすと聞て鹿夫れあらば和尚の亡靈が出るのだが標の下を指差すは何かあるのであらう。明日拙者が立合崇りもあるまいから寺を毀して見ると云ふので翌日竹法螺を吹き一同を呼集め此事を聞してやる。と二三百人の者心得ましてございます。一同寺を毀し初め標の下を掘て見ると一ツの壺があつて中に三百兩の金が這入つて居

様でございませうかと話しをして居る所へ年頃四十五六の男に四
 十恰好の女を連れ廻國の妾で追入つて参り御飯を食べて居るの
 を鹿藏が見ると阿波徳島の宿屋淡路屋佐兵衛夫婦であるからア
 ヲと驚ろき互ひに顔を見合せて 佐貴所は浮田の鹿藏様 鹿然
 れば鹿藏と申して斯様か姿で…… 佐ハイト夫婦は只鹿藏の顔
 を見てボロリと涙を流して居たが實は娘おあるが貴所の御主
 人見之助様を慕ひ三十兩の金を持って夜逃げを致し八方尋ねても
 行方が分らず獨り娘に家出をされ何を樂しみに致しませう定め
 し金にでも困つて入水でもしたか但しは狼にでも食れて死んだ
 かモウ存命しては居るまいと世帯を疊んで夫婦ども食れて死んだ
 吊らうと斯は廻國の妾にあつて居ります若し和娘か生ては居
 らんかと夫れを樂しみに任せて尋ね歩きますと涙がはらに
 物語るを鹿夫れに就て喜こばしき事あり東海道赤坂の長澤屋
 と云ふ宿屋の下婢におあるのはなつて居ります 佐ハイト夫婦

鹿私に諸國武者修業の者で尾州から關東へ下るのだ 金ア、左
 る男夫れへ出て参つて 金旦那様は何方へお出でございます
 ふのは元博奕打であつたのが今は堅氣になり至つて義侠心のあ
 一合燗けて呉れと是から一ばい飲で居ると主人の金右衛門と云
 から夫れへ這入り 鹿許せよ入らつしやいまし 鹿どうか酒を
 過でございませう澤屋と云ふ居酒屋があつたので空腹になつた
 り谷の驛まで乗込んで参り金谷の手前島村へ来た時は彼是八
 鹿藏に八日ばかり逗留を致し夫れより暇を告げて東海道を参
 位ゐの金を恵みました夫れからは何事もなくなつて終ひました
 ひ石碑を建て施餓鬼をしてやり貧苦の百姓に頭割にするど十兩
 の貧民に施こして遣るが宜いと云ふので彼の和尚が菩提を吊ら
 てやつたら宜からう金が残つたら其金に恨みがあるのだから村
 相違ない此金でと吊らひをして一ツの石碑を建て施餓鬼をし
 鹿切は那の和尚氣に心残りがあつたに

佐野鹿十郎 (百四十五)

て下さい 佐郎も恐れ入りました 鹿蔵は五兩の金を取出し紙
に包んで一鹿是は私が志ざし路金の足しにお納め下さい 佐
エ折角の思召しあれども路用は充分にございます 貴所は是から
國々をお歩きなさるお身 鹿イヤ某がしの志ざしどうぞお納め
さい 佐左様なれば有難う存じますと涙に暮れて禮を述べ飛
ぶが如くに出て参ります 亭主の金右衛門手を拍って 金流石は
お武家恐れ入りました 鹿斯様お事は他言は御無用 金何で他
言を致しませうと話しをして居る所へ三人の武士深編笠に大小
を差し此家の内を覗いて見ると鹿蔵が居たので一人の武士顔色
變へて跡へ引返し二人の武士と何か話しをして行つたは是ぞ大
違七郎右衛門あり鹿蔵は話しに身が入り気が注かず 鹿大きに
厄介にあつた又参るぞと立出やうとする所へ川越し人足一人駈
來り 人武家様川をお越しにゐるのなら早くお出でを願ひま
す 今少し後れますと去るお大名が通ると川が止ります 鹿左様

佐野鹿十郎 (百四十四)

では娘は違者で 鹿如何にも拙者泊り合しおあるとの、後語り
主人を慕うて親を捨て家出をさせしも赤坂宿にて金に盡き親の
罰と歸らめ入水致さうと云ふのを長澤屋の主人に助けられ今は
同家の娘同様早速國表へ娘を引取るやうに知らせてやればお二
人は廻國に出て行方分らず夫れゆゑ民之助様は仔細あつて美濃と尾張の
澤屋の主人の話し夫れゆゑ民之助様は仔細あつて美濃と尾張の
國境木枯堤で敵の爲めに殺されたと物語りを致した 佐エッ夫
れでは民之助様は敵の爲めに…… 夫れはマアお氣の毒何ども申
さうやうもございませぬ 鹿今更云ふて返らぬ事就ては早々赤
坂宿へ参り娘を引取り参さい 佐有難う存じます娘の心得違ひは此鹿
れますれば國表へ連れ返ります 鹿どうぞ娘の心得違ひは此鹿
藏かられ詫を致す 佐何のお詫に及びませう 鹿民之助殿は細
川家御指南番五百石取浮田傳五右衛門の悴假令如何ある事おあ
らうども耻ではあいでうか若氣の靛ちであるから御辨してやつ

か夫れあらばと云つて澤屋を立出で川邊へ参る此大井川の規則
は肩車を以て越し一人越しで早いのが九十五文二番が七十五文
連臺は三百文と云ふのでございませう大井川は甲州信州の堺より
流れて大井川へ流れ水のさい時には些ともさくさく在る時には
中々の急流尤も東海道難所の一ツでございませう昔しは大瀬川
と書て大井川と讀せる去る歌に
思ひ出る都の事は大井川
沖瀬の石のかすも思はず
石を流す位みだに依て越すにも難かしい鹿藏は鹿連臺越しで
やつて呉れると云ふので人足ども今鹿藏を川中へ擔ぎ出す此方
はお話し別れて澤屋の亭主女房に向つて金今廻國の人に金を
五兩遣るとは年は若いのが感心さ武士だと云つて居る所へサア大
變だ〜大井川で命ちの道取り若し武士が大勢を對手に働ら
て居ると云ふのを聞て金右衛門 金若しや先刻のお武家に川越

しどもが無禮をしたので若いから立腹をして刀を抜いたのでは
ないかと突然一刀を腰に打込み川邊を差して逸散走り此方は鹿
藏連臺の上にて振返つて川邊を見れば浪人体の武士三人川邊に
突立ち其内の一人は大達七郎右衛門被り笠を脱捨て苦り切て居
るアツと驚ろき扱は彼奴彼所に居るか夫れども知らず早く川を
越さんとおしたるは誤りありと心苛ち鹿コレ川越ども頼みが
ある人へエ鹿澤屋へ忘れ物をしたに依て酒代はやるから連
臺を返して呉れ宜うございませう穴熊酒代はやるから連
しやるのだぢやア返さう段々深間へ行くので鹿藏は心苛ち大達
の計略とは知らず鹿早く返せ夫でも石に足を取られませうと連
臺を轉覆します段々深間へ來ると人ソレツと云ふが否や連臺
をボカリ深間へ轉覆し人足どもは扱手を切てソア岸に泳ぎ
付く鹿藏はアツと驚ろき澤山の水は呑んだが固より水練は古今
の達人扱は悪人の計略に驚ろしかと岸へ泳ぎ付んどなせば岸に

ては兼て待設けたる事あれば數多の川越達水面へボン／＼石を
投げるが古今の上手平生退屈の時などには石礮を投げ争ひをし
て居るから充分馴れて居る七郎右衛門が差圖をさす様子を鹿藏見
て取り鹿己れ憎く奴と一生懸命泳ぎ付かんとさせせ身体
自由あらず礮は雨の如く覆の如く右に轉し左りに轉し又は水に
潜り容易にして岸には達せず早くも帯を解き下帯一ツとあつて
志津三郎の太刀だけは下帯に確かと狭み川下の水を潜り西の岸
より上るのを一同は水面のみに心を注げて少しも知らず其間に
遣上つたる鹿藏志津三郎が一刀の鞘を拂ひ鹿己れ何の意恨も
つて我れを水中に投じたるぞ覺悟をしると切捲るを人ヤア
陸へ上つた打殺せと獲物／＼を持って打て掛るを忽ちちの間に七
八人の人足どもを切倒したり七郎右衛門此様子を見て遣は叶は
しと仲間を捨て逸散に逃げ行くを鹿己れ七郎右衛門待てと追
掛け来る所へ二人の武士道を遮ぎり兩人均しく切つて掛るを

鹿己れツ邪魔あすきと涉り合ひ鹿藏二人の武士は物の數とは思
はぬと雨霞の如き石礮に大に恐れをかし己に危うく見へたる所
へ金右衛門一刀を提げて駆来り金ヤイ川越ども此れ武士に何
でこんな無慮をしたのだサア金右衛門の云ふ事を聞ねへど片ッ
端から叩ッ切るぞ流石土地で巾利きの金右衛門が言葉に一同は
手を引いて仕舞うと兩人の武士金右衛門が鹿藏に助太刀するを見
て刀を提げドン／＼逃げ出す鹿己れツ逃しはせんと心は矢竹
に逸れども最前よりの働らきに氣が遠くあつて夫れへドタリ打
倒れた金右衛門は側へ来て金確かりあさい旦那様……ソレ水
を持って来いと水を取寄せ用意の薬を服してさ／＼に介抱をし
たから潮々息を吹返し鹿御亭主能い所へ来て呉れて忝じけさ
い又刀を提げて退駈けて行くとするから是を抱止めて金マア
お待ちなさい其身体で行けば又打倒れる無念と思召すは尤ども
だが對手は逃げちまつた夫より貴所の身体を治し夫れから時節

をお待ちささい漸々に引止めて置て金ヤイ手前達飛でもぬへ
事をしやがる手前達の方は餘ッ程怪我があるか人七人即死
で十七八人怪我をしました金何で此武士に疵を付けた人私
達は知らぬへが地蔵の虎が受込み仕事で初め武士が三人来て今
茲へ二十五六にある武士が来るが夫れは悪い奴であるから連盗
を返して殺せと云つて那の木の下で小判を五枚渡し夫れから私
し達にも二貫宛呉れさせた旨く殺して仕舞へば跡の褒美が貰へ
ると云ふのでやつた仕事でございます金途方もぬへ奴だ金に
目が暮て無慈悲な事をしやがる手前達には跡を罰があるからさ
う思へ是から鹿藏を人足せもに手傳して漸々家へ連れて来たが
暫らくは口も利かせませんでしたの金を右衛門が厚き世話にて醫
者を招ぎ介抱をして呉れたので口も利るやうにあり實はコレコ
レで敵大達の爲めに斯様な目に逢つたと物語をしたので金右衛
門も驚るさ是より御代官支配であるに依て此次第をお代官石子

内匠殿へ届け出でる川越人足連臺を覆したるは容易ならん事さ
りとあつて死人は法の通りに扱かひ尙一同の者は川越し人足を
罷められました鹿藏は固より咎めもございませぬ扱主人の親切
に依て今は鹿藏病氣全快を致し三月の中浣に至つて厚く禮を述
べ是より仲仙道を尋ねんものを心注たるから茲を立出で仲仙道
へ参ります計らずも茲に山賊を退治に及ぶの一條
● 第十四席 盜賊退治 ●
茲に鹿藏は敵は正しく北海道へ行く氣支へあし仲仙道へ掛りし
ならん信州路より甲州路を尋ねやうと信濃國と甲州へ跨がれる
所まで来る扱茲に奥州會津若松の物持ち町人苗字帶刀御免の松
浦金右衛門と云ふ家の人此度信州の親類に目出度事あつて
案内を連れて尋ね来り且つ戸隠或は田毎と諸方の名所舊蹟を見
やうと夫婦に娘番頭下男小僧夫れに出入りの田舎角力の滑見山
勇吉朝日山權吉と云ふ者を供に連れ以上十三人此十文字峠の山

道へ來り一軒の更科蕎麥屋があつたから夫れへ道入つて誂物さ
どをしてから此峠を越して向うに宿屋がありませうかと云つて
聞た所亭夫れはございますが此山には山賊が出ますと云ひま
すから今夜は手前でお宿を致しますから泊りにあつて明日早
くお立ちにあつたら宜うございませう途中で日が暮れますと往
けませんから金右衛門二人の角力に相談をすると宿屋はそん
事を云つて早く泊たがるので假令山賊が出たにした所で十三
人連れ殊には清見山朝日山が付て居ます御心配には及びません
云はれて見ると金右衛門も其氣になつて金御亭主未だ日も高
い折角の事だが是から出立をしませう宿屋の主人も無理に泊れ
と云へば宿錢を食はると思はれるから亭左様でございませうか
と云つて金右衛門の一行は出て行く入替つて這入て來た鹿藏蕎
麥を食べて勘定を拂ひますと亭是から十文字峠をお越しにあ
りますか今可哀さうな事がありますと金右衛門が止めるも聞ず

角力の言葉に屈まされて出て行つた話しをして定めし山賊にで
も出逢ひはしないかと思つて居りますと云ふのを聞いて鹿藏捨置
れ赤い鹿夫れは氣の毒千萬女小供を連れて行つたどわらば大
儀であらう悪い賊などが居るからば助けてやらうと鹿藏は急い
で茲を立出でドーンと追断る扱此方は山の半腹まで來ると山刀
を提げたる者二十人ばかり現はれ出で十三人をグルツと取
巻きヤイ此山中に名代の山賊金や着物を身ぐるみ脱いで置て行
け女は此方の種に仕ひ女郎に賣るからさう思へ一金ソレ關取出
たがどうしやう清何を云やがる此奴等は此旦那方は奥州の會
津でな身分のある方だ途法もねへ事を云ふと片ツ端から搦殺す
う命が借くば消へて失せる何をと云さま一刀を抜て切付るを心
得たりと傍への松を根こぎにして兩人涉り合つたが何しろ山賊
どもは劍術が充分出來る兩人の角力は只力があるだけだから忍
まら夫れへツタに切り殺されたサア是からお頭所へ引張

て行き處置を付けて貰はうと十一人の者を取巻き山樂へ來りお
頭宜い儲け物がありましたせ 頭どうした可哀想だとは思つた
が角力が二人手向ひをしたから切殺しましたたが女五人居ます
頭「ア、さうか……其十七八の新造は俺が臥床の伽にさせるから
サア此方へ來いと手を取て引立てやうとするに 娘「アレ、どう
かお助け下さいと悲鳴を揚げるのをサア「愚圖く云ふ今
夜は頭に抱れて寐て跡で此方が念佛講サア立て「娘は益々悲鳴
を揚げる所へ鹿藏嘸來れば角力二人はズク「に切殺されて居
る扱は彼が云つた通りツム不便な事を致したり悪者どもは何
れへ行きしかと思ふ彼方に女の悲鳴聲を便りに來つて見れば頭
ども覺しき者十七八の女の手を取て引寄せんとあす所飛込み來
つてテットウを打つたから其手を放す 頭「ヤア、已れツと云ふ
奴の顔を見れば是ぞ大坂にて敵大達を逃したる榎木なれば 鹿
「汝は稻葉家の家來榎木三左衛門だぞ 三「ア、浮田の鹿藏か 鹿

「不思議な所で出逢た汝も生け置難い奴覺悟をしると志津三郎の
一刀を引抜き切て掛れば 三「心得たりと三左衛門山刀を抜合し
て戦かつたが何せう鹿藏に敵すべき二太刀三太刀合せる内鹿藏
が切込んだる一刀は三左衛門が真向より懸まで切下げられアッ
と云つて血煙り立ちドウと倒れるのを子分の者ども「ヤア、頭
が殺れたモウ叶はぬ逃げると案内知つたる谷或ひは峯と猿猴の
梢を傳ふやうにドン「逃げる跡に鹿藏は一刀を鞘に納め 鹿
「御一統御怪我はござらんか有難う存じます主人は夫れへ手を仕
て金「私くしは會津若松の松浦金右衛門と申します者此度親戚
に用事あつて信州路へ参り戸隠或は又更科田毎なと見物致し
て歸りし甲州身延山へ参詣致し十文字峠の麓へ参ると蕎麥屋
の主人が親切に止めて呉れましたのを無理に参つた爲め角力は
殺され娘は肌身を汚さうと致したをお助け下され御恩の程は生
々世々忘却は仕まつりません誠とに有難う存じました 鹿「何の

お禮に及ばうや怪我さへさくば何よりの事はから甲州へお出で
おさるか金左様にございます甲州へ参りますと云ふので鹿藏
甲州へ参るものであるから又途中山賊の子分ども待構へて居
らんも知れずお供を致さうと云ふから大いに喜び扱角力の死
骸は山寮へ持来つて焚木を集め山寮へ火を掛けて是を焼き傍へ
の所へ埋めてやりました是より山を下り甲州の身延へ参詣を致
し勝沼の宇治屋と云ふ旅籠屋へ泊りをした茲で鹿藏も武者修業
の者であるからと別を告げる金右衛門は金どうや會津へお立
寄を願う万分の一のれを返すと云ひ又娘も手を仕へ娘あは
や身を汚さうと云ふ所をお助け下され有難う存じますと厚く禮
を述べます鹿藏は是より黒沼黒ぬたと彼方此方尋ねたが敵は
見當らず夫れならばと道を代へて奥州路へ参らうと其道は劍術
の達人へ立寄り食客などをして會津へ乗込むの一條

第十五席 常陸入り

松浦主従に別れて鹿藏は一人と参り常陸國藤代と云ふ所へ参り
しに道を間違ひて裏道へ出で百姓屋ばかり傍へを見ると荒れ屋
が一軒あり荒物草鞋などがブラ下つて居ります鹿御免よ入ら
つしやいまし鹿藏に宿屋はさいかな茲に宿屋はありませんが
旅籠さへお出しにされば手前へお泊り申します鹿夫れは何よ
りさうか泊めて呉れ是は荒物屋三右衛門と云つて老夫婦さう夫
より夕飯を備ゆられ奥の隔れへ案内をされ茲へ休みましたたが疲
れが出たので翌朝は絞殺されて居ります目覺し後此方へ來れば遣は
開も如何に老夫婦は絞殺されて居ります目覺し後此方へ來れば遣は
致したものであらうと途方に暮れ愁と逃げれば殺して逃げたと
疑がはれる飛でもさい所へ厄介になつたと思つても仕方がない
隣り傳へる家へ行つて斯様く話しをすると思つても飛だ事が出来
したと直ぐに名主へ人を馳せ名主も夫れへ参り鹿藏を取巻いて
名且那様貴所がこんち所へお泊りにあつたのが不運貴所が殺し

たとは思ひませんけれども茲は代官持ちですから貴所を代官所へ連れて参ります 鹿何所へでも参らうと同道致して代官所へ出でました代官杉本甚太夫段々鹿藏を調べると鹿全たく知らん 甚武士たる者が知らんでは濟まい 鹿源と云つても武士おれば劍がおりますから切殺します武士が絞殺しは致さん御賢察を願う 甚尤ももの事だ併し一旦疑がひの掛つたもの入牢致して留置と情けあひかな鹿藏は入牢になりました代官は手先に吩咐て他に殺した者があると思ふから充分に尋ねさせると茲の宿に越栗の勘太と云ふ者あつて三右衛門は子があいに依て平生の儉約をして人に金を貸し高利を食はつて居ります或時勘太山屋と云ふ料理屋で酌女を二人呼び藝妓を揚げてドンチャンく騒いで居るのを村の源次と云ふ博奕打が見て 源手前大層な景氣だなどうした 勘ナァーに那の庄作の賭場で勝つたのよ 源「さうかと云ふのを隣り座敷で酒を飲ながら聞いて居たのは手先の

者直ぐに茲を立出で庄作の賭場へ来て 庄作 庄へエ何か御用ですか 越栗の勘太と云ふ者は手前の賭場へ来るか 庄那の野郎は常節寄付けません錢がないので何日でも足ばかり出して居ます今度来たら向臈を搔拂つてやらうと思つて居るので ●手前の賭場へ参らんが何日から来かい 庄モウ三四月参りません ●さうか手先きは悉皆聞て山屋へ取返し ○勘太御用だ 勘ナニ私チは悪い事なんぞはしねへ ○あいは云はさん荒物屋三右衛門夫婦を殺したは其方であらう 勘元談云つちやア往けねへろん事は知らねへ ○手前は庄作の賭場で持て来たと云つたか 勘さうです庄作の賭場で勝たので ○巫山戯た事を云ふか儘かに三右衛門夫婦を絞殺したと庄作の賭場へ寄付んと云ふ事が悉皆探索にあつて居るサア来いと代官所へ引て参り ○サア申し上げると段々調べたが 勘知りません覺えがないと云ふので右左りから箆尻を持って打据へたから流石悪人の勘

太も地り兼ね 勘申し上げますがどうぞを一ばい ○白状し
てから吞せるサア白状しる 勘口が利かせせんから水を先きへ
……全たくは三右衛門に借があり毎日のやうに催促をされても
金はない返さなければ代官所へ願つて出ると云ふので餘り非道
な高利を取りますので小癪に障り朝晩行つて勝手を知つて居り
ますから忍び込んで四日跡突然殺して有金三十兩を盗んだに
相違ございませぬ代官是を聞て 代左様か不屈きの者である入
半申し付る茲に於て鹿藏を呼出し 代探偵も行届いて三右衛
門夫婦を殺したる本人も出でたれば罪出獄を許すと云ふので
出半致され勘太は罪も極つて死刑に行かれました鹿藏は是よ
り藤代へ参つて宿を取つた所今まで山越しをしたり大井川へ投
込れたり諸所で無理をして夫れが爲め身体を痛めて居るから俄
かに病氣が發して今は立つ事も出来なく宿屋の主人に頼ん
で醫者を招き手當てをして貰つても路用の金は盡て宿錢に差支

へどうしたものであらうかと思案に暮れて居ります宜い點に
此節では少しは身体も快い方に向つて参りました所へ主人が來
たので 鹿藏に御亭主會津の若松に會津侯のお出入り町人松浦
金右衛門と云ふ人に少しばかり恩を被せてあるが何も其無心を
云ふてやるのも面目ないが併し今は貯はへもかく奈何ともする
事が出来まい就ては其方へ手紙を持してやりたいと思ふがどう
であらうか 亭夫れは宜しうございませぬと云ふので鹿藏が今ま
で困難に逢ひ病氣の事も精しく認ためて茲の家の若衆儀兵衛と
云ふ者に持して松浦金右衛門方へ遣はしました是を見たる金右
衛門大いに驚ろき 金うんから早く知らして呉れば宜いに何し
る病氣だと云ふのなら此方へ御引取り申せ命ちの親の御恩人捨
ては置れんど下男の百助と云ふ者持つて正直であるから是を呼
びまして 金コレ百助金を二十兩程持て行き萬事の拂ひあを
濟せ此方へお引取り申して來い貴様も知つて居るだらう十文字

昨命を助け下すつたお武家さんだ能く御本人にお目に掛り早く知らせ下さればこんな御困りにあるやうには致しませんものごと能く申してな直ぐに行つて来い百宜しうございませ心得ましたと金を持って籠を釣せ常陸藤代常陸屋と云ふ宿屋へ参り鹿蔵にも對面をして百旦那様さう云ふ事なら早く知らして下されば直ぐに迎ひに参りましたのに何しろ直ぐに手前をもへお出でを願ひますとは常陸の勘定又は醫者の薬禮をを残りす濟せます常陸屋の主人も喜こんで主は大目になさいましと莞爾是から致して鹿蔵は大きに快方に向つて居りますから籠へ乗せ會津若松へ連れて参り近所の名醫を招いで種々療養を加へて呉れ又家内を始め娘も何くれとあく親切に介抱致して呉れ固より快くなつた所へ又金右衛門夫婦一家の者が其醫にも掛けて呉れましたので段々腰も立つやうになり己に病氣全快と相成りました鹿蔵は敵を持つ身の上にて何日までも逗留

致して居る評にありませぬから一日も早く出立を致さうと云ふのを一日く引止められて居ります内計らずも鹿蔵大功を立つて夫れより敵の在所を知り遂に民十郎と共に仇討本懐を遂げざるのれ物語り

第十六席 お猪狩り

茲に鹿蔵は松浦金右衛門方に療養を受け日増し快氣に向ひ今は身体壯健に相成りたれば出立致さんと云ふを何くれと足を止められ途人情に引かれて此家に泊つて居りました所茲に會津若松の城主二十三萬石松平肥後守正行侯より金右衛門方へ此正月廿四日殿様天上山へお猪狩りをならせられるに就て其方供致すやうにどの御沙汰之あり殊に苗字帯刀御免あれば馬乗を許されどの事は承たまはつたる金右衛門冥加の事と大いに喜こび鹿蔵にも此物語りを致しますと鹿夫れは何よりの事あり我れも左様の儀を好むがお供を願ひたいもので如何でござらうか

け君を警衛奉まつる折しも不思議や火の玉の如き霹靂一聲諸
どもにドシンと大主が御馬前に立ちたり大主は未だ御若年
ればアノと驚ろき給ひ思はずも落馬をあすつて殿は氣絶を遊ば
したソノ一大事ありとあつて御家來方大勢殿を御擔ぎ申し上げ
遙か隔れたる辻堂の内へ御入れ申しアレコレと御介抱申し上げ
まする松浦金右衛門に於ても上の御身の支はしく馬を返し
て御馬前へ馳付んとあしたる所カラくくツと云ふ物音諸ども
光り物が夫れへ落た金右衛門が馬是に驚ろき棹立ちになつたか
らドシリ落馬をして馬は前足を折りましたか漸々にして金右衛
門は徒足立ちとあつて走り行く跡より鹿藏も殿は如何なされし
やと心からずも金右衛門の跡を追て参りまする然る所這は開も
如何に又々光物諸どもに鹿藏の前に現はれたる獸の暗夜の如く
れば儘かに夫れと分らねど一文もあらんかと思ふ獸にて尾は四
つに裂け牙を露出し爪を立つて鹿藏目掛けて飛掛るを心得たりと

金夫れあらば御一緒に御同道を致しませうと云ふので愈よ二十
四日の晴天を祈つて居りましたる所其日は好天氣あれば是に依
て會津の城を隔れる事三里にして天上山あり此山は登りが三里
八丁下りが二里二十六丁にて是に續て光明山或は又三上山もあ
り、赤れども今日には天上山を狩立てるの御用意にて鹿藏五ツ時
に御出馬に相成り家來を始め足輕仲間瀬子と皆御供を申し上げ
天上山へ参り彼方此方を狩立て其日一日は多くの獲物も是あり
ましたので殿も御機嫌宜しく御引揚げに相成りまする扱其翌日
は跡の光明山三上山の二山を狩立んと翌二十五日の早朝より退
々此山に來つて狩立てまする折しも一天俄かに猛り雨は車軸
を流すが如く大風吹起つて山岳動搖おし斯程の山も崩れんかと
怪しむばかり木の枝を折り幹を倒し木の葉は飛で雨霰に異なら
ず稻妻は目に焼金を差すかと怪しむばかり今は大雨大雷と相成
り御家來方に於ても殿の御身の上心許なしと退々御馬前に馳付

体^たを^を轉^まし志津三郎の一刀を抜放つて切て掛る何しろ武藝熟練の
鹿^か藏^{ざう}忽^{たち}ちにして面上へ切付けられキヤツと云つて倒れたり此
時^{とき}鹿^か藏^{ざう}兼^{かね}て用意^{ようい}したる弓^{ゆみ}に矢^や番^{ばん}へ健^{けん}たかに獸^けが咽^{のど}を^を目^め掛^かて
射^や掛^かけたるが又々恨^{うら}めしさに眼^{まなこ}を怒^{おこ}らし牙^はを鳴^なして飛^と掛^かるを
彼^か方^{かた}此^こ方^{かた}と身^みを轉^まし遂^{つい}に志津三郎兼^{かね}氏^しの名^な劍^{けん}の功^{こう}力^{りき}にや三^{さん}太^た刀^{たう}
目^めに^にして^{して}彼^かの^の獸^けを^を仕^し留^{りう}め^めたるが不^ふ思^し議^ぎあるかあ今^{いま}まで大^{だい}雨^う大^{だい}雷^{らい}
にて^{にて}暗^{くら}夜の^の如^{ごと}く山^{やま}岳^{たけ}鳴^な動^{どう}なせしが暫^{しばらく}らくあつて血^ちは收^あまり天^{てん}暗^{くら}
れて^{れて}元^{もと}の^の好^{こう}天^{てん}氣^きと相^あ成^{なり}り^りも^もの^のか^か其^{その}所^{ところ}へ打^{うち}倒^{たお}れて氣^き絶^たを^を刺^さ留^{りう}め^めたる
の^ので^で氣^きの^の弛^{ゆる}み^みが^が出^いで^でたるも^もの^のか^か其^{その}所^{ところ}へ打^{うち}倒^{たお}れて氣^き絶^たを^を刺^さ留^{りう}め^めたる
た^た今^{いま}鹿^か藏^{ざう}が刺^さ留^{りう}め^めたる獸^けは如何^{いか}かある物^{もの}ぞと云^いふに頭^{あたま}は猿^{さる}の如^{ごと}く
身^みが^が今^{いま}鹿^か藏^{ざう}に似^にて^て只^{ただ}尾^びが^が四^よツに裂^ひけて居^ゐり是^{こゝろ}ぞ猿^{さる}の功^{こう}勞^{らう}を^を經^へたる
數^{かず}千^{せん}年^{ねん}を^を經^へたる物^{もの}にて是^{こゝろ}を^を狎^なと云^いふ恐^{おそ}ろしき獸^けの功^{こう}勞^{らう}を^を經^へたる
る^る所^{ところ}此^{こゝろ}方^{かた}の^の岩^{いわ}際^{ざい}此^{こゝろ}方^{かた}の^の木^きの^の蔭^{かげ}と云^いふ恐^{おそ}ろしき獸^けの功^{こう}勞^{らう}を^を經^へたる
ひ^ひ集^あまり^り居^ゐて^て 甲^か同^{どう}役^{やく}今^{いま}日^ひは^は昨^{きのう}日^ひに^に引^ひ替^かへ^へ正^{せい}月^{げつ}二^に十^{じゅう}五^ご日^{にち}だ^だと^と云^いふ

ふに雷^{かみ}が鳴^なるとは事^{こと}だ 乙^{おつ}さうさ^さに恐^{おそ}ろしかつたか 丙^ひ宜^{よろ}
い^い鹽^{しほ}梅^{ばい}に^に風^{かぜ}も^も止^とんだ雨^{あめ}も^も切^きれたが殿^{だん}様^{やう}は^はど^どう^う遊^{あそ}ばしたかソ^そロ^ろ
出^い駈^かけ^けや^やう^うと^と木^きの^の根^ね岩^{いわ}角^{かく}を^を攀^たち^ち猿^{さる}の^の如^{ごと}く向^{むか}う^うの^の谷^やへ^へ飛^と越^こへ^へ参^まり
ま^ます^する^るど^ど一^{いつ}人^{ひと}の^の者^{もの}が^が倒^{たお}れて^て居^ゐる^る傍^{かたはら}ら^らに^には^は大^{だい}き^きき^き猿^{さる}が^が殺^{ころ}されて^て居^ゐる
る^るか^から^ら 甲^かヤ^やア^あ一^{いつ}大^{だい}變^{へん}だ^だ遂^{つい}に^に見^み馴^なない^い人^{ひと}だ^だあ^あ……^{……}氣^き絶^たを^をして^{して}居^ゐる
る^るや^やう^うだ^だ見^みに^に角^{かく}介^け抱^{かか}を^をし^しや^やう^うと^と云^いふ^ふので^{ので}是^{こゝろ}から^{から}谷^や間^まの^の水^{みづ}を^を吸^あ来^き
り^りい^いろ^ろ手^て當^{あた}て^てを^をした^{した}の^ので^{ので}息^{いき}を^を吹^ふ返^{かへ}し^しま^ました^{した} 鹿^か各^{かく}々^々方^{かた}々^々姿^{すがた}
け^けな^なう^うと^とさ^さる^る 甲^かシ^しテ^て身^みは^は何^{なに}者^{もの}だ^だ狩^か装^ま束^{さく}も^も若^{わか}け^け居^ゐら^らず^ず只^{ただ}の^の姿^{すがた}
如^{ごと}く^{ごと}な^なさ^された^た 鹿^か捕^とら^らは^はれ^れ出^い入^いり^り町^{ちやう}人^{ひと}松^{しょう}浦^{うら}金^{かね}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}方^{かた}の^の食^{しょく}客^{かく}佐^さ
野^の鹿^か藏^{ざう}と^と申^{まを}す^する^る者^{もの}今^{いま}日^ひ御^ご供^{こう}の^の内^{うち}に^に加^{くわ}は^はり^りお^お猪^ぶ狩^{かり}り^りを^を拜^を見^みに^に参^まり
し^し所^{ところ}斯^{ごと}く^{ごと}猛^{まう}獸^{じゆ}あ^あつ^つて^て砂^{すな}石^{いし}を^を飛^とし^し山^{やま}岳^{たけ}を^を鳴^な動^{どう}させ^せ已^いに^に殿^{だん}様^{やう}へ^へも^も寄^よ
を^を加^{くわ}へ^へん^んと^とな^なした^{した}る^る所^{ところ}漸^{しぜん}々^々に^にして^{して}お^お上^{のぼ}り^りお^お通^{とほ}れ^れ遊^{あそ}ば^ばし^し此^{こゝろ}度^{たび}は^は某^{たれ}
が^がし^しに^に飛^と掛^かつ^つて^て來^きり^りし^しゆ^ゆる^る斯^{ごと}く^{ごと}は^は刺^さ留^{りう}ま^ました^{した}が^が身^み体^{てい}疲^{つか}れて^て前^{まへ}後^ごも
知^しら^らず^ず打^{うち}倒^{たお}れて^て居^ゐつ^つた^た所^{ところ}御^ご介^け抱^{かか}に^に預^{あづ}かり^り千^{せん}萬^{まん}忝^{かたじけ}な^{ない} 乙^{おつ}然^{ぜん}

らば尊公が是を退治られたか……何と云ふ獸だらうか 鹿は
猿が數千年経つた功勞を經たる狎と云ふ物である 乙斯る猿
を只一人にて刺留められたる御腕前の程感服仕まつる何は兎も
われ殿へ御覽に入れやうと云ふので擔いで行くど云つた所で中
々擔いで行れるものであいかから木の枝を下ろし藤蓐を以て四足
を縛り付け五人や十人では擔げあおから二三十人の足輕浪子が
是を擔いで鹿藏を先きに立て参ります所へ松浦金右衛門鹿藏
の行方が分らんので引返して來る所へ鹿藏は血みどり血がひに
あつて参るのを見て 金どうあすつた 鹿實は云々斯様くど
獸を見せたので大ひに驚ろき是より金右衛門から御家來山川四
郎太夫と云ふ人へ申し上げると四郎太夫殿も大ひにお驚ろきに
なつて早速鹿藏の御前へ罷り出でたる所殿に於ても一旦は氣絶を
遊ばした家臣の面々御介抱を申し上げたので正氣にお返り遊
ばし辻堂の松の所にお立出であつて様子を御覽遊ばして在ら

つしやるから四郎太夫より今日出入り町人松浦金右衛門方食客
佐野鹿藏と申する者君に害を加へんとしたる怪物を斯々の次
第にて刺留めましてござひますと申し上げたる所殿是へ見せ
いと仰せられたので早速御前へ擔ぎ出すと殿大ひにお驚ろき
に相成り能く御覽にあらんと顔も身体も猿の如く只尾が四ッ
に裂けて居る何千年経つたか分らん程の獸扱は斯る猛獸を退治
あしたるか大驚ろき其鹿藏と申する者追て目通り許すどの仰せ
あつて其儘其日は御城内へお引取りに相成りまする金右衛門は
鹿藏と共に家に立歸り家内の者へも今日鹿藏が手柄を現はした
る物語りを致して居りました其後に至つて山川四郎太夫殿より
松浦金右衛門方へ申し入れるやう殿に於ては鹿藏を見たひとの
仰せ早速同道を致すやうにどの事金右衛門涙を流して喜こび鹿
藏に衣類を貸し悉皆身掛裝を立派にして御前へ罷り出でるお
様殿へ召される肥後守殿上座に在らせられ 殿其方は鹿藏ある

かど直きにお言葉を下さる 鹿ハ、殿苦しうない面を揚げい
御覽に相成ると人品骨柄賤からず立派な武士 殿其方は何才ぢ
や 鹿二十六才にございます 殿ウム汝が働らき天晴なり能く
も斯ばかりの猛獸を刺留たり汝身の家來となつて犬馬の勞を盡
し呉れよ望みの食祿を遣はすであらう 鹿有難く御禮は申し上
げ候へども某がし身に大望あり假令何百石下し置れるとも御奉
公の義は御免を願ひ奉まつる 殿ナニ身に大望あると申すか委
細を述べよ 鹿ハ、去りながら他聞を懼かり候事にて斯く多く
の御家來御列座にては申し上げ兼ますれば山川四郎太夫様まで
言上致すべく 殿左様か是に依て山川四郎太夫鹿殿を一問に招
ぎ四方の唐紙を開拂ひ誰も聞て居る者のないやうにして 四抽
者も武士他言は致さんお話しなさい 鹿某がし義は肥後國熊本
細川越中守御指南後浮田傳五右衛門と云ふ者大達七郎右衛門の
爲めに討れたる次第から民の助が返り討ちにあつたる一伍十什

を申し上げ夫れに依て我が命を助け呉れたる恩人の敵を討つ身
の上されば御奉公の儀は御免を願うと申し進たるので四郎太夫
殿大ひに御感心遊ばし是より殿へ申し上げました所正行侯益々
御感心遊ばし天晴忠臣の武士かな盃を取らせいとあつてお盃を
賜はり此度の御褒美として白銀十五枚下し置れ面目を施とし松
浦金右衛門の宅へ引取ります殿に於ても益々御感心あつて流
石は越中守能き家來を持つたりと大層是を惜まれました然るに
金右衛門の娘にかしげと云ふ者がございまして年は二八の花盛
り色白くして眼涼しく愛嬌溢るゝばかり鹿藏が十文字峠に山賊
を退け危うきを助け呉れたる其時より天晴腕前に感じ居りまし
た所此度病ひの爲め我が家に來りましたので尙更想ひを増し千
々に心は碎けと流石に夫れと云ひ兼ねて茶煙草盆あどを持來り
てはいろく物語りあどを致して居ります何しろ對手は敵を
討うと云ふ者ゆゑ体に破れのあるやうな事はあひ此女子は未だ

仇なる手弱女あれば何はしか夫れと思ひ染め口には出さねど心
にはたきよ暗れぬ想ひに迫り自づから穂に現はれ打たれく尾花な
らば風を散る姿優しき此方には夫れども更に氣の注かず手堅
き振舞に心頻りと悶かしく夏野に茂る葛の葉の恨むが如く思へ
ども云ひ寄る術のあらぬの梶を絶たる捨小船獨り焦れて居たり
けり餘り思ひ詰たるものと見へ娘は病氣と相成りましたので兩
親の心配一方ならず醫者を招いで診せた所が是は病ひではさ
何か腹に思つて居る事があるから聞て見なさが宜いと云ふの
で娘の氣に入りの女中ふうめと云ふ者に委細を語すとらめ宜し
うございませす私しがお嬢さんにお聞申しませうと娘おしげが居
間に這入つて参りましてらめ扱お嬢さん私くしも貴所が未だた
幼少時分から御奉公を致して居りまして貴所を御姉妹とも思つ
て居りませする位何か貴所に心の内想ひ詰めてお在でなされる事
があるからせうぞ私しへお話し下さいと頼りに申しませるので

娘おしげも顔に時あらぬ紅葉を散し實は斯様くにて那の鹿蔵
さんと云ふお方は天晴勇士ア、云ふ方を取御にお持ち申したい
と思つて居りますと羞さうに語るを聞ておうめは直ぐに双親に
此事を告げると金右衛門手を拍て感じ金ア、流石は俺の娘那
の男は俺でさへ惚れた娘の惚るは無理はさいと頼りに娘を賞めて
居る或時鹿蔵を招いで金時に貴所へお願ひがある外の事でも
ございませせんが私くしが一人娘おしげどうか妻に持ち下さる
やう不束の者ゆゑね氣には召すまいが何卒御承知を願ひたい
鹿蔵にはや折角の思召し添じけなうは候へども大望のある此
身体を免れば何れ成就致した其曉きならば兎に角只今の所では平
にも御大望成就なした後ににお貴ひ下さるか鹿如何にも未熟の
某がしを斯ばかりに思召し下さる段添じけなし望みさへ成就さ
したる望みは併せに任すでござらう金右衛門もいに喜こんで

茲に娘と盃事を致させます然る所鹿藏は一日も早く出で致さ
んと思ひましても金右衛門夫婦に引止められ心からすも仇に日
を送つて居ります内會津正行侯に於ては山川四郎太夫に申し付
け鹿藏が敵と尋ねる大達七郎右衛門の行方を尋ね遣はさんと八
方に家來を馳せ御尋ねに相成りました所此度一人の家來立歸つ
て申すやう越前福井に於て卜傳流の劍客者加川彈正と云ふ者此
度お抱に相成つたりと云ふ事を申し上げた山川四郎太夫鹿藏を
お呼寄せにちつて四探殿様に於ては御身が敵と尋ねる大達七
郎右衛門の行方を諸方に家來を遣はし御尋ねに相成つたる所此
度越前福井に於て加川彈正と云ふ卜傳流の劍客者とお抱へに奇
つたと申すが名前は違ふが流義が同トだ是へ參つて尋ねては如
何でござらう鹿ハ、實以て忝じけなく候仰せに依て福井表へ
乗込みまするでござらうと厚く御禮を申し上げ家に立歸つて松
浦親子にも此起きを告げ是より旅の装ほいをして福井表へ乗込

第十七席 孝子本懐を遂ぐ

み仇討本懐を遂げるの一條

初鹿藏は夜を日に次で越前鯖江と云ふ所へ來り鯖江の本町へ掛
りますると俄かに夏の事であるから大雨降出して來たので傍ら
に一軒の刀屋がございしましたから其軒下へ這入つて雨宿りをし
て居ると中から出て來たのは年頃二十七八奇麗な男、男お武家
様此前で表に立つて居らつしやると濡れますから手前どもへお
這入んなさい武士は刀劍類を好む者であるから見やうと思つて
鹿夫れは千萬忝じけあいな然らば御免と云つて編笠を取り互ひに
見替す顔と顔鹿ヤア、貴所は年來尋ねる民十郎様民ヲ、
其方は鹿藏殿であつたか鹿如何して是にお在でござるか民
何は兎もあれ表にては話しもあらずいさ此方へとあつて奥座敷
に通しまする早速酒肴を申し付けるを女が願て夫れへ持て參り
まする時に鹿藏實に不思議な所でお目に掛りました如何して斯

様亦所に在らつしやいますか 民實は那の節家老長鹿監物殿の
お情けに依て城中を抜出で旭丸の名宛詮議の爲め刀屋と相成て
居りしに段々刀の目が利て來て不思議な縁で當家刀屋仁平方の
番頭となつて居りました所今では當家の一人娘と夫婦になつて
居ると話し所のへ二十二三の女が参りますると 民是が妻のさ
くと申す者であるといひ合せ互ひに挨拶終つて後 民未だ旭丸の詮
議が付かんが御身はどうして是へ参つた 鹿實は貴所がお立出
でに相成つたる後お父上傳五右衛門殿大達七郎右衛門の爲めに
劍術の意恨に依て暗討りに致され逐電仕まつりました夫れゆゑ
民之助様仇討ちを願ひ上げて私くしがお供を致し御出立に相成
たる所情けあや路銀に盡て乞食の群に入り民之助様は病ひの爲
めに足腰立たず所も丁度美濃と尾張の國境ひ木枯堤に於て私くし
は用達しに出で居ります其間に敵大達七郎右衛門の爲めに颯
り殺し遂に返り討ちにありましてございますと聞て民十郎は大

いに絶ろき 民扱はお父上大達の爲めに討れ給ひ弟民之助も返
り討にあつたるか夫れとも知らず花一本香花一ツ手向けず居
つたが聞ば聞程憎くき大達が振舞ひ嘸や鹿藏御無念あらんと
暫らくは涙に暮れて言葉もあし稍あつて民之助 民鹿藏殿其大
遠が行方拙者も共に出立致し尋ねるでござらう 鹿夫れに就て
實はコレノにて猪狩りの時怪物を退治斯々の次第にて會津
侯も大達の行方を御尋ね下されし所越前福井松平忠直侯の家臣
に加川彈正と云ふ卜傳流の劍客者あり名前は違うが流義が同じ
であるから是へ参つて尋ねたら宜からうとの仰せ夫れに依て此
度福井へ乗込んと存上は参つたのでござる 民夫れは何より
然らば同道致さうと致にも始終を語り 民然らば明日出立致さ
うと云ふので其夜の内に仕度を整のへ翌日早朝に相成れば民十
郎鹿藏の兩人此所を出立に及び越前福井の城下へ乗込んで参り
通り筋二丁目三ツ星屋三右衛門方へ泊つて城内の様子を窺はん

と兩人深編笠にて御城下へ来りお堀端へ参りますると向うから
籠が来るのを鹿藏が密と中を窺うと正しく大達七郎右衛門昔し
に變り立派に扮装下り頭にまつて籠に乗り城内へ這入るのを
見届け番小屋へ来て鹿藏笠を取り鹿只今お籠でお這入りにな
つたは何と云ふお方でござるか伺がいたい 番那れは此度お抱
へになつたト傳流の指南番加川彈正と申す御人でござる 鹿只
へ左様で有難い事にござると民十郎の側へ参り 鹿只今御城内
へ這入つたのが大達でござる 民扱はと云つて民十郎馳行んと
なすを押止め 鹿立派に仇討免状のある者お急ぎさるなど民十
郎を制して三ツ星屋方へ立歸り亭主を呼んで町奉行は何と云ふ
お方であるかと尋ねると 主町奉行は早見刑部と仰しやいま
す 鹿左様かどうか案内をして貰いたいと民十郎を差し置いて町
奉行早見刑部の門前へ来り願ひの者であると云つて書面を差出
しました門番より奉行公用方へ渡す公用方より奉行刑部殿へ渡

すと早速夫れを抜いて見ると細川越中守家來浮田傳五右衛門梓
民之助並びに下郎鹿藏當家抱への加川彈正本名大達七郎右衛門
と云ふ者傳五右衛門を殺したる者おれば仇討ちを願うと云ふ書
物容易あらん事ゆる鹿藏を招き段々調べて見ると今までの一伍
十什残らば鹿藏物語りを致しましたるから追て沙汰に及ぶ泊り
は何れだと云ふので 鹿通り筋二丁目三ツ星屋三右衛門方に
さいまする 刑左様か今日は退れと云つて鹿藏を歸して置て右
書物を家老の柏木内匠酒井外記に是を見せると右二人の家老
よりお付家老本多内藏介殿へ申し上げる内藏介右書物を御披見
にあらと

一 恐れながら書付けを以て願ひ上げ奉まつり候
一 當番中加川彈正と申する者前名大達七郎右衛門と申し細川
越中守家來と相成り居り候當時寛永四年十二月二日愚父浮
田傳五右衛門を暗討ちに致し逐電仕まつり其上私くし弟民

之助と申する者を美濃國木枯堤に於て返討ちに仕まつり候
不届者何卒寛大のお取計ひを以て敵討ちの義を願ひ上げ奉
まつり候

浮田民十郎改め

民之助

下部鹿蔵

斯様認ためてある又細川家から出た死状は

一此方の臣大達七郎右衛門と云へる不良候奸の臣同藩中浮田
傳五右衛門と申する者を漫りに暗討ちになし國表を透電仕
つり候此度浮田の悴民之助父の仇討ちを願ひ出で候に就き
其志さしを感と今般是を差許す依て右民之助何方に於て敵
に出逢ひ候とも其志さしを憐れみ本懐を遂げべく候やう取
計ひ願ひ参る

寛永四年八月

細川越中守

諸國城主

并に辻浦々役所へ

右の書付けが揃つて居りますから儘かな様ソコデ本多内藏介殿
より酒井外記拍木内匠の兩人へ明日斯様く取計へと何か計畧
を申し付けられました翌日に至ると本多内藏介殿加川彈正方へ
其所許當家へお抱へになつてより未だ親しく御交りも致さんが
今日鹿酒一献差上げたく御出で下さるやうにと申し送りました
彈正大いに喜び此人の氣に入れば又祿高を増して出世も早い
と土産物あをて持て参り先づ寒暖暑冷の挨拶終り夫れへ酒肴が
出で四方山の話を致します内時に彈正殿尊公は武者修業
をして日本中を廻られたと申すが左様か如何にも大旨には
似たれども拙者未だ修業中に一度も負けな事はござらん内左
様か某がしは當家へ身を寄せん以前九州地方を修業致して居つ
た鹿本細川越中守の指南番浮田傳五右衛門と云ふ者に出逢

うてな 彈ハ、内止せば宜ひのに拙者の方から手練拜見と云
つたので愈よ勝負をした所浮田の爲めに小ッ酷ひ目に出逢ひ
つさへ彼れが大言を拂ひ如何にも心外であらんが何とも仕方が
あい拙者の腕では切捨る事が出来ない何かあつたら彼れに耻辱
を與へてやらうと心得て居る是ぞ彈正が酒に酔つたるを見計ら
ひ斯言葉を引き掛けて申したを性來愚かあ奴ゆゑ 彈左様で浮田
の爲めに後れを取つて夫れを意恨に思召してお在でなさるか
内イヤ意恨に思ふと云ふ次第ではないが如何にも心外だ 彈ハ
、夫れは拙者が先年お胸を晴しました内ハ、ア夫れは又どう
して 彈實は某がし浮田傳五右衛門と試合に及びし所彼後れを
取つたるを心外に心得殿へ讒言を構へましたのでとさいます
内ハ、ア其許は細川家の家來であつたか 彈御意にさいます
彼が讒言の爲め食祿を召上げられましたので如何にも残念夫れ
ゆゑ六年以前十二月二日彼を殺して立退きましたは不思議を辨

でござる 内ア、左様か夫れは忝じけあひ私が恨に思つて居た
浮田の爺を殺して呉れたか夫れを聞いて消々した夫れから先年倅
の民之助と云ふ者親の仇を討んとせしも路用に盡て乞食の群に
入り足腰利ざるを美濃と尾張の國境ひ木枯堤に於て返り討ちに
致し敵の根を絶しましたとさる 内夫れは宜い事をやつた所へ
一人参りまして ○申し上げます町奉行刑部様御家老酒井様並
びに柏木様お出でにござひます 内ア、左様か……加川殿矢張
當家の御家來だ同席致しても苦しうない……是へお通し申せ
○ハッ願て夫れへ三名の方々お出でに相成り一通りの御挨拶が
相済と 酒早速でございまするが斯様な書物が上りましたから
御覽に入れませす 内ハ、ア何ぢや 酒敵討ちの免狀にございま
す是が敵討ちの願書で 内左様か 酒只今讀上げますと細川家
より出た免狀と敵討ち願書と二通を高らかに讀上げた 内扱彈
正殿只今尊公は元細川家の家來であつて浮田傳衛五右門を殺害

なし又作民之助を返り討ちに致したと申したき此度浮田の一子
民十郎改たぬ民之助下郎鹿蔵の兩人仇討ちを致さんと此福井へ
乗込んで参り斯様な願書を差出した「彈正は是を聞てギョツとし
た是は飛でもあゝ事を喋舌たと思つたが今更仕方がない 彈其
民十郎と申する者はお上のお手討ちに相成た筈でござる 内何
しろ斯様も願書が上つた然る上は御身に宅番を付ける卑怯未練
の振舞いさく敵を討れさつしやひ民十郎御手計に相成たと其方
は申すが未だ存命して居るのだと大小を取上り大勢にて周圍を
取り巻きモウ逃げる事も出来ぬ斯して置て内藤介殿殿様御前へ
罷り出で内此度お召抱へに相成たる加川彈正と申する者は細
川越中守の御來指南番浮田傳五右衛門を暗討ちにあし又伴の民
之助と申する者を返り討ちに仕つり此度伴民十郎並びに下郎鹿
蔵の兩人敵討免状を添へ敵討ちの義を願ひ出でましてございま
すと委細を申し上げたので殿様お怒りあつて 殿「斯様も者と

も知らず家來にあしたるは予が生涯の誤まり充分に仇討ち致さ
せいどの御せ是に依つて浮田民十郎佐野鹿蔵へ向つて愈々熊見ヶ
原に於て仇討ち致すやうに又日限の所は其方都合宜しき日を申
し出でるやう兩人は涙に暮れ有難き事にございませる左様され
ば茲に二十日間の猶豫を願ひまする「夫れは餘り長いではないか
鹿「イエ國書へ沙汰を致しますると云ふので茲に二十日間の日延
を致し其間に大達が逃げないやうに充分守つて居ります茲に
鹿蔵は書面を認ため細川家へ一封又薩摩家佐野出羽守の許へは
一「度亂心を致し家出をせしたるが云々の次第にて浮田傳五右衛
門に助けられ此度主人の仇討ちを致すと云ふ事を認ため又民十
郎よりも委細を認ためて親の許へ宛申し送りました所佐野出羽
守が家にては一旦死んだと思つた鹿十郎存命して居るのみなら
ず此度主人の仇討ちを致すと云ふので大いに喜び上へ申し上
げたるに依つて薩州家より仇討ち見届けの爲め一人佐野家より一

佐野鹿十郎 (六十八百)

人福井へ乗込んで参る又浮田の宅に於ても細川家へ申し上げを
したるから細川家より一人長岡盛物殿家來一人是又福井へ乗込
んで参りまする只今と違ひ其時分の事ゆる二十日間位は費り
ます愈よ見届けに参つたる人も到着致したるに依つて明日仇討の
義を願ひなまつると申し上げたる所如何にも差許すとあつて時
は寛永十一年八月二日越前熊見ヶ原に於て仇討ちと云ふ事に相
成り殿様に於ても是をいたいたいの仰せ依つて座敷を拵らへ葵の御
紋付き幔帳を張廻らし正前へ越前の大主忠直侯お扣へに相成り
本多帯刀本多内藏介柏木内匠酒井外記を始め細川家及び薩州家
佐野長岡兩家等より出張致されたる人々も御扣へに相成て居り
ます大達七郎右衛門は黒羽二重の拾其身は袴を付け袴鉢巻を
して旭丸の一刀を引提げ夫れに現はれたり民十郎は紋付きの衣
類に下には鎖帷子を着し袴鉢巻の用意を遂げ後見佐野鹿十郎馬
の衣類に段だら染の袴を着し同じく袴鉢巻の用意を遂げ床机に

佐野鹿十郎 (七十八百)

凭て見て居りまする双方へ土器にて水を下さる夫を大地に打付
けて碎きます
討つ者も討れる者も土器の
三浦荒次郎の辭世の如く人は土より生じて土に入るものされゆ
ゑ土器を碎いて元へ返ると云ふ意味でございます浮田民十郎一
刀を引提げ民ヤヲレ大達七郎右衛門當時加川彈正我が父を六
年前以前暗討ちになし剩さへ御主人寶物旭丸の一刀を盗み取り逐
電あし又我が弟民之助を木枯堤に於て返り討ちにおしたるも銀
難辛苦の末天の恵みを以て此所に仇討ちをあすいさ尋常に勝負
しる鹿藏大音揚げ鹿我が御主君二人を殺害なし又大井川に於
て卑怯にも送還を返し我れを水中に投じ殺さんとはおしたるぞ
汝如き悪人を天道奈何で助くべけんや此所に我れ助太刀を致す
悟に及べ大達七郎右衛門七しかれ者の小歌とやら汝如き者

りの手を力に任せて捻り上げたのでモウ兩腕が利なくなつて仕
 舞た 鹿「サア民之助殿を此手で翫り殺したかどエイノノ力
 を入れて左右の手を捻り上げ 鹿「サア若旦那は太刀を持つたが
 ば宜うございます」民十郎刀を持って立上る大達は太刀を持つたが
 左右の手は筋が釣つて利き然るに民十郎が苛つて即ち一
 は腦上より願まで切下げられ血煙り立つてド一と倒れるを民十
 郎止めの一刀を貫刺ぬく鹿藏は主家の敵と鳩尾を刺通す是に依
 て首尾能く本懐を遂げ其日は一先宿屋へ引取り大達の死骸に
 於てはお取捨になり並木の肥料と相成りました是にて民十郎
 鹿藏の兩人は越前家よりお褒めにお言葉を下し置れました此時
 大達七郎右衛門の差料と致して居りしは細川家の重寶旭丸とて
 先年大達が御寶藏を破り盗み出した次第を逐一言上及び右
 旭丸を携へて一度肥後國熊本へ立歸り細川の大主へお目通り
 に及び此度の次第を精しく申し上げ又旭丸の名劍を御返納に及

助太刀ありとて何條恐れん美事返り討ちに致し呉れん 民其廣
 言聞耳持ぬ観念せよとあつて民十郎備前長船の一刀を引抜く鹿
 藏は後見ゆる後ろに扣へて見て居ります大達心得たりと旭丸の
 一刀鞘を拂ひ上段下段と打合せしが中々大達の腕前民十郎の及
 ぶ所に非ず動々ともすると危うくなるを六尺棒を中へ入れて越
 前家の家來「疲れたから退れ」民十郎には水を呑せるが大達には水
 を下さいと云はさければ呑せない鹿藏は 鹿「若旦那少しお休
 み 鹿「ニ殺しは致しませんと志津三郎兼氏の一刀を抜拂ひ 鹿大達
 來れとあつて一上一下益々秘術を盡して戦かつたが鹿藏も
 殺して仕舞ては民十郎親の敵が討てないから拳打にして右の
 腕を健たかに打つたるから刀をホロリ取落す鹿藏も刀を投捨て
 鹿「サア組め組付て來るのを鹿藏大力を現はし大達を夫れへ捻伏
 せ 鹿「能くも此手で御主君を殺したなど右の手を捻り上げ又左

びました大主大いにか喜びに相成り二百石に加増とあり以上
 七百石とあり以前刀屋仁平の娘おさくを呼迎へて御新造となし
 傳五右衛門の家を相續致されました又傳五右衛門の後家に於て
 は縁の黒髪を下ろして尼とあり無き良人の菩提を吊らう事に相
 成りました又鹿藏に於ては細川の大主又民十郎へも暇を告げて
 薩州家へ立歸り佐野出羽守の家を襲ぎ以前の約束であるに依て
 會津若松侯お出入り町人松浦金右衛門の娘おしげを申し受け是
 を妻と致され一子を設け是で二代目鹿十郎が出来ましたが是は
 從來聚家の家でございませ又一度民之助に想いを掛け家出を
 したる阿波國徳島淡路屋佐平の娘なるに於きましては大井川
 の手前島村澤屋金右衛門方にて兩親廻國に出でたる所鹿藏に茲
 にて邂逅ひ途に赤坂宿に参りまして娘おなるを引取り徳島へ還
 れ歸つて是は養子を迎へ其家も繁榮致された茲に於て佐野
 一家及び浮田松浦等何れも其家榮へ是ぞ悪熾んにして天に克ち

天定まつて人に克天の恵みを得て忠孝兩道を全たうして越前館
 見ヶ原に於て仇討ち本願を遂げました探長々講演仕まつりまし
 たる佐野鹿十郎是を以て結局と仕まつります……
 仇熊見ヶ原 佐野鹿十郎 大尾

明治三十一年四月三十日印刷
 明治三十一年六月三日發行



口演者 春日岩吉
 速記者 宮澤彦
 發行所 本城松之助
 東京神田區新乘物町十一番地
 東京神田區南元町二十四番地
 東京神田區鍛冶町三十三番地